



成法寺遺跡 33

〈第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書〉

1991年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



正誤表

頁	行	誤	正
5 P	2行目	昭和56年5月に	昭和56年7月に
43 P	16行目	2個 (SP15) の柱穴内には径22cmを測る。平面の形状がほぼ円形の柱腹が見られる。	SP15の柱穴内には径22cmを測るほぼ円形の柱腹が見られる。
54 P	7行目	土馬 (35)	土馬 (37)
69 P	12行目	土鍾 (13)	土鍾 (13)
76 P	下から4行目	第Ⅲ様式の壺 (36)	第Ⅲ様式の壺 (35) ⁴
76 P	下から3行目	長頸壺 (37・38)・甕 (39~41) があ	長頸壺 (36・37)・甕 (38・40) があ
76 P	下から2行目	庄内式甕 (42~49)・高杯 (50~52)・鉢 (53)・小型の鉢 (54)・小型の壺 (55) がある。	庄内式甕 (41~48)・高杯 (49~51)・鉢 (53・55)・小型の鉢 (54) がある。

成法寺遺跡

〈第1次調査～第4次調査・第6次調査報告書〉

1991年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、生駒山地の西麓と、そこから広がる河内平野のほぼ中央部にあります。この信貴生駒山地の高安山麓一帯は高安山古墳群として全国的にも知られている多くの古墳が遺存している地域であります。

またその西に広がるこの河内平野は古来より幾度となく旧大和川の氾濫を受けながらも豊かな水と肥沃な土壌に恵まれ、人々の生活や活動の場として重要な役割を果たしてきた所であります。

一方、現在の八尾市は、大阪都市圏の一角を占め近年市街化が急速に進み近代都市へと大きく変貌しつつあります。このことは私達の生活に便利さや、快適さを与えてくれる非常に素晴らしいことですが、反面、重要な文化財が開発によって破壊され失われる危険にさらされています。

そこで私共は、これらの文化遺産を後世に永く伝えるため、事業者の協力を得て埋蔵文化財の事前の発掘調査を実施し、その記録保存に努めている次第であります。

今回、昭和57年度から昭和62年度にわたり実施しました成法寺遺跡の第1次調査から第4次調査及び第6次調査の整理が完了しましたので、これをまとめた報告書として刊行することに致しました。

本書が学術研究の資料として、又は文化財保護及び啓発に広く活用して頂ければ幸であります。

最後になりましたが、この発掘調査に対し、ご協力賜りました関係機関の皆様に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成3年9月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 福島 孝

序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が昭和57年・58年・62年・63年・平成2年度に実施した発掘調査報告を集録したもので、内業整理および本書作成業務は各現地調査終了後に着手し、平成3年8月31日をもって終了した。なお、報告書の末に八尾市教育委員会からの指示書を掲載した。
1. 本書に収録した調査報告は、下記の日次のとおりである。
1. 本書の構成・編集は高萩千秋・原田昌則が行い、文責は各例日に明示した。
1. 本書記載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2500分の1（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の「八尾市埋蔵文化財分布図」（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。
1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海面である。
1. 本書で用いた方位は第1次・第2次・第6次調査が磁北、第3次・第4次は磁北を示している。
1. 遺構は下記の略号で表わした。
掘立柱建物 SB 井戸-SE 土坑-SK 小穴-SP 溝-SD
1. 実測図の縮尺は、遺構が20分の1・40分の1・50分の1・100分の1を基準とし、遺物は4分の1に統一した。
1. 遺物実測図は、断面の表示によって以下のように分類した。
弥生土器・土師器・瓦器-白 須恵器・陶器・磁器-黒 瓦・石製品-斜線
1. 各調査に際しては、写真・実測図の他にカラーズライドも多数作成している。市民の方々が広く利用されることを希望する。

目次

はしがき

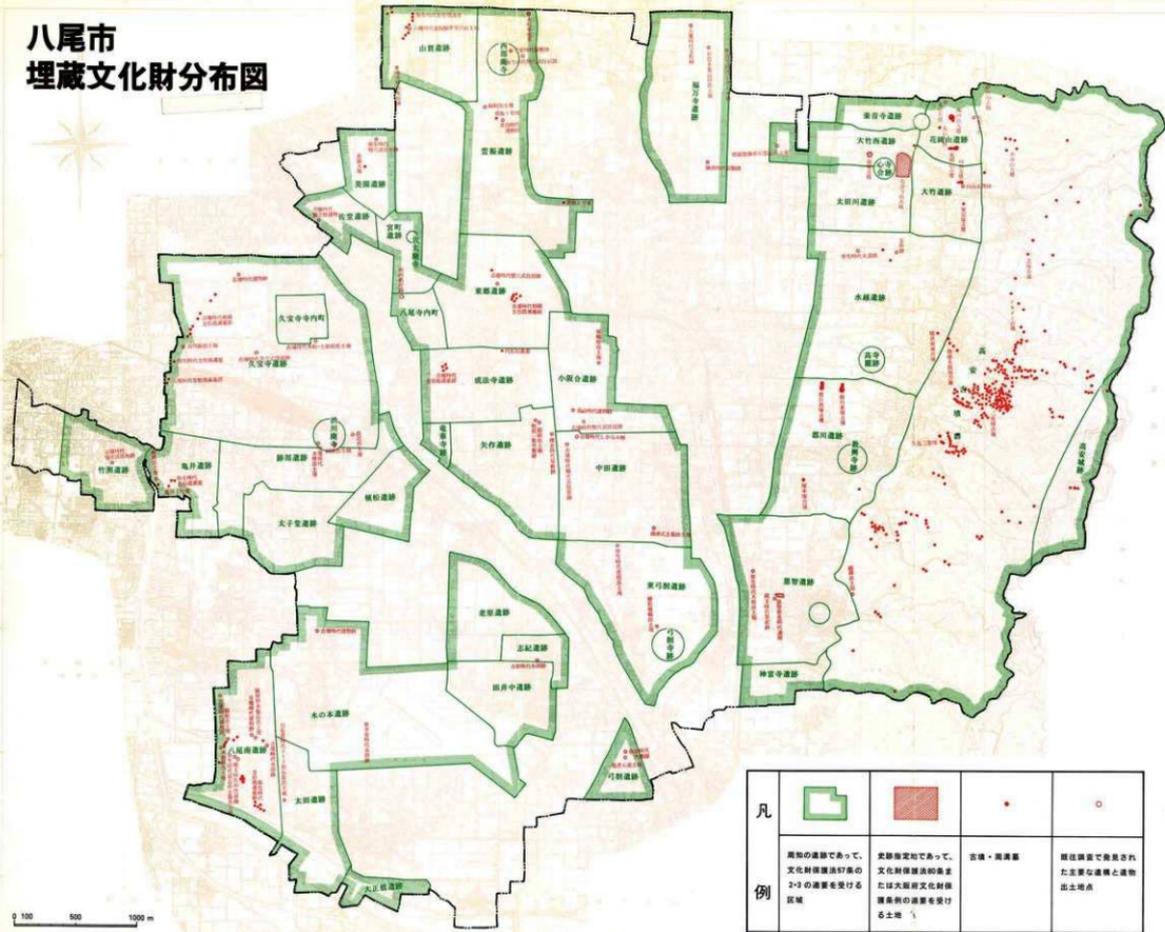
序

八尾市埋蔵文化財分布図

第1章 地理・歴史的環境

第2章 第1次調査（SH82-1）発掘調査報告	1
第3章 第2次調査（SH83-2）発掘調査報告	5
第4章 第3次調査（SH87-3）発掘調査報告	25
第5章 第4次調査（SH88-4）発掘調査報告	39
第6章 第6次調査（SH90-6）発掘調査報告	85
第7章 指示書	101

八尾市 埋蔵文化財分布図



凡 例				
	周知の遺跡であって、文化財保護法17条の2・3の適用を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法19条または文化財保護法第19条第1項の適用を受ける土地	宮・高瀬墓	居住跡等で発見された主要な遺構と遺物出土地点

第1章 地理・歷史的環境

第1章 地理・歴史的環境

成法寺遺跡は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置する弥生時代中期から室町時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画上の八尾市光南町1～2丁目、清水町1～2丁目、南本町1～4丁目、高美町1～2丁目、陽光園1丁目、明美町1丁目、松山町1丁目の東西1.1km、南北0.6kmに分布している。

成法寺遺跡の位置する八尾市の中央部の地形は、東を生駒山地、西を上町台地、南を河内台地、北を淀川に画された河内平野の南東部に当たる。河内平野の南部は、大和盆地・河南山地の水を集めて流下していた旧大和川の沖積作用によって形成されたものである。宝永元年(1704)に現在の和川が付け替えられる以前の旧大和川は、八尾市二俣付近で長瀬川と玉串川に分流して北流した後、上町台地の北部を経て大阪湾に注いでいた。両河川のほかに恩智川、楯根川、平野川といった中小河川が放射状に展開しており、これらの河川の幾多にわたる氾濫により、現在の地形が形成されたものと推定されている。

成法寺遺跡の位置は前述した水系で区別すれば、長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地にあたる。この低位沖積地は、南北方向に形成されており、肥沃な土壌と豊富な水量を背景に、水稲耕作の早い段階から集落が営まれていたようで、遺跡の分布密度も高い。当遺跡周辺では、東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡、南に矢作遺跡・竜幸寺跡、西に久宝寺遺跡、北に東郷遺跡が近接している。

当遺跡は、昭和56年度に八尾市教育委員会が光南町1丁目で行われた発掘調査で、弥生時代後期から古墳時代後期の遺構・遺物が検出され、遺跡として認識されるようになった。その後、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会により、現在(平成3年3月)に至るまで14回におよぶ発掘調査が実施されている。その結果、弥生時代中期から室町時代に至る遺構・遺物が検出されている。以下、これらの成果をもとに各時期ごとに遺跡内の推移を概観してみる。

弥生時代中期(畿内第Ⅲ～Ⅳ様式) この時期の遺構には遺跡の北東部の⑫で検出された方形周溝墓がある。1基のみの検出であるため不明な点が多いが、近接する位置で同時期の遺物がまとまって出土した自然河川が検出されており、付近に居住域が存在していた可能性が高い。

弥生時代後期(畿内第Ⅴ様式) 遺跡の東部と西部で検出されている。東部の⑭では、弥生時代終末に比定される多量の土器類が出土した溝が検出されており、弥生時代から古墳時代に移行する時期の土器の様相を知る上で重要であろう。一方、西部の①地点では土器溜が検出されたほか、近接する⑮では遺物が多量に出土した溝が検出されており、この付近に居住域の中

心が存在したようである。

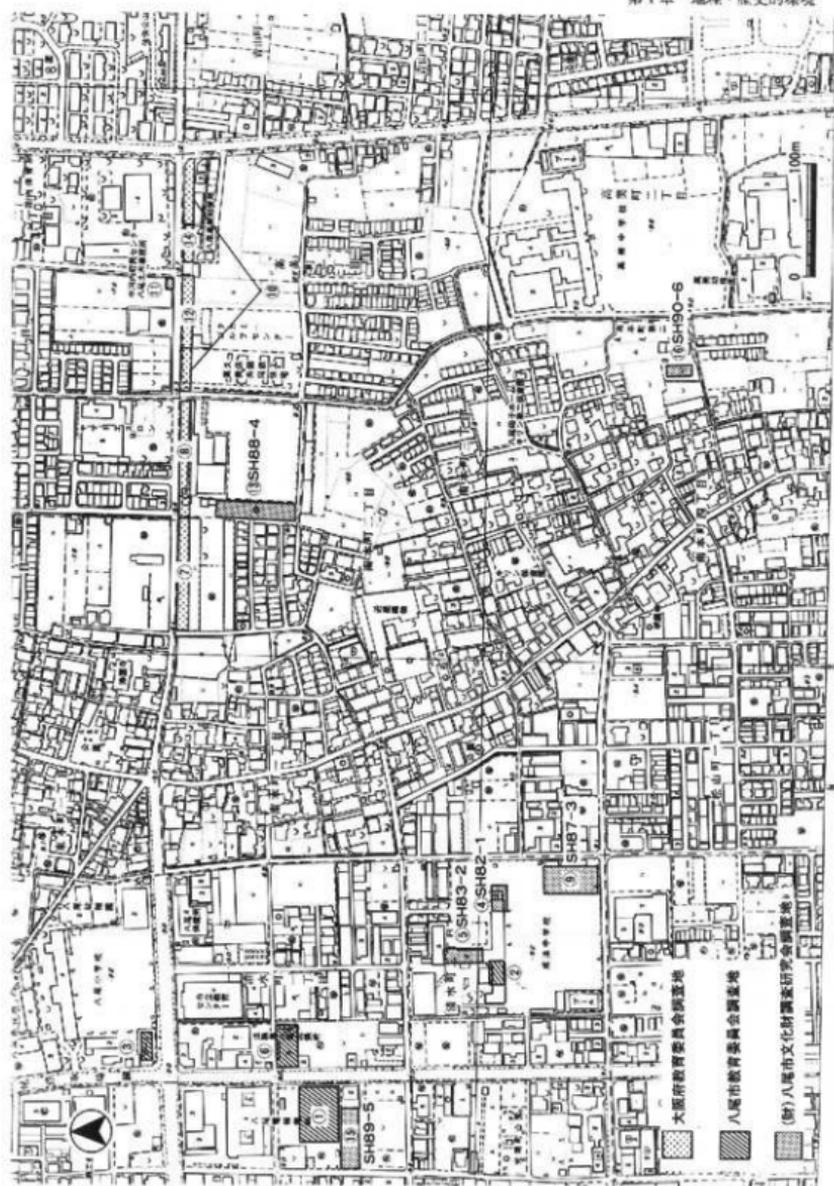
古墳時代前期（庄内式期～布留式期） 庄内式期古相では①で前代と同位置で居住域が営まれるほか、新たに⑦⑬で居住域が検出されており、集落が分散したことが窺われる。⑬では方形周溝墓と各遺構が近接して検出されており、墓域と居住域との明確な区別は無かったようである。続く、庄内式新相の居住域は⑤⑬で確認されている。同時期の墓域が①⑦⑬検出されている。居住域と墓域の関係では、⑬では前代と同様、居住域と墓域が近接している。一方、遺跡の西部では⑤の居住域に対して①の墓域が推定されている。また、⑦で検出された周溝墓（S×1）は不明な点もあるが、検出部分からみて円形周溝墓の可能性が高く、この時期の墓制を考える上で一石を投ずる結果となった。布留式古相の段階には居住域が⑬地点から⑧⑫に移動したようで、⑫では竪穴住居8棟、井戸1基、土坑4基が検出されている。

古墳時代中期 この時期の居住域は、前代の集落位置からやや東に移動した⑬で竪穴住居1棟のほか土坑、溝、小穴等が検出されている。そのほか、⑬では埴輪円筒埴1基が検出されている。

古墳時代後期 この時期の居住域は①で掘立柱建物8棟、⑤で掘立柱建物1棟が検出されており、遺跡の西部に集中する傾向がある。

奈良時代 ①⑨でこの時期の居住域が検出されている。特に、⑨では居住域の中核を構成する掘立柱建物3棟が検出されている。

室町時代 ⑬では溝で囲繞された館と推定される遺構が検出されており、この時期の村落の様相を知る上で貴重な資料と言えよう。



第1図 調査地周辺図

周辺の既往調査一覧表

番号	遺跡名	調査年月	調査主体	調査の理由	掲載報告書
①	成法寺	昭和56年 7月～9月	八尾市教育委員会	電々公社社道建設	「成法寺遺跡―八尾市光町1丁目29番地の調査―」八尾市教育委員会1983. 3
②	成法寺	昭和56年 8月	八尾市教育委員会	成法中学校舎増改築	「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」八尾市教育委員会1983. 3
③	東郷	昭和57年 3月	八尾市教育委員会	八尾小プール建設	同上
④	成法寺(第1次) (S II82-1)	昭和57年 6月～7月	八尾市教育委員会 当調査研究会	成法中学校舎増改築	「昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査―その成果と概要―」(財)八尾市文化財調査研究会1983
⑤	成法寺(第2次) (S H83-2)	昭和58年 7月	当調査研究会	成法中学校舎増改築	「昭和58年度事業概要報告」 (財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984. 4
⑥	成法寺	昭和59年 7月	八尾市教育委員会	貸事務所建設	「八尾市内遺跡 昭和59年度発掘調査報告」八尾市教育委員会1985. 3
⑦	成法寺	昭和60年 11月～12月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概報Ⅰ」 大阪府教育委員会1986. 3
⑧	成法寺	昭和61年 7月～10月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概報Ⅱ」 大阪府教育委員会1989. 3
⑨	成法寺(第3次) (S H87-3)	昭和62年 5月～7月	当調査研究会	成法中体育館	「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告116 1988
⑩	成法寺	昭和62年	大阪府教育委員会	府道拡幅	
⑪	東郷(第26次) (T G88-26)	昭和63年 1月	当調査研究会	電話通信地下施設	「八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告16 1988
⑫	成法寺	昭和63年 10月～12月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概報Ⅳ」 大阪府教育委員会1989. 3
⑬	成法寺(第4次) (S II88-4)	昭和63年 11月～12月	当調査研究会	中継所建設	「八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度」(財)八尾市文化財調査研究会報告25 1989
⑭	成法寺	平成元年 9月～10月	大阪府教育委員会	府道拡幅	「成法寺遺跡発掘調査概報Ⅴ」 大阪府教育委員会1990. 3
⑮	成法寺(第5次) (S H89-5)	平成元年 10月～11月	当調査研究会	共同住宅建設	「八尾市文化財調査研究会年報 平成元年年度」 (財)八尾市文化財調査研究会報告28 1990
⑯	成法寺(第6次) (S H90-6)	平成2年 2月～3月	当調査研究会	共同住宅建設	

第2章 第1次調査(S H82-1)発掘調査報告

例 言

1. 本書は、八尾市清水町2丁目2-5で実施した市立成法中学校増築工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第1次調査（SH82-1）の発掘調査業務は、昭和57年6月21日から6月31日までは八尾市教育委員会が実施したが、昭和57年7月1日以降は（財）八尾市文化財調査研究会が調査を引き継ぎ実施した。
1. 現地調査は昭和57年6月21日から6月31日までは原山昌則、昭和57年7月1日から7月12日にかけては西村公助が担当した。調査面積は207㎡を測る。調査においては北尾耕三・中野慶太・中野健太郎・野田雅彦が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し平成2年8月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-麻田優・柏本幸寿・小林博・田中明美・長野琢磨・益本浩・松岡利行、図面レイアウト-成海佳子・原山、図面トレース-成海・中西隆子、遺物写真撮影-成海が行った。
1. 本書の執筆および編集は原田が行った。

本文目次

I	はじめに	5
II	調査概要	5
	1. 調査方法と経過	5
	2. 基本層序	5
	3. 検出遺構・出土遺物	7
III	まとめ	24

插图目次

第1图	調査地周辺図	6
第2图	SE-1平断面図	7
第3图	検出遺構平面図	8
第4图	SK-1平断面図	9
第5图	SK-1出土遺物実測図1	11
第6图	SK-1出土遺物実測図2	12
第7图	SK-1出土遺物実測図3	13
第8图	SK-1出土遺物実測図4	14
第9图	SK-1出土遺物実測図5	15
第10图	SK-1出土遺物実測図6	16
第11图	SE-1・SK-3出土遺物実測図	17
第12图	SP-8・SP-9・SP-10・SD-2・SD-4・SD-5出土遺物実測図	19
第13图	落ち込み・第5層出土遺物実測図	20
第14图	第5層出土遺物実測図	21
第15图	第3層出土遺物実測図	22

図版目次

図版一	調査区全景
	SK-1
図版二	拡張区全景
	SD-2遺物出土状況
図版三	SK-1出土遺物 1
図版四	SK-1出土遺物 2
図版五	SK-1出土遺物 3
図版六	SK-3・SP-1・SP-9・SP-10・SD-2出土遺物
図版七	第5層・第3層出土遺物

I はじめに

成法寺遺跡は、昭和56年5月に八尾市光南町1丁目26番地で八尾市教育委員会が実施した発掘調査で存在が明らかにされた遺跡である。この調査では弥生時代後期の土器溜3ヶ所、古墳時代前期の方形周溝墓4基、古墳時代後期の掘立柱建物5棟が検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。また、同年8月には前記の調査地点より東200mに存在する八尾市立成法中学校の校舎増築工事に伴う発掘調査が八尾市教育委員会によって実施され、古墳時代前期から中世に至る遺物包含層の存在が認められ、成法寺遺跡が東部に広がることが確認された。

このような状況下、八尾市教育委員会施設課から八尾市立成法中学校の校舎を増築する旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。校舎の増築予定地は、前年度調査地点の東80m地点に当たることから文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると判断し、申請者へその旨を通知した。発掘調査は昭和57年6月21日から八尾市教育委員会が実施したが、7月1日以降は、財団法人八尾市文化財調査研究会が調査を引き継いで実施し、7月12日をもって現地調査を終了した。調査面積は207㎡を測る。

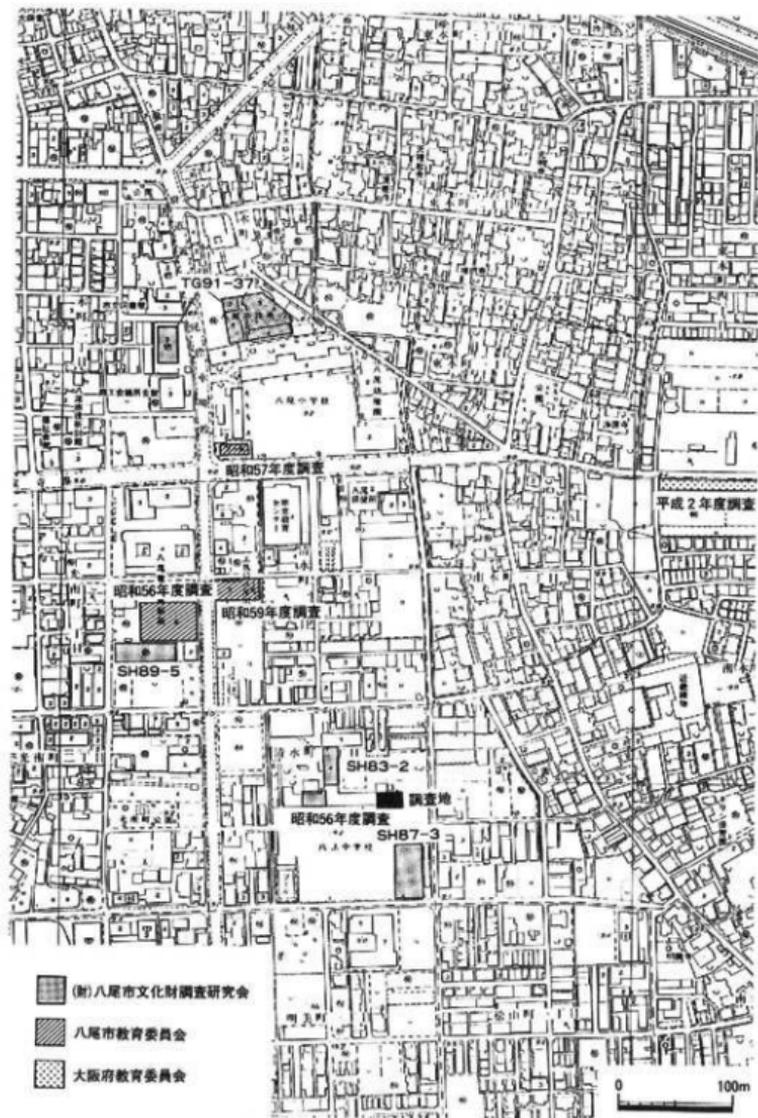
II 調査概要

1. 調査方法と経過

調査では校舎増築予定地に東西20m・南北9mの調査区を設定した。掘削に際しては、現地表下1.0m前後に存在する盛土および旧耕土までを重機により排除し、以下は層理に従って人力掘削を実施した。その結果、表土下1.5m（標高7.6m）に存在する第6層茶灰色砂混じり粘質土上面で奈良時代および近世に比定される遺構が検出された。なお、調査区の西端で検出された土坑の広がりを目指すため調査区の北西部で東西3m・南北7mを拡張した。検出された遺構は、奈良時代に比定される土坑3基（SK-1～SK-3）、溝7条（SD-1～SD-7）、小穴16個（SP-1～SP-16）、落ち込み1ヶ所（落ち込み1）のほか、近世に比定される井戸1基（SE-1）である。

2. 基本層序

調査地の層序は、層厚0.8m前後の盛土を除去すると層厚0.15m前後を測る第1層暗灰色粘質土（旧耕土）に達する。続く、第2層暗灰色粗砂混じり粘質土は、層厚0.1～0.25mを測る。酸化鉄・マンガンが斑点状に付着するもので床土の性格を有している。第3層青灰色粗砂混じり粘質土は、層厚0.05～0.2mを測るもので鎌倉時代後期以降の遺物を包含している。第4層灰茶褐色砂混じり粘質土は、層厚0.1～0.4mを測るもので奈良時代に比定される遺物が少量出



第1図 調査地周辺図

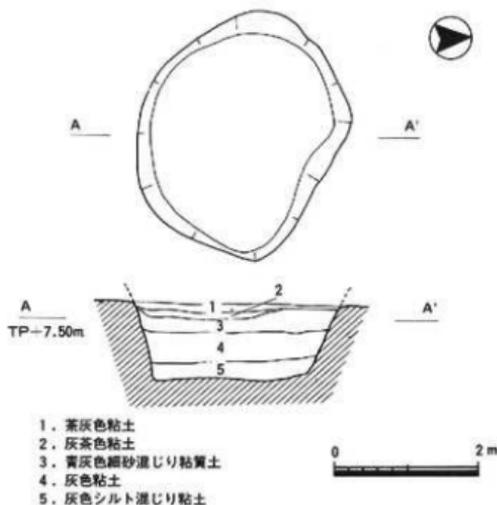
土している。調査区の東部ではこの上層上面で耕作に伴う溝が検出されている。第5層茶灰色細砂混じり粘質土は、調査区の中央部から西部にかけて広がっている。層厚は0.1~0.2mを測る。第6層茶灰色砂混じり粘質土は、層厚0.15~0.5mを測るもので、調査区の中央部から東部にかけてほぼ水平に堆積しているが、西部において削平を受けたためか、上面の起伏が著しい。この土層上面をベースとして奈良時代に比定される遺構が構築されている。第7層灰色粘土は、層厚0.4m以上。無遺物土層である。

3. 検出遺構・出土遺物

井戸 (SE)

SE-1

調査区の中央部に検出した。平面の形状が東西方向に長い楕円形を呈する素掘り井戸で、東西幅3.6m・南北幅3.0mを測る。掘形の断面の形状は逆台形で深さ1.1mを測る。内部堆積土層は上層から茶灰色粘土・灰茶色粘土・青灰色細砂混じり粘質土・灰色粘土・灰色シルト混じり粘土である。遺物は茶灰色粘土から伊万里焼の碗の細片が出土したほか、灰色粘土から瓦器碗の細片、最下層の灰色シルト混じり粘土から須恵器の壺(151・152)が出土した。なお、第6層上面で検出したが出土遺物からみて本来の構築面は第2層上面と推定される。



第2図 SE-1 平面断面図

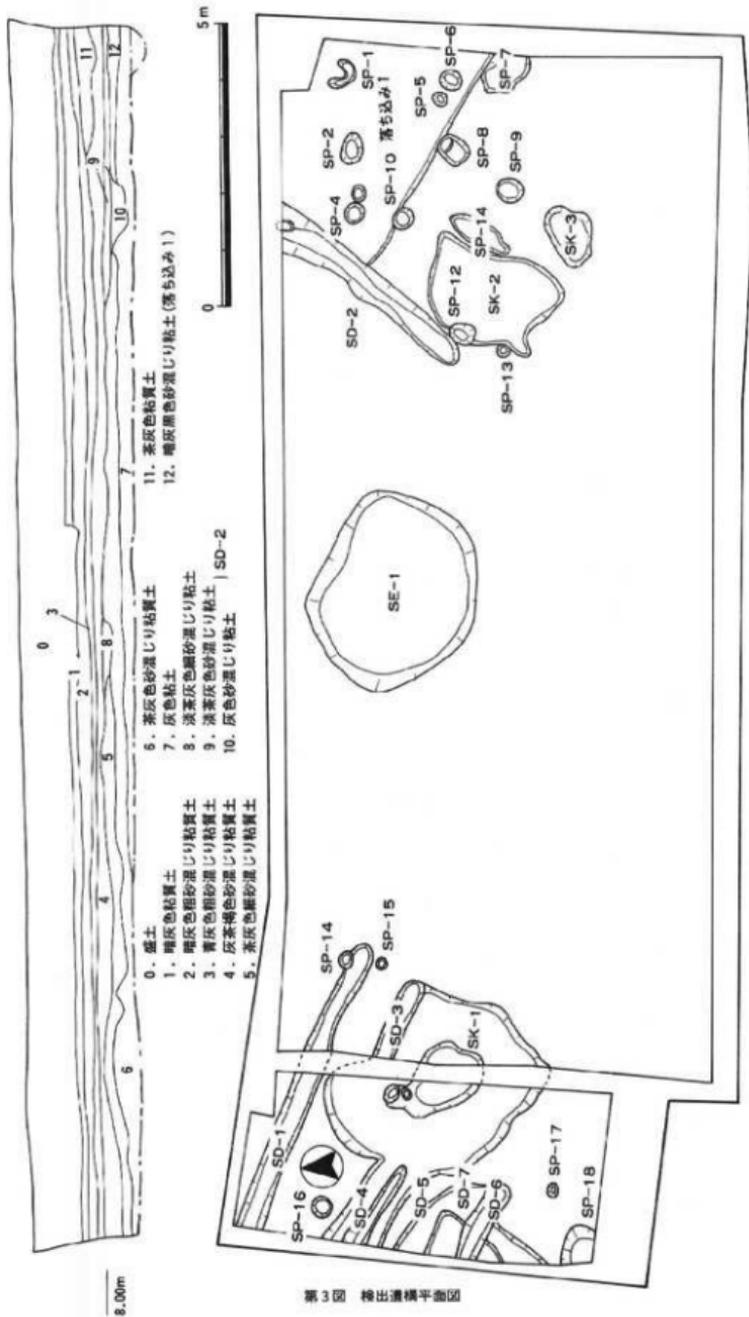
土坑 (SK)

SK-1

調査区の西部で検出した。平面の形状は不定形を呈するもので、西部でSD-4・SD-5と合流し、北東部がSD-3に切られている。東西幅3.0m・南北幅3.8m・深さ0.2mを測る。断面の形状は皿状を呈するが、中央部に0.1m程度円形状に窪む部分がある。内部堆積土は暗茶褐色混じり粘土である。

SK-1 出土遺物

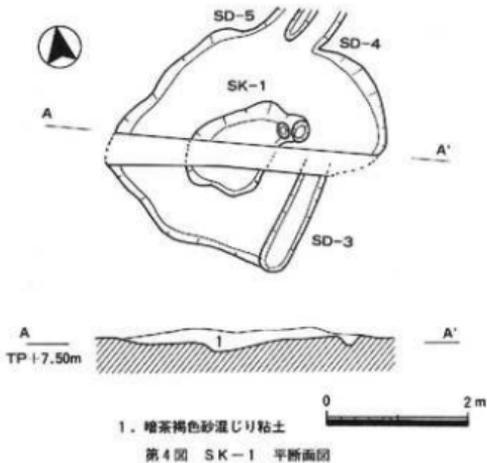
遺物は8世紀前葉~中葉に比定される土師器・須恵器を中心とする土器類で、総量はコンテナ箱に3箱程度出土したが、大半が細片で完形に成り得たものは少なく、そのうち図示できた



第3図 検出遺構平面図

ものの総数は150点(1~150)である。

土師器小皿は20点(1~20)図示した。数値の違いからⅠとⅡに区別した。Ⅰは口径が15cm前後・器高2cm前後のもの、Ⅱは口径が16.5~19.5cm以上、器高3cm前後のものである。さらに形態の違いからⅠで4類(ⅠA~ⅠD)、Ⅱで3類(ⅡA~ⅡC)に区別した。ⅠA類は体部が斜上方に伸びた後口縁端部付近で小さく外反し端部が上方へつまみ上げられるもの



第4図 SK-1 平面図

(1)、ⅠB類は口縁端部が内側に肥厚するもの(2)、ⅠC類は口縁端部が丸味をもって終わるもの(3~5・11)、ⅠD類は口縁端部が尖り気味で終わるもの(6~10)である。ⅡA類はⅠA類と同様の形態を有するもの(12~17)、ⅡB類は口縁端部が内傾して水平な面を持つもの(18・19)、ⅡC類は口縁端部が丸く終わるもの(20)である。

中皿は12点(21~32)図示した。口径20cm以上・器高が2cm前後を測るもので、形態の違いから5類(A~E)に区別した。A類は体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反し端部が肥厚して終わるもの(21・22)、B類は端部が尖り気味で終わるもの(23・24)、C類は体部が斜上方に直線的に伸びた後、口縁端部が内側に肥厚するもの(25~30)、D類は口縁端部が尖り気味で終わるもの(31)、口縁端部が丸味をもって終わるもの(32)がある。

杯は56点(33~74・80~93)図示した。数値の違いからⅠとⅡに区別した。Ⅰは口径11.5~16.0cm・器高2.0~4.0cm、Ⅱは口径16.5~21cm・器高4cm前後を測る。さらに形態の違いからⅠで8類(ⅠA~ⅠH)、Ⅱで1類(ⅡA)に区別した。ⅠA類は体部が斜上方に伸びた後口縁端部付近で小さく外反し口縁端部がわずかに肥厚するもの(33~45)、ⅠB類は口縁端部が丸味をもって終わるもの(46~50)、ⅠC類は体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反し口縁端部が尖り気味で終わるもの(51~60)、ⅠD類は体部が斜上方へ丸味をもって伸びる。口縁端部は斜上方に尖り気味で終わるもの(61~63・69)、ⅠE類は体部が斜上方へ伸びた後、口縁端部は丸味をもって終わるもの(64~68)、ⅠF類は体部が斜上方へ内湾気味に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反するもの(70~72)、ⅠG類は体部が斜上方へ内湾気味に伸びた後、口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終わるもの(73)、ⅠH類は体部が垂直方

向に伸びる。口縁端部は丸味をもって終わるもの(74)である。ⅡA類はⅠA類と同様の形態を有するもの(80~93)である。

杯蓋は5点(75~79)図示したがすべて小破片で全容を知りえたものは無い。

鉢は15点(94~107・112)図示した。形態の違いから5類(A~F)に区別した。A類は、体部が内湾して伸びるもので、口縁端部が丸いもの(94・95)。B類は体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で角度を垂直方向に変えるもので、口縁端部は内側に肥厚するもの(96・97)。C類は体部が内湾気味に伸びるもので、口縁端部の形状はB類と同様のもの(98~101)。D類は体部が斜上方へ伸びた後、口縁部付近で角度を垂直ないしは内傾させるもので口縁端部は丸く終わる。口径の数値から16cm前後の小型(102)、22cm前後の中型(103)、30cm前後の大型(105)に区別できる。E類は形態的にはD類と同様であるが、口縁端部に段を有するもの(104・106)である。F類は体部が内湾気味に伸びた後、口縁端部付近で角度を上外方に変え小さく伸びるもの(107・112)である。

甕は6点(108~111・115・116)図示した。小型の(108・109)と大型の(110・111・115・116)がある。115・116は把手付き甕と推定されるものであるが破片のため全容は不明である。

鍋は1点(114)図示した。体部の両側に把手が付くもので、流し口を有する。

高杯は1点(113)図示した。中空の柱状部を持つもので、外向には9面の面取りが施されている。

土釜は4点(117~120)図示した。いずれも上部のみの破片のため詳細は不明である。

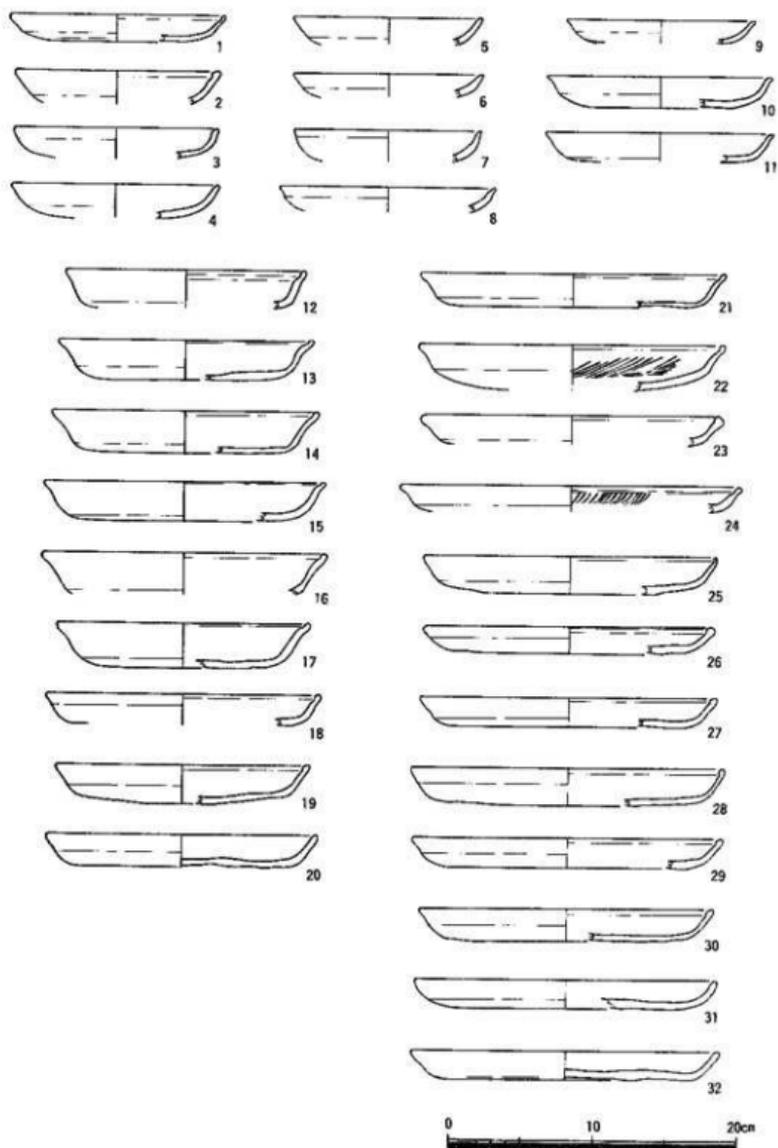
須恵器は30点図示した。杯蓋は9点(121・124~131)図示した。口縁部の形態の特長から3類(A~C)に区別した。A類は口縁端部にかえりを有するもの(121)、B類は擬宝珠形の鈕を有し、天井部が弓状を呈し口縁部が下方に短く屈曲するもの(128~131)、C類は口縁部と天井部の境に段を有するもの(126・127)である。杯身は14点(132~144・146)した。そのうち、高台を有するものは7点(135~141)である。甕は5点(122・123・147・148・150)図示した。いずれも細片で詳細は不明である。145は口縁部の資料であるが器種は不明である。149は底部が横位に広がる鉢である。

SK-2

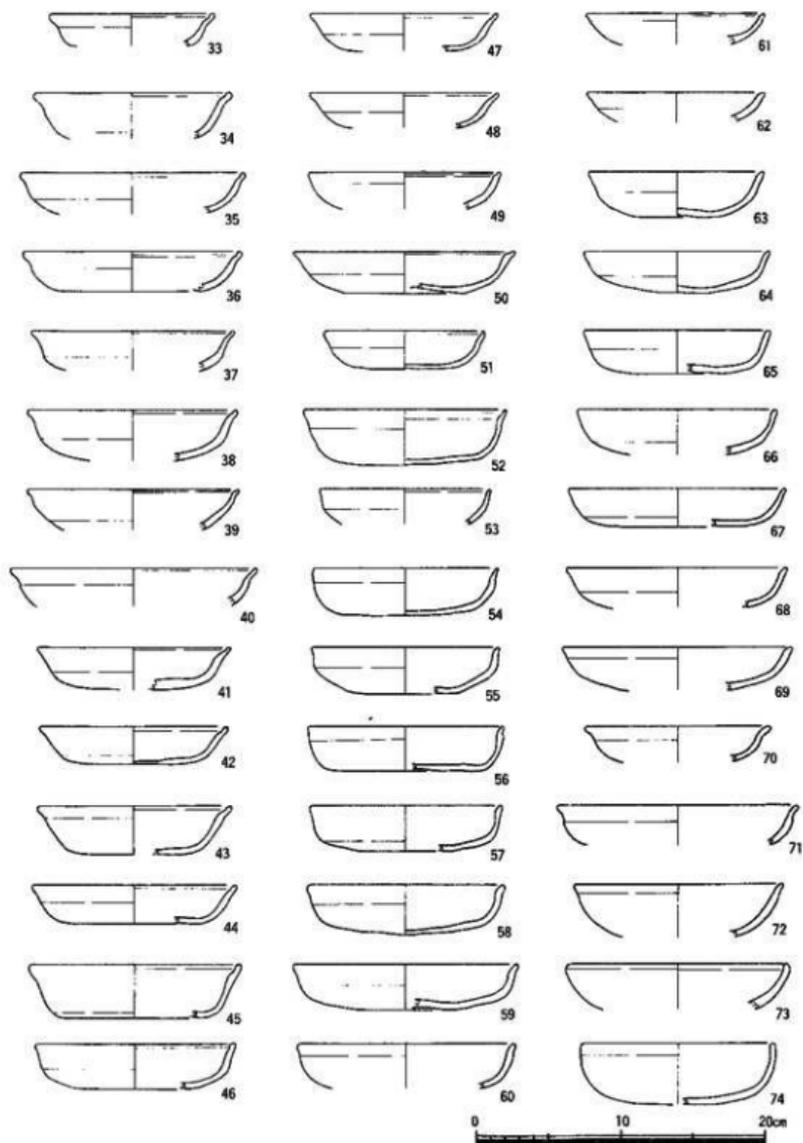
SD-2の南側で検出した。平面の形状が不定形を呈するもので、東西幅1.7m・南北幅2.4m・深さ0.1mを測る。内部堆積土層は灰茶色粘土である。

SK-3

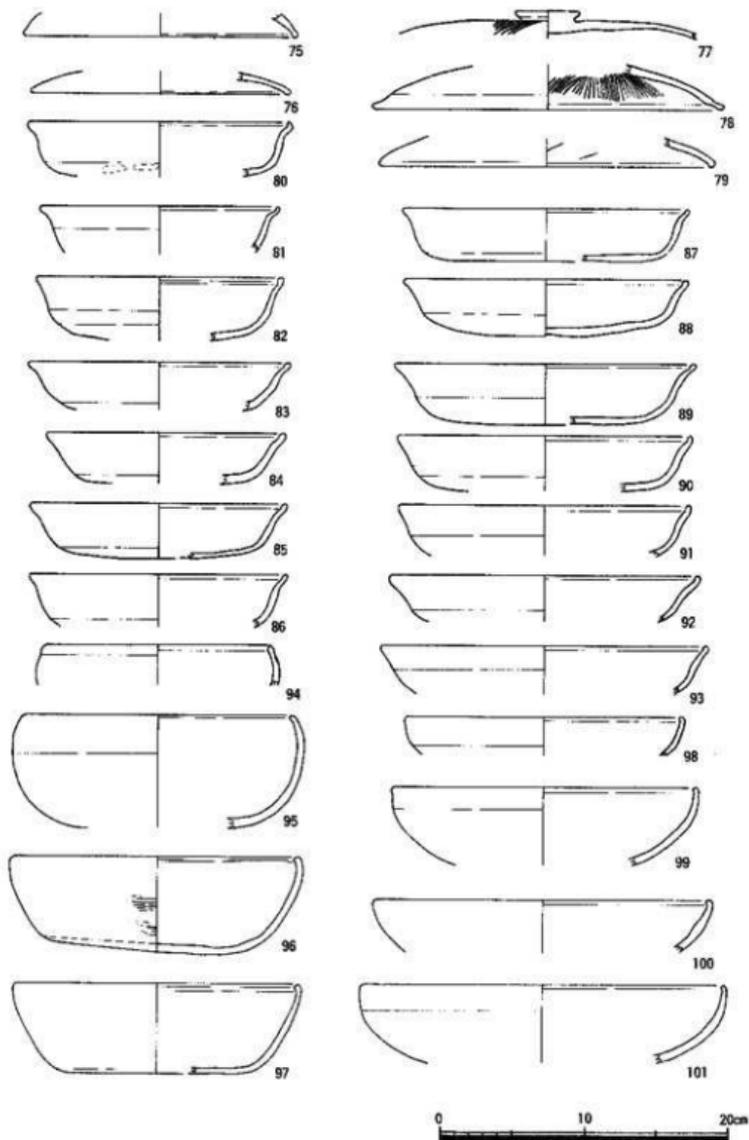
SK-2の南東で検出した。平面の形状が楕円形を呈するもので、長径1.1m・短径0.75m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は灰茶色粘土である。遺物は土師器甕(154・155)・甕(156)須恵器杯身(153)が出土した。



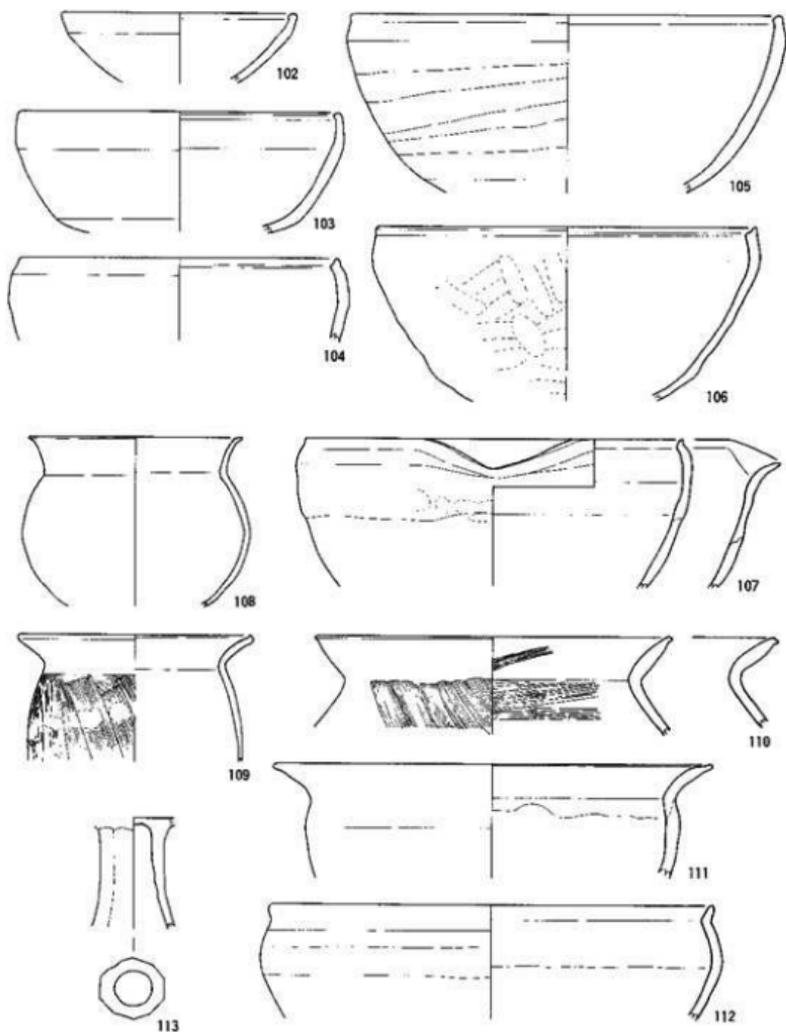
第5図 SK-1 出土遺物実測図1



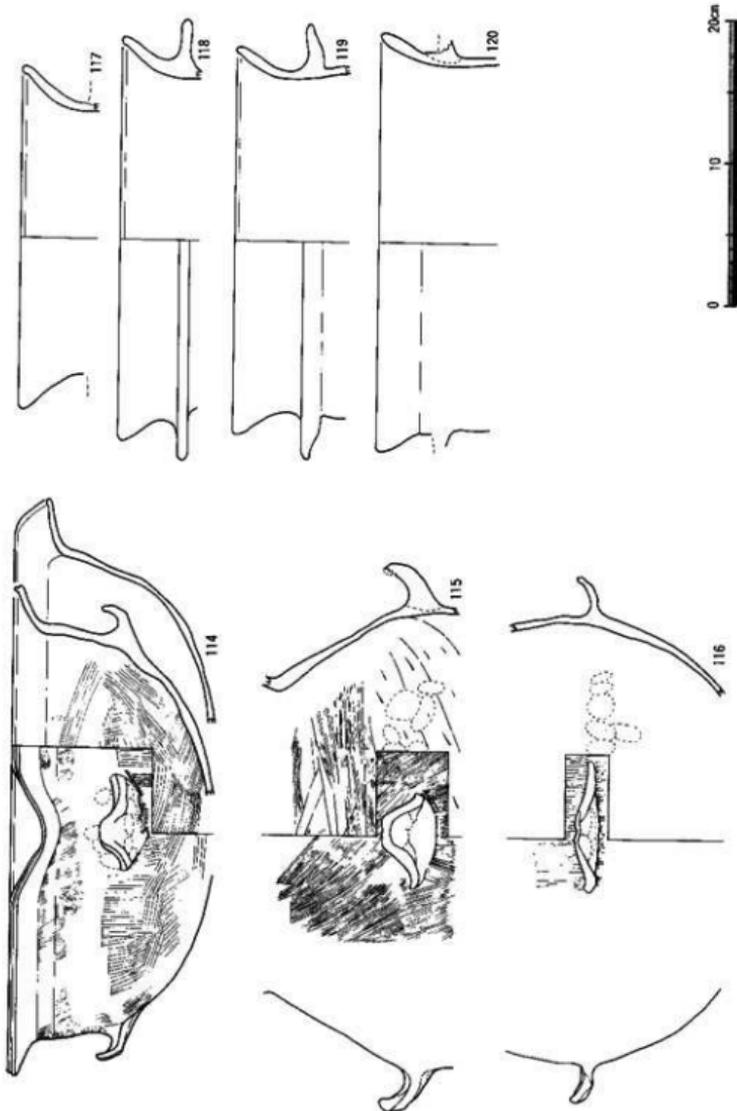
第6圖 SK-1 出土遺物実測圖2



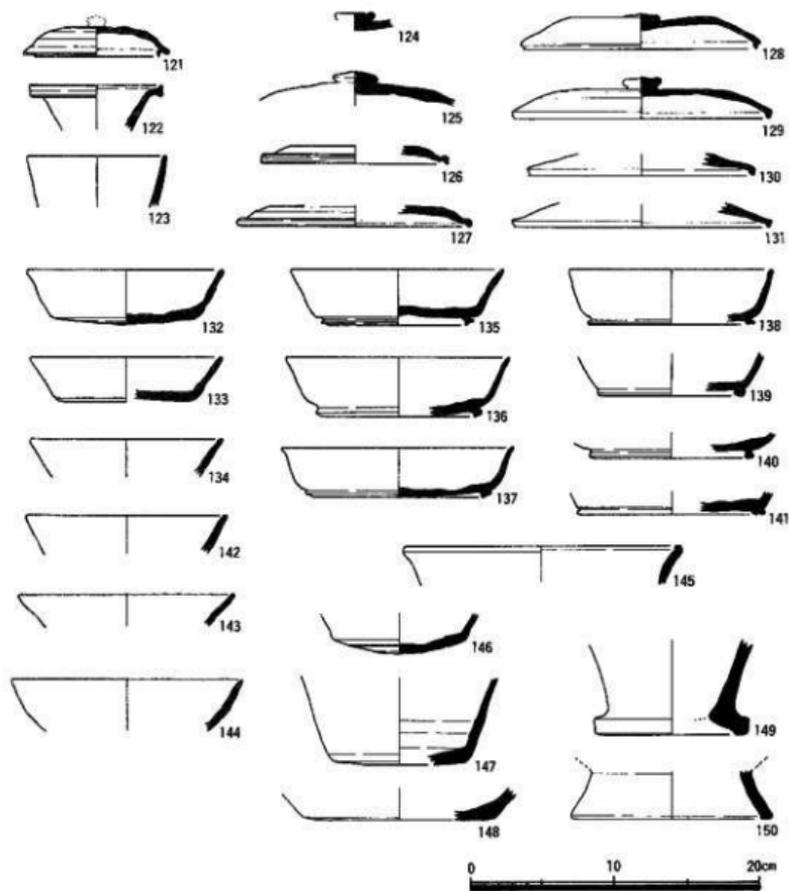
第7圖 SK-1 出土遺物実測図3



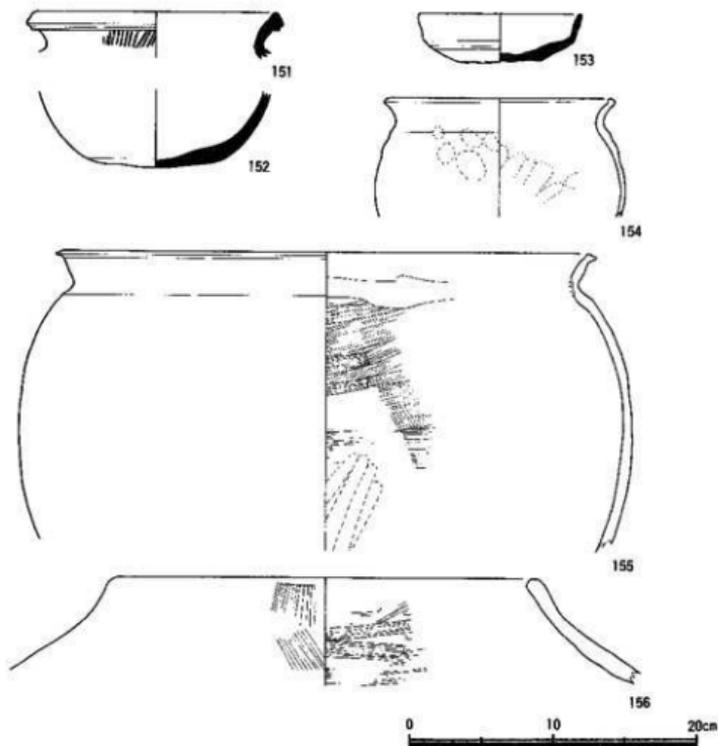
第8图 SK-1 出土遗物实测图4



第9图 SK-1 出土遺物実測図5



第10圖 SK-1 出土物実測図6



第11図 SE-1 (151), SK-3 (153~156)出土遺物実測図

溝 (SD)

SD-1

調査区の北西部で検出した。南東-北西方向に伸びるもので、検出長5.4m・幅0.4m・深さ0.05mを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂泥じり粘土である。

SD-2

調査区の北東部で検出した。南東から北西方向に伸びるもので、検出長4.0m・幅0.4~0.8m・深さ0.05~0.28mを測る。内部堆積土層は上層の淡茶灰色粗砂泥じり粘土と下層の灰色細砂泥じり粘土の二層で、遺物は下層から須恵器の横瓶 (167) が出土している。

SD-3

調査区の西部で検出した。SK-1の北東部を切っている。北西-南東に伸びるもので検出長1.4m・幅0.4m・深さ0.05mを測る。内部堆積土層は暗灰色粗砂泥じり粘土である。

SD-4

調査区の西部で検出した。南東・北西方向に伸びるもので、南東端はSK-1に合流している。検出長1.6m・幅0.4m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物は土師器土釜(168)・甕(169)が出土した。

SD-5

SD-4の南で検出した。SD-4に並行して伸びるもので、南東端はSK-1に合流している。検出長1.4m・幅0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は暗灰色粗砂混じり粘土である。遺物は土師器中皿(170)・土釜(171)が出土した。

SD-6

調査区の西部で検出した。南東・北西方向に伸びるものでSD-6を切っている。検出長1.5m・幅0.4m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は灰色シルト混じり粘土である。

SD-7

調査区の西部で検出した。屈曲して伸びるもので一部SD-6に切られている。幅0.4-0.8m・深さ0.06mを測る。内部堆積土層は暗灰色粗砂混じり粘土である。

落ち込み1

調査区の北西隅で検出した。検出部分の平面の形状は「L」字型を呈するが、北西部がSD-2に切られ北部および東部が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西4.5m・南北2.0m・深さ0.1mを測る。内部堆積土層は茶褐色細砂混じり粘土・茶灰色シルト混じり粘土・茶灰色粘質シルトで各層には多量の炭片が含まれていた。底部から小穴6個(SP-1～SP-6)が検出された。遺物は須恵器杯蓋(172)が出土した。

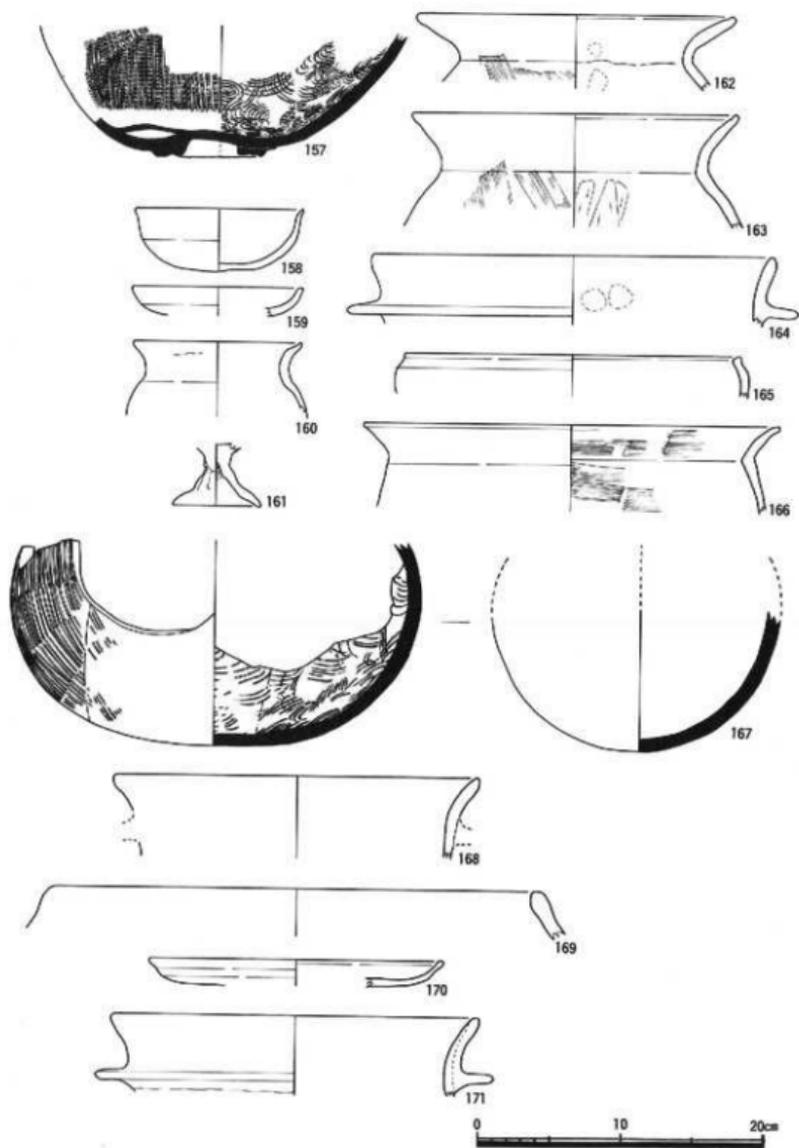
小穴(SP)

小穴は調査区の東部および西部で検出した。総数は18個(SP-1～SP-18)である。平面の形状で区別すれば円形8個(SP-4・9・10・13～17)、楕円形6個(SP-2・3・5・6・11・12)、方形1個(SP-8)、不定形1個(SP-1・7)、不明1個(SP-18)である。規模は幅0.2-1.0m・深さ0.05-0.16mを測る。遺物はSP-8から須恵器甕(157)、SP-9から土師器杯(158)、SP-10から土師器小皿(159)・甕(160・162・163)・高杯(161)・土釜(164)・鉢(165)出土した。

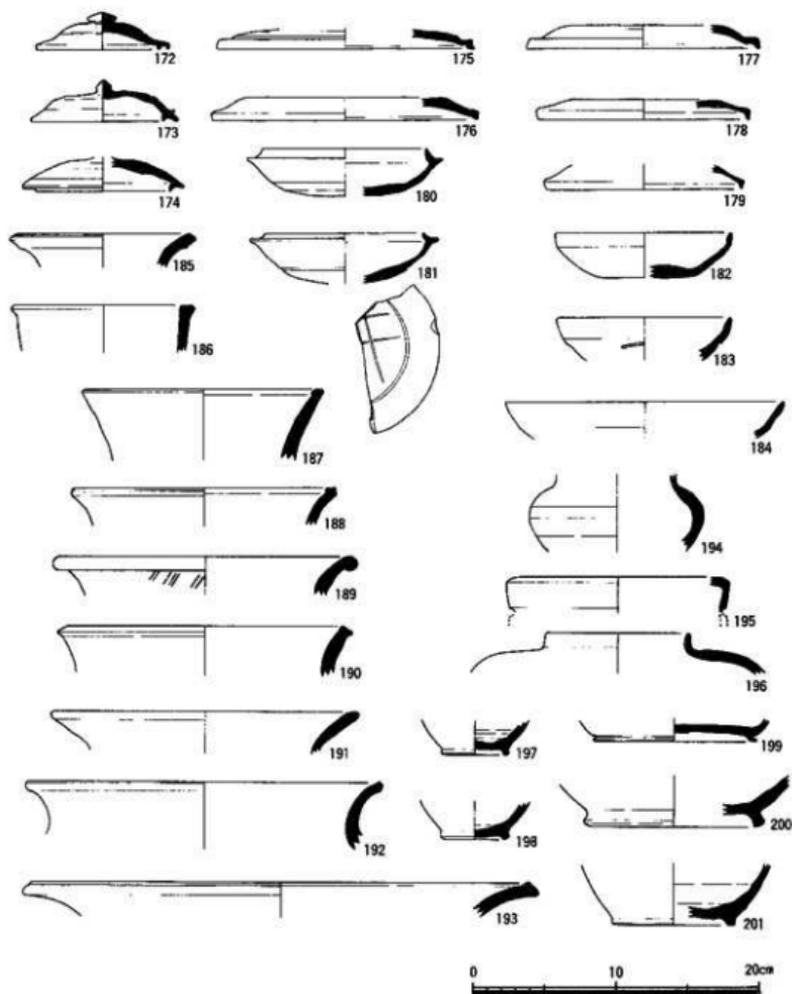
包含層出土遺物

遺物包含層は第3層・第5層で、第3層からは鎌倉時代後期、第5層からは奈良時代に比定される遺物が出土した。総量はコンテナ箱に2箱程度である。

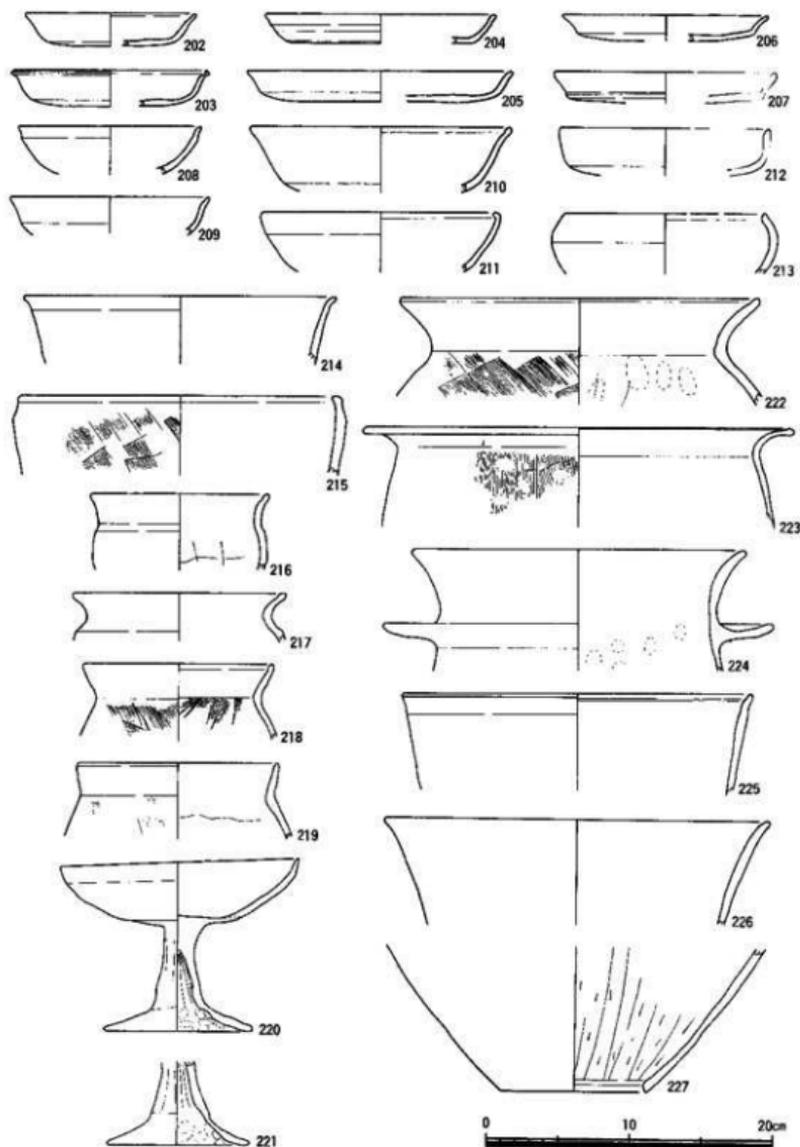
図示した遺物の総数は69点(173～242)である。そのうち第5層出土遺物は54点(173～227)、第3層出土遺物は15点(228～240)である。



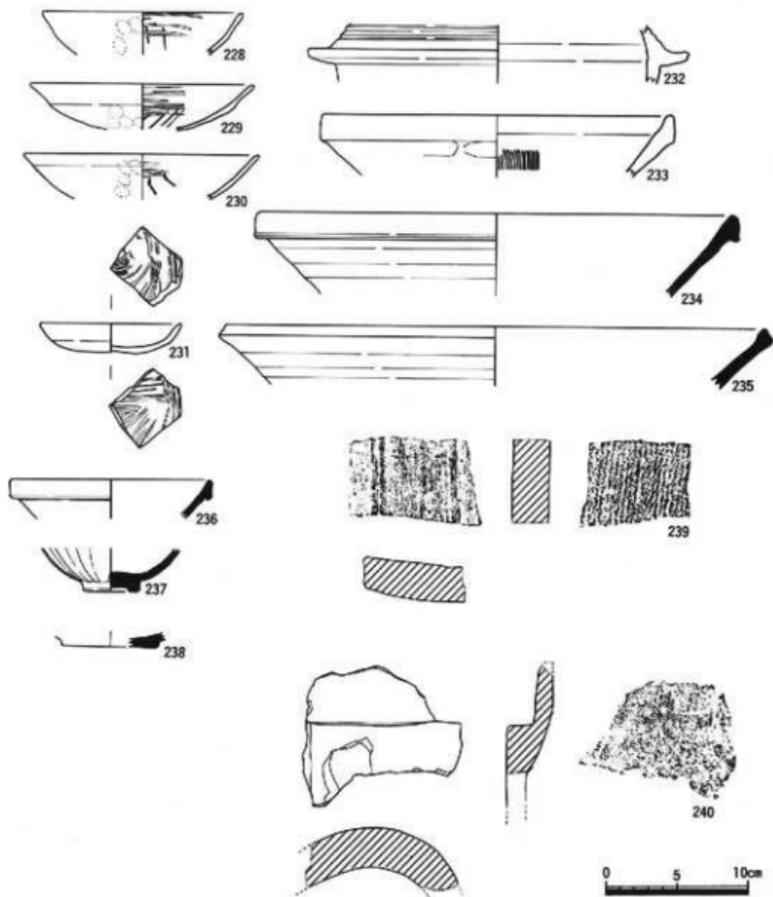
第12図 SP-8 (157), SP-10(159~165), SD-2 (167), SD-4 (168・169) SD-5 (170・171)出土遺物実測図



第13図 落ち込み1 (172), 第5層 (173~201) 出土遺物実測図



第14図 第5層出土遺物実測図



第15圖 第3層出土遺物実測図

第5層出土遺物の内訳は、土師器26点(202~227)、須恵器29点(173~201)である。土師器小皿は2点(202・203)図示した。口縁端部が丸味をもって終わるもの(202)と口縁端部が上方につまみ上げられるもの(203)がある。中皿は4点(204~207)図示した。体部が斜上方に伸びるもので、口縁端部は丸く終わるもの(204・205・207)と体部が外反するもの(206)がある。杯は5点(208~212)図示した。体部が斜上方に伸びた後、口縁端部付近で小さく外反するもの(208~210)。体部が内湾気味に伸びた後、口縁端部が内側に肥厚するもの(211)。体部が垂直に伸びるもの(212)がある。(213)は鉢で、体部が内湾気味に伸びる。飯は5点図示した(214・215・225~227)。体部が上外方に伸びた後、口縁端部付近で外反するもの(214・225・226)と口縁部が内湾するもの(215)がある。(227)は底部である。甕は6点図示した(216~219・222・223)。小型の(216~219)と大型の(222・223)がある。(224)は鈿を有する土釜である。高杯は2点図示した。(220)は碗形の杯部を有するものである。須恵器杯蓋は7点(173~179)図示した。口縁端部にかえりを有するもの(173・174)と無いもの(175~179)がある。杯身は5点(180~184)図示した。受部を有するもの(180・181)と直口の口縁を早する(182・184)がある。181の底部には「×」のヘラ記号が遺存している。甕は7点(187~193)図示した。いずれも細片のため詳細は不明である。壺は8点(194~202)図示した。197~201は高台を有するもので、小型の(197・198)と大型の(199~201)がある。

第3層出土遺物の内訳は、瓦器碗3点(228~230)・瓦器小皿1点(231)、土師器土釜1点(232)・播鉢1点(233)、須恵器鉢2点(234・235)、白磁碗1点(236)、青磁碗1点(237)、緑釉陶器1点(238)、平瓦1点(239)、丸瓦1点(240)である。

Ⅲ まとめ

今回の調査では、奈良時代に比定される遺構・遺物が検出された。なかでも、SK-1の出土遺物は完形こそ少なかったものの雑多な土器類が多量に出土しており、この時期の土器類の様相を知るうえで貴重な資料の1つと言えよう。

SK-1出土土器類のうち図示でき得たものの総数は150点で、土師器120点(80%)・須恵器20点(20%)である。土師器・須恵器の器種別の比率は、土師器小皿20点(16.7%)・中皿12点(10%)・杯56点(46.7%)・杯蓋5点(4.2%)・鉢15点(12.5%)・甕6点(5%)・鍋1点(0.8%)・高杯1点(0.8%)・土釜4点(3%)、須恵器杯蓋9点(30%)・杯身14点(46.7%)・壺5点(16.7%)・鉢1点(3%)・不明1点(3%)である。そのうち、須恵器杯蓋については3形態(A類～C類)に分類が可能で、これらの土器群の帰属時期を知るうえで有効な土器と言えよう。形態の特徴からA類は口縁部にかえりを有するもの、B類は口縁部が下方に短く屈曲するもの、C類は口縁部と天井部の境に段を有するものに区別した。形態の特徴からA類・B類・C類の順で推移することが明晰にされており、陶器編年の型式によれば、A類がⅢ型式第3段階、B類がⅣ型式1段階、C類がⅣ型式2段階に比定されている。

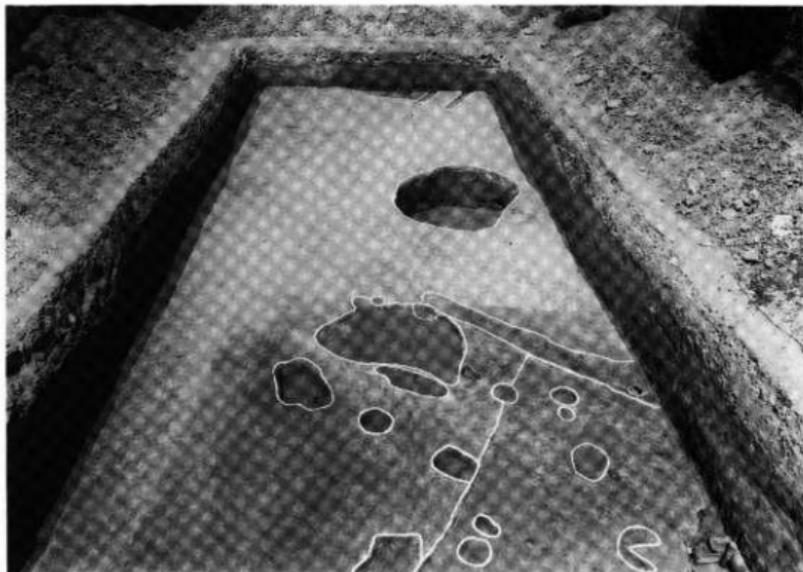
なお、平城宮の編年によれば平城宮Ⅰの段階ではB類のみであるが、平城宮Ⅱの時期にはB類とC類が共存することが確認されている。また、土師器の器種構成においては平城宮Ⅲ期以降に出現する佐波理鏡模倣土器碗が出土していないことが土器群の時期を決定するうえでの目安となろう。以上の結果から、平城宮Ⅱの略年代の1点とされる730年前後を中心とした資料と推定されよう。

註記

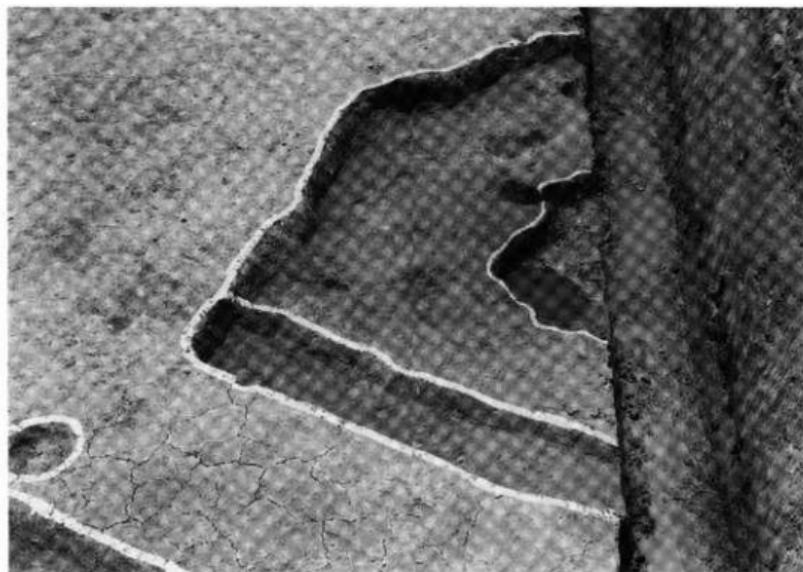
註1 (財)大阪文化財センター 『陶器Ⅰ』 大阪府文化財調査報告書第28輯 1980

註2 西 弘海 「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古博記念論文集 考古学論考』 1982

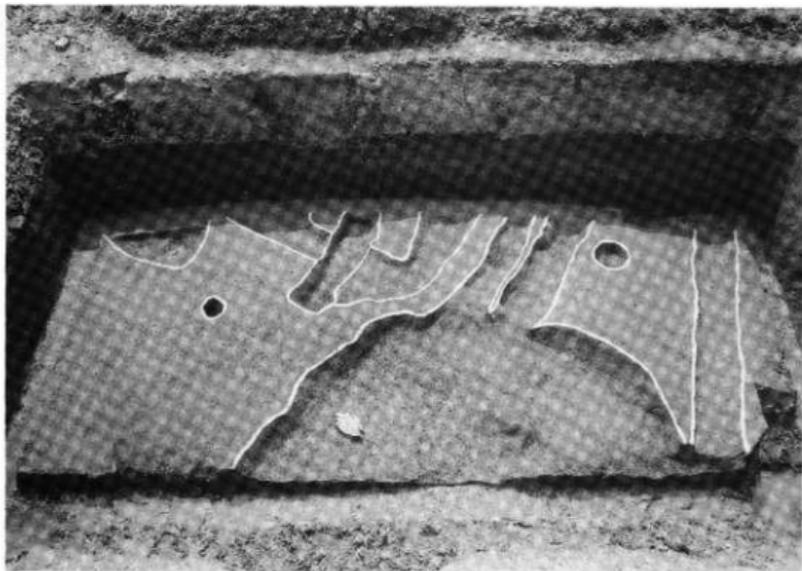
圖 版



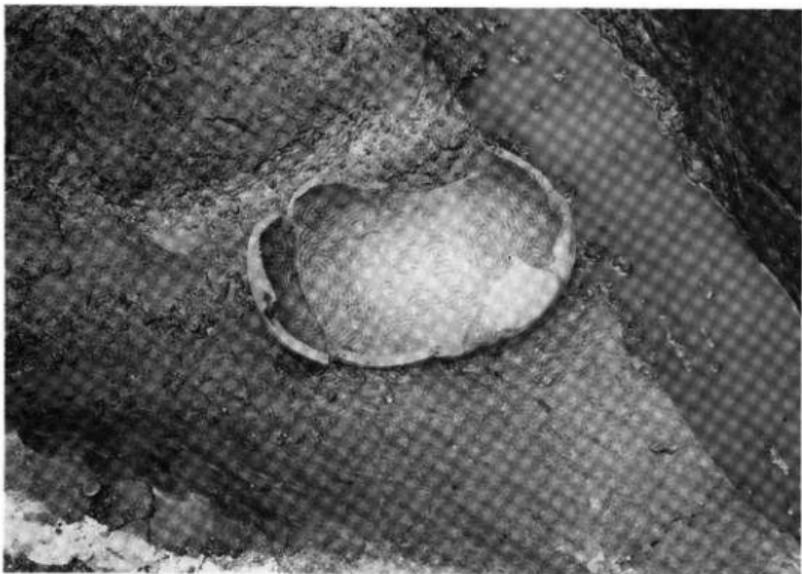
調査区全景(東から)



SK-1(北から)



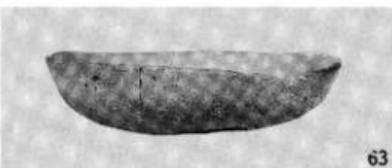
拡張区全景(東から)



S D-2 遺物出土状況(東から)



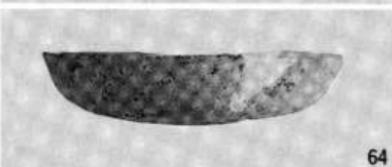
38



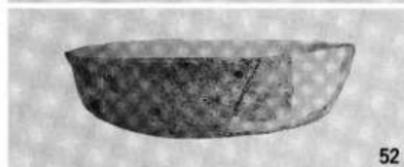
63



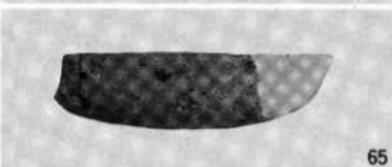
50



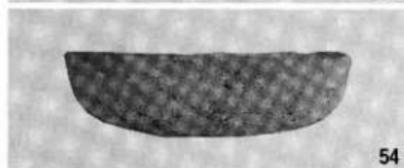
64



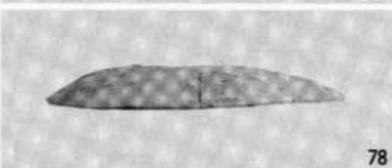
52



65



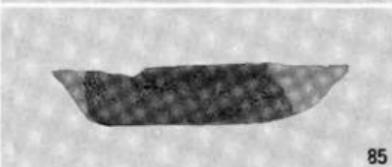
54



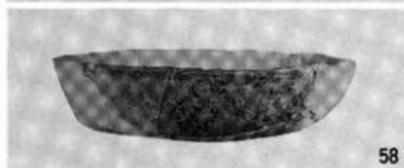
78



55



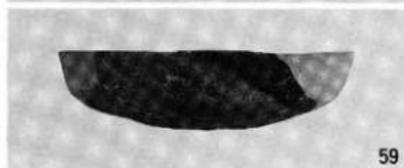
85



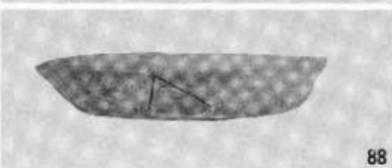
58



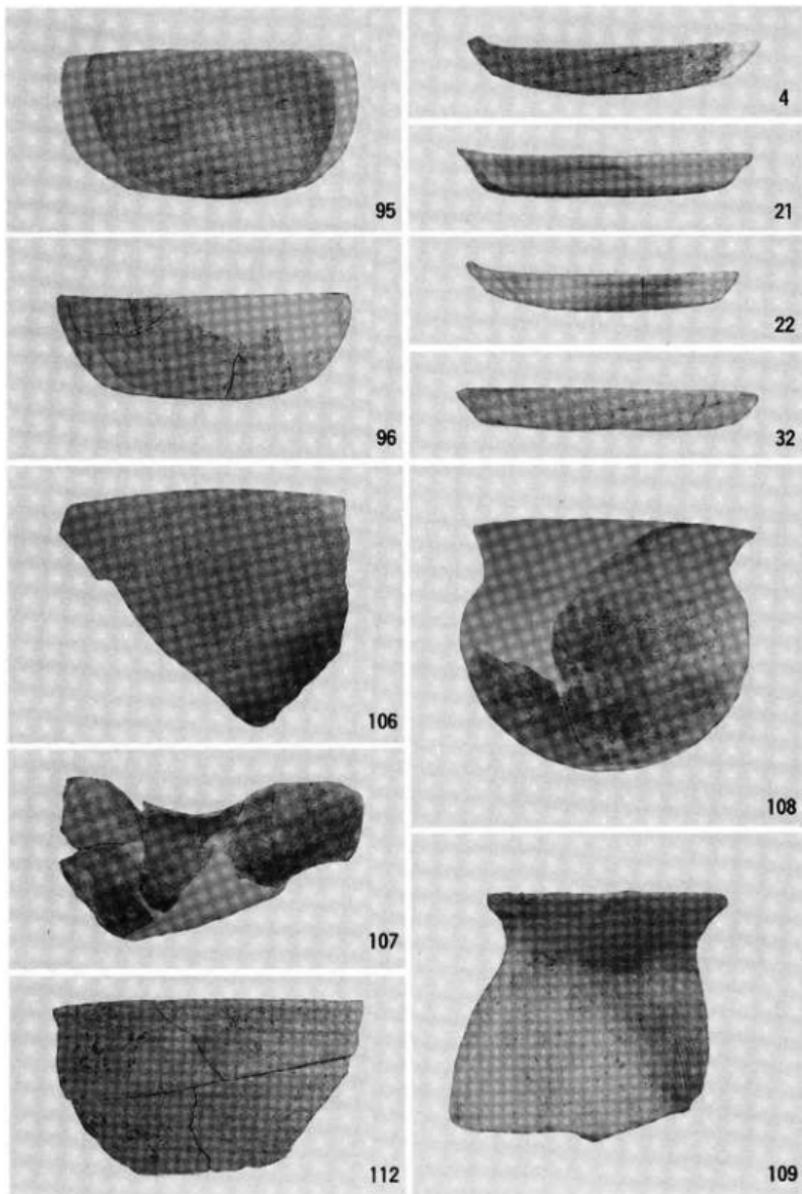
87



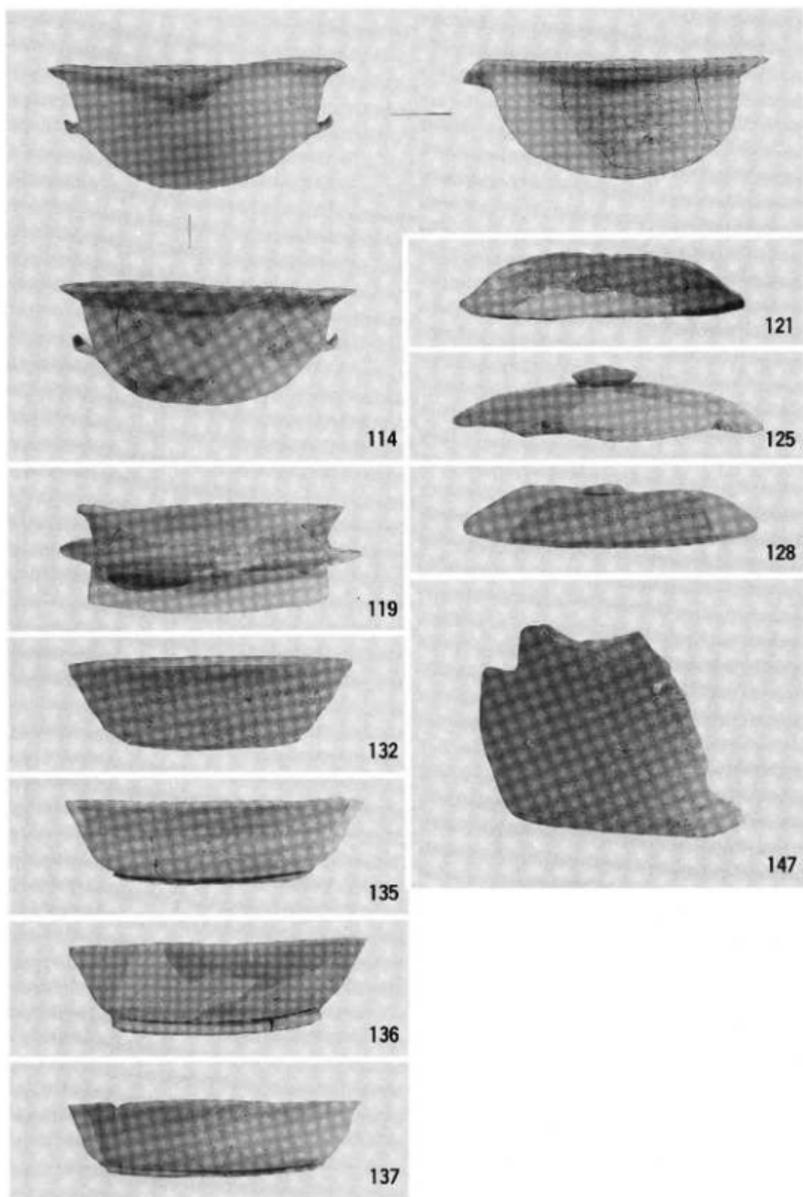
59

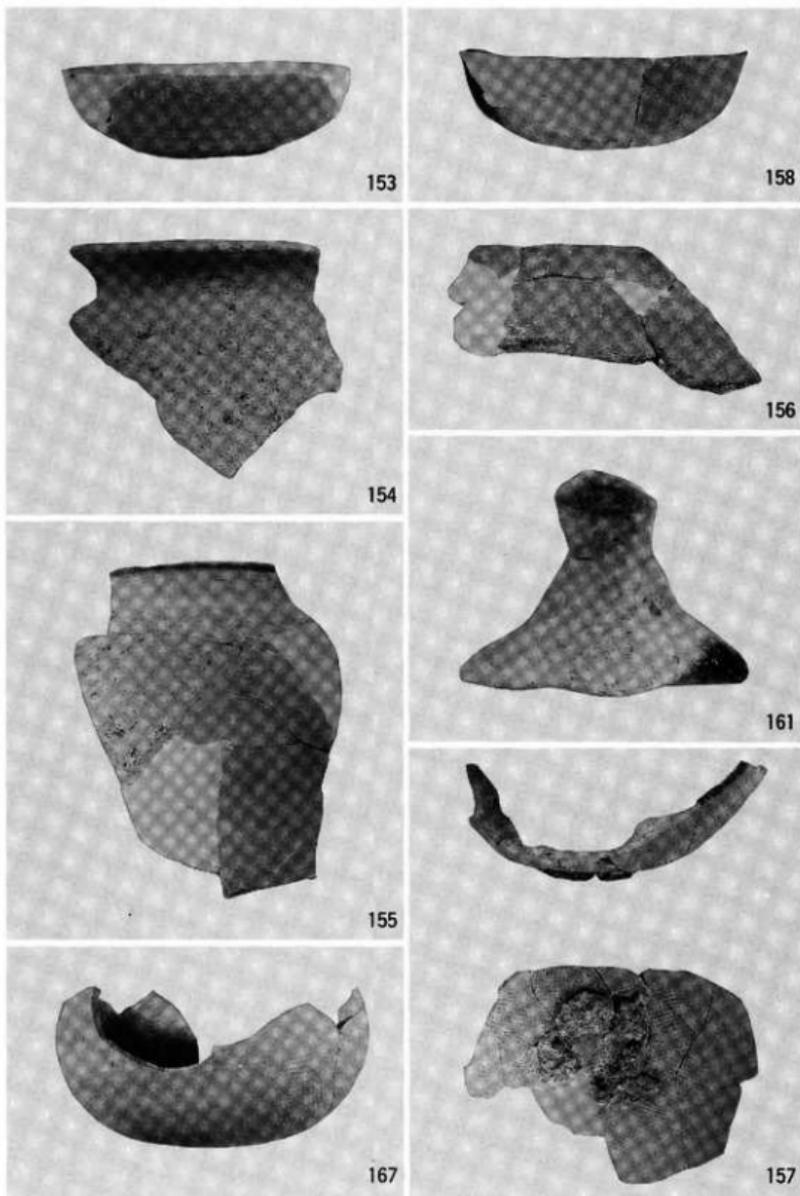


88



SK-1 出土遺物 2

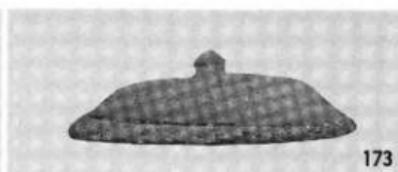




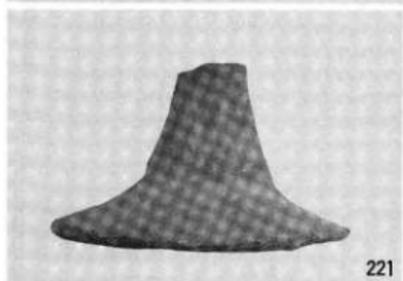
S K - 3 (153~156) 、S P - 1 (157) 、S P - 9 (158) 、S P - 10 (161) 、S D - 2 (167) 出土遺物



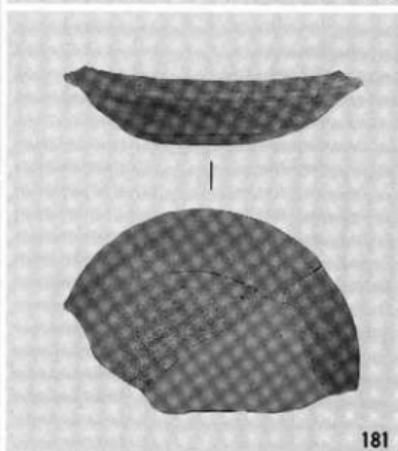
220



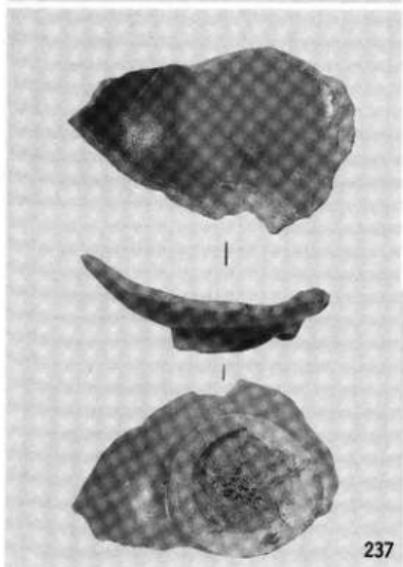
173



221



181



237



201

第 3 章 第 2 次調査(S H83-2)発掘調査報告

例 言

1. 本書は、八尾市清水町2丁目2-5番地で実施した校舎建替え工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書に報告する成法寺遺跡第2次調査（S H83-2）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和58年7月25日から8月15日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は360㎡を測る。なお、調査においては徳谷貴正・山西嘉彦・笹井伸彦・中野健太郎・森下（旧姓嶋村）友子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成3年に刊行した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測－西森忠幸・岡田清一・八元聡志、図面レイアウト－中西紀子・山中智美、図面トレース－岩本多貴子・小倉弘恵、遺物写真撮影－高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、Ⅲ出土遺物観察表については村田英了が担当した。
1. 全体の編集は高萩が行った。

本文目次

I	はじめに	25
II	調査概要	26
	1. 調査の方法	26
	2. 基本層序	27
	3. 検出遺構・出土遺物	27
	1) 第1調査面（古墳時代前期）	29
	2) 第2調査面（古墳時代後期）	31
	3) 遺構に伴わない遺物	34
III	出土遺物観察表	35
IV	まとめ	38

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	25
第2図	調査区設定図及び区割図	26
第3図	基本層序柱状図 (S = 1 / 40)	27
第4図	第1調査面遺構平面図	28
第5図	SD1 東部検出遺物平断面図及び断面図	29
第6図	SD1 出土遺物実測図	30
第7図	SD2 出土遺物実測図	31
第8図	SD3 出土遺物実測図	31
第9図	第2調査面遺構平面図	32
第10図	SB1 平断面図	33
第11図	遺構に伴わない遺物	34

図 版 目 次

図版一	第1調査区全景 (北から)
	第2調査区第1調査面全景 (北から)
図版二	第2調査区SD1 検出遺物 (北から)
	第2調査区第2調査面全景 (北から)
図版三	SD1
図版四	SD2
	遺構に伴わない遺物

I はじめに

今回の調査は、八尾市清水町2丁目2-5内に所在する八尾市成法寺中学校の校舎建設に伴う発掘調査で、当調査研究会が実施した第2次調査(SH83-2)にあたる。当調査の敷地内では、今回の調査を含めて校舎建て替え工事に伴う発掘調査が八尾市教育委員会と当調査研究会により実施されている。第1回目の調査地は今回の調査地の南西約10m地点で、昭和56年度に八尾市教育委員会により発掘調査が実施されている。第2回目の調査地は今回の調査の南東約40m地点で、昭和57年度に当調査研究会が第1次調査(SH82-1)を実施している。さらに、同学校敷地内では昭和62年にも当調査地の南東約100m地点で、当調査研究会が第3次調査(SH87-3)を実施しており、これを含めて計4回にわたる調査が実施されている。これらの調査の結果、古墳時代中期～鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。

調査期間は昭和58年7月25日～8月15日まで現地調査を実施した。調査面積は約360㎡を測る。



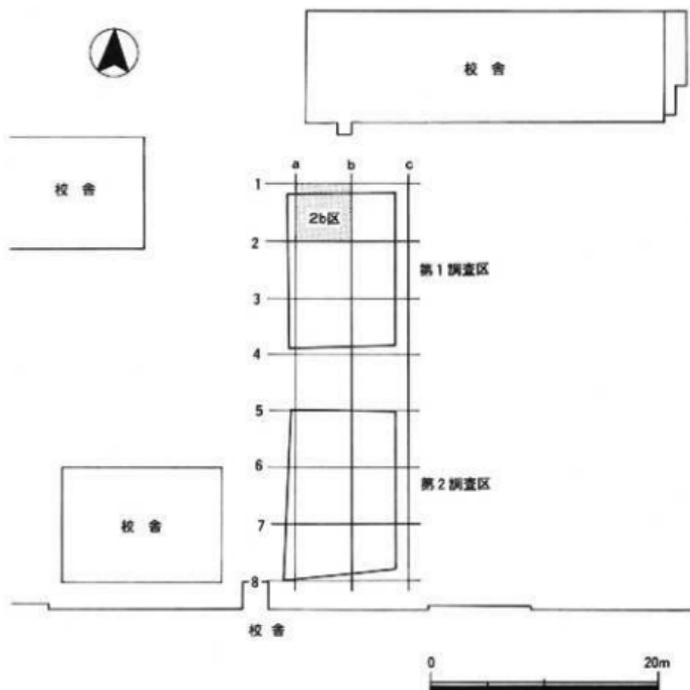
第1図 調査地周辺図

II 調査概要

1. 調査の方法

調査地が二分されていることから、北側の調査区を第1調査区、南側の調査区を第2調査区と呼称した。調査は八尾市教育委員会の指示に基づいて、現地表面から約1.3mまでの土層を機械で掘削し、それより以下40cmの土層は人力による掘削・精査を実施した。

地区割は、調査区範囲内に任意の基準点を設け、南北線を磁北方向に合わせて南北40m、東西15mの調査区内を5m四方に区画した。地区名は北西部の隅から東西線が数字(1~8)、南北線がアルファベット(a~c)を付称し、1a~8c区とした。



第2図 調査区設定図及び区割図

2. 基本層序

調査区内で現地表面から約1.8mまでに存在する土層内から普遍的にみられる8層を抽出して基本層序とした。現地表面は標高9.4mを測る。

第1層 盛土：層厚90cm。学校建設で整地された土層である。

第2層 旧耕土：層厚10～15cm。

第3層 黄褐色～青灰色粘質土：15～25cm。床上である。

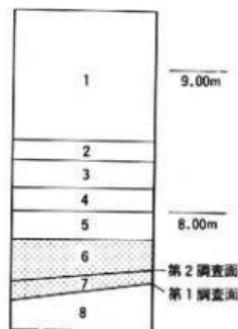
第4層 青灰色粘質土：層厚20～25cm。

第5層 茶褐色粘質シルト：層厚20～25cm。酸化鉄を多量に含む。

第6層 灰褐色細砂混粘質土：層厚20～40cm。古墳時代前期～奈良時代の遺物を少量含み、北部に行くに従い厚く堆積している。

第7層 灰茶色粘質土：層厚10～20cm。古墳時代前期に比定される遺物が含まれている。この上面には古墳時代後期の遺構が切り込まれている。標高7.2m前後を測る(第2調査面)。

第8層 茶灰色粘質土：層厚30cm以上。この上面で古墳時代前期の遺構を検出した(第1調査面)。



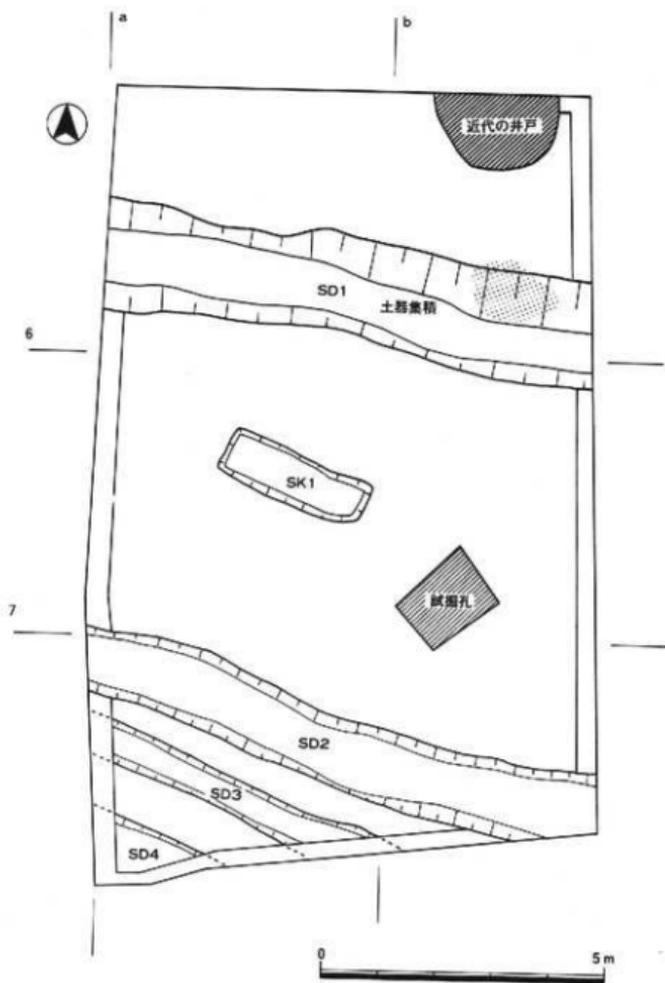
第3図 基本層序柱状図(S=1/40)



3. 検出遺構・出土遺物

第7層(第2調査面)と第8層の上面(第1調査面)の2面を調査対象面とした。その結果、第1調査区では、2面とも遺構が検出されなかった。第2調査区では、第1調査面で古墳時代前期の土坑1基・溝4条、第2調査面で古墳時代後期の掘立柱建物1棟・土坑1基・溝2条を検出した。

以下、第2調査面で検出した遺構遺物について概説する。



第4図 第1調査面遺構平面図

1) 第1調査面(古墳時代前期)

土坑(SK)

SK 1

7b区で検出した。平面の形状は長方形を呈する。規模は検出部で、長径2.65m、短径0.76m、深さ34cmを測る。断面の形状は逆台形を呈し、内部には暗灰色粘質シルトが堆積している。遺物は、土坑内から庄内式新相に比定される庄内式甕などの小片が少量出土している。

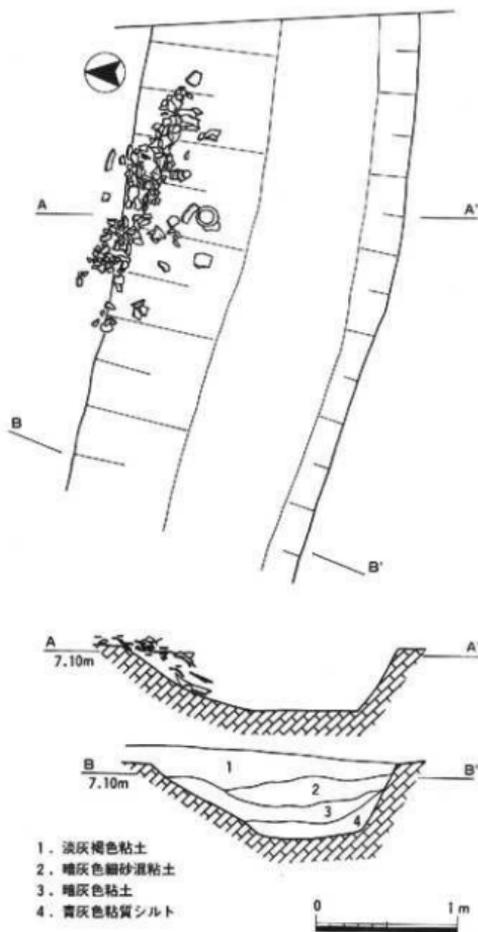
溝(SD)

SD 1

SK 1の北部で検出した。方向はほぼ東西方向を示す。規模は検出部で、幅1.6~2m、深さ58~62cmを測る。断面は逆台形を呈し、内部には上方から淡灰褐色粘土・暗灰色細砂混粘土・暗灰色粘土・青灰色粘質シルトが堆積している。遺物は東部の北側斜面に集積していた。これらは古墳時代前期(庄内式新相)に比定される土器で、北側から投げ捨てられたような状態で検出された。器種には壺(1)・小型壺(2)・庄内式甕(3~22)・鉢(23~25)がある(第6図)。

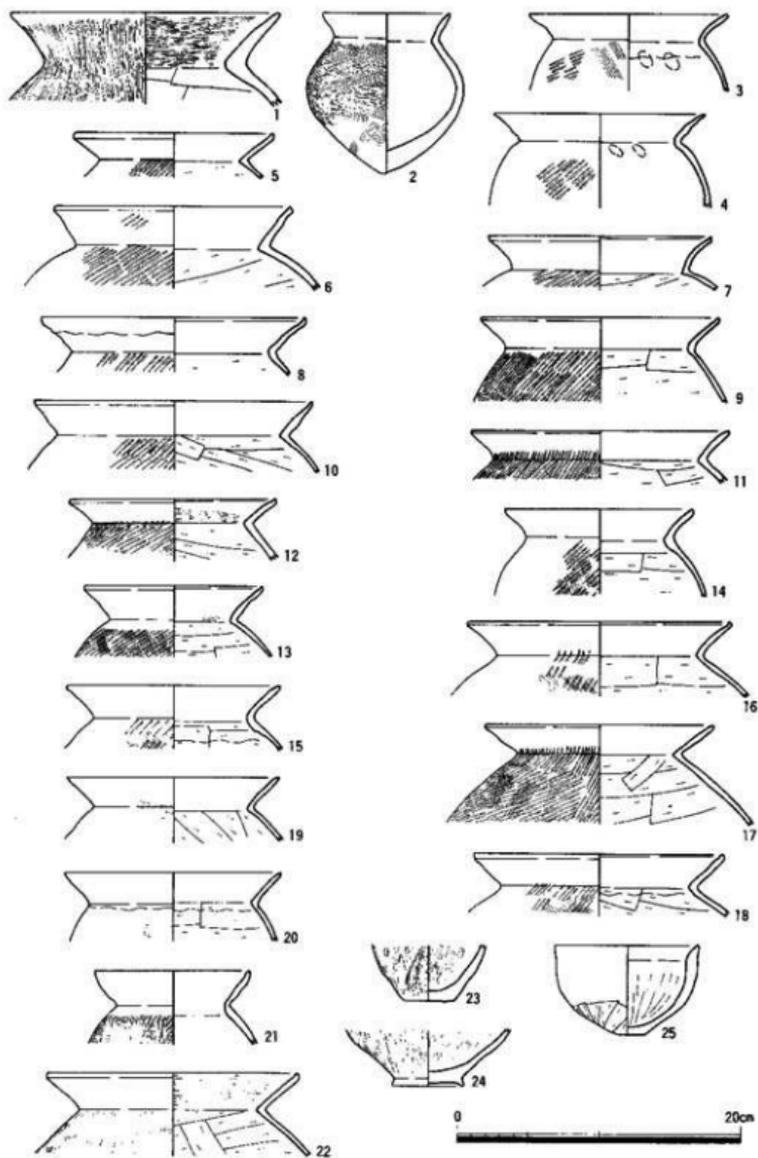
SD 2

SK 1の南部で検出した。方向はSD 1とほぼ同一方向を示す。規模は検出部で、幅1.1~1.3m、深さ54~57cmを測る。断面は逆台形を呈し、内部には暗灰青色粘質シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される壺(26)・V様式系甕(27)・庄内式甕(28~32)などの破片が少量出土している(第7図)。

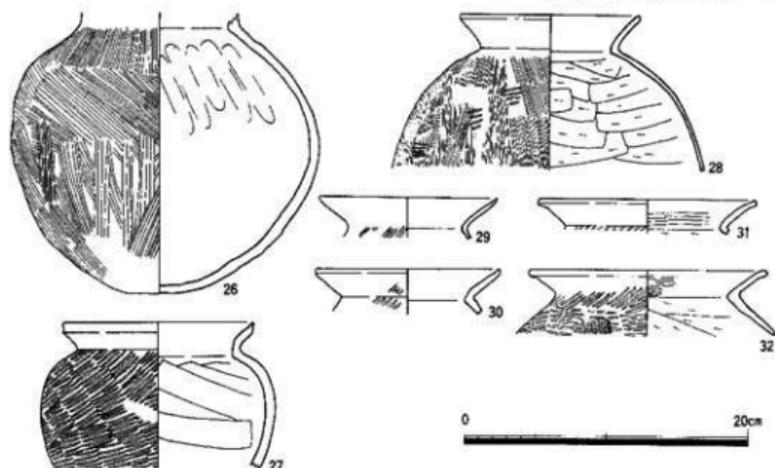


第5図 SD 1 東部検出遺物平面図及び断面図

1. 淡灰褐色粘土
2. 暗灰色細砂混粘土
3. 暗灰色粘土
4. 青灰色粘質シルト



第6图 SD1出土器物实测图



第7図 SD2出土遺物実測図

SD3

SD2の南部で検出した。SD2と平行して伸びる溝である。規模は検出部で、幅60~70cm、深さ15~20cmを測る。断面は浅い半円形を呈し、内部には暗灰色粘質シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される甕(33)・庄内式甕(34)などの破片が少量出土している(第8図)。

SD4

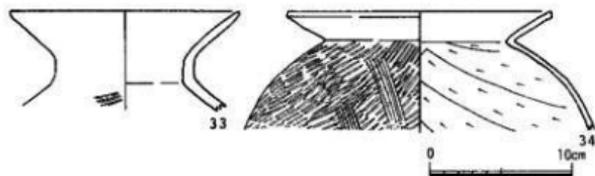
SD3の南部で検出した。方向はSD3と平行して伸びるものと思われる。東西端はともに調査区外に至る。規模は検出部で、幅1m、深さ15cmを測る。内部には暗灰青色シルトが堆積している。遺物は、古墳時代前期に比定される土器の小片が少量出土している。

2) 第2調査面(古墳時代後期)

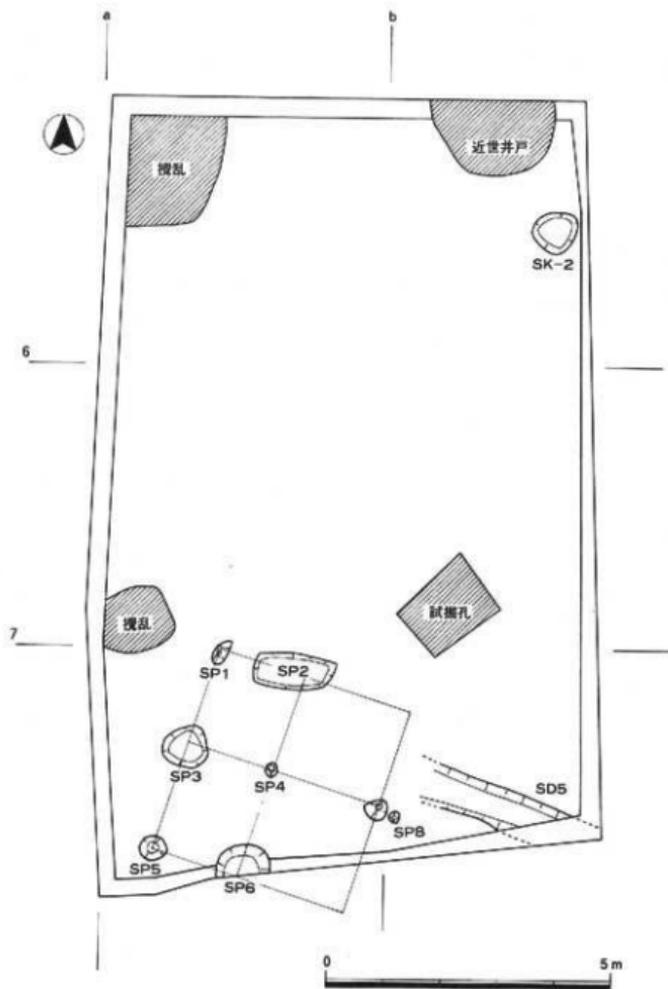
掘立柱建物(SB)

SB1

3d・c区で検出した。2間×2間(3.5×3.7m)の規模をもつものと思われる掘立柱建物である。柱穴は7個を検出した。北東隅の柱穴は欠損してなく、南東隅の柱穴は、調査区外に



第8図 SD3出土遺物実測図



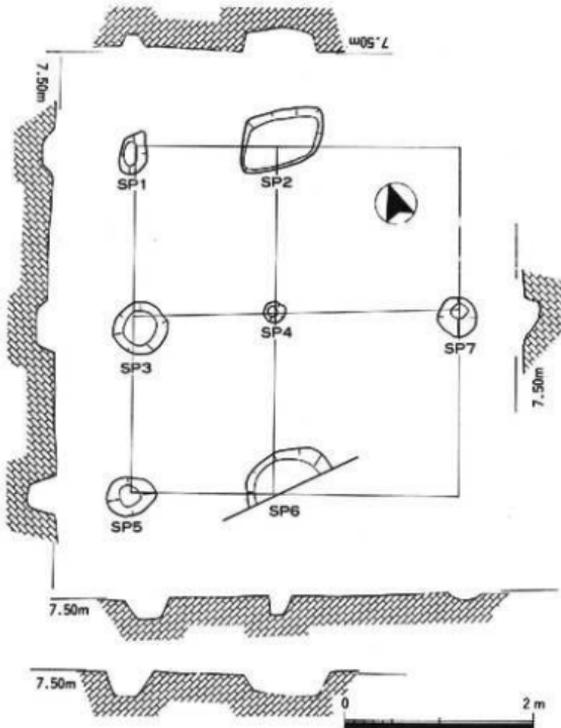
第9圖 第2調査面遺構平面図

至るため不明である。建物の南北軸は磁北から東へ15度振っている。柱の間隔は、東西が西から1.6m、1.8m、南北が南から1.9m、1.7mを測る。復元床面積は約12.95㎡を測る。柱穴の形状は円形のもの5個(SP3～SP7)、楕円形のもの1個(SP1)、長方形のもの1個(SP2)がある。各柱穴の規模はSP1が径23～50cm、深さ15cm、SP2が長径140cm、短径65cm、深さ25cm、SP3が径72～80cm、深さ21cm、SP4が径20～28cm、深さ21cm、SP5が径40～42cm、深さ28cm、SP6が東西径92cm、深さ25cm、SP7が径35～40cm、深さ23cmをそれぞれ測る。断面は逆台形及びU字形を呈する。小穴内には暗茶灰色微砂粘土・灰茶色粘質細砂が堆積している。遺物は小穴内から土師器の小片がごく少量出土している。

土坑(SK)

SK2

6c区で検出した。平面の形状はほぼ円形を呈する。規模は検出部で、径72～78cm、深さ



第10図 SB1平面図

20cmを測る。断面は浅い半円形を呈し、内部には暗茶褐色細砂混粘質土が堆積している。遺物は、土師器の小片がごく少量出土している。

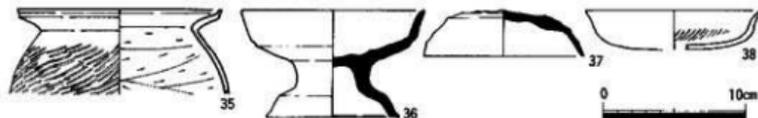
溝 (SD)

SD5

8c区で検出した。方向は南東-北西を示す。南東部は調査区外に至り、北西部は途切れている。規模は検出部で、検出長3.2m、幅72-78cm、深さ10-15cmを測る。断面は浅い逆台形を呈し、内部には褐灰色微砂混粘質土が堆積している。遺物は、土師器・須恵器の小片が少量出土している。

3) 遺構に伴わない遺物

第6層と第7層内から遺物が出土している。コンテナ箱にして約2箱分を数える。第7層では古墳時代前期(庄内式期)に比定される土器片、第6層では古墳時代後期から奈良時代に比定される土器片が主に出土している。これらの土器はほとんどが小片であり、図示できたものは4点であった。第7層内から出土した庄内式甕(35)、第6層内から出土した古墳時代後期の高杯(36)・杯蓋(37)、奈良時代の皿(38)である(第11図)。



第11図 遺構に伴わない遺物

第1調査区
SD1

Ⅲ 出土遺物観察表

遺物番号 四角番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土 焼 成	備 考
1 三	壺 (土師器)	口 径 19.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 斜上方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端部 は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面・体部外面ヘラミガキ、体部 内面ヘラナデ。	灰褐色	4.5mm以下の 砂粒を少 量含む。	良好
2 三	小型壺 (土師器)	口 径 9.9 器 高 11.4 最大径 11.1	最大径を体部中位よりやや上にもつ彫形 体部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる 口縁部に至る。端部は鋭く尖る。底部は尖り 底。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ、 内面ナデ。	淡灰色	2mm以下の 角閃石・長 石・石英等 の砂粒を少 量含む。	良好
3	壺 (土師器)	口 径 14.0	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、 上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 丸い。体部内面には、赤の接合痕がみられる。 体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (4本)後ハケナデ、内面ナデ。	淡灰褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好
4	同上	口 径 14.6	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、 上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (4本)、内面ナデ。	淡褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・石英・ 雲母等の砂 粒を少量含む。	良好
5	同上	口 径 14.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 斜上方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ 上げ、外に面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (5本)、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	2mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好
6	同上	口 径 16.6	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、 上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ 上げ、外に面をもつ。口縁部外面には一帯の 接合痕がみられる。体部中位以下は欠損。 口縁部外面タタキ後ヨコナデ、内面ヨコナ デ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	2.5mm以下の 内閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好
7	同上	口 径 15.8	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、 上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位以下 は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	3mm以下の 角閃石・長 石等の砂粒 を少量含む。	良好
8	同上	口 径 18.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部はつまみ上げる。体部中位以下は欠損。口 縁部外面には、赤の接合痕がみえる。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)、内面ヘラ削り。	淡褐色	石英・雲母 等の砂粒を 少量含む。	良好
9	同上	口 径 16.8	内上方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、 上外方へ伸びる口縁部に至る。端部は若干つ まみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (4本)、内面ヘラ削り。	淡褐色	2mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好
10	同上	口 径 19.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上外方へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ 上げ、外に面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)、内面ヘラ削り。	暗茶褐色	2mm以下の 長石・角閃 石等の砂粒 を少量含む。	良好
11	同上	口 径 18.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部 は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (4本)、内面ヘラ削り。	淡灰褐色	1mm以下の 長石・雲母 等の砂粒を 少量含む。	良好

遺物番号 採取番号	器 種	(mm) 法量	口 径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
12	甕 (土師器)	口 径	14.0	上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位以 下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、外面ヨコ ナデ、体部外面タタキ(3本)後ハケナデ (10本)、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好	
13	同上	口 径	12.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中位 以下は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部 外面タタキ(5本)後ハケナデ(6本)、内 面ヘラ削り。	灰褐色	2mm以下の 角閃石・雲 母・長石等 の砂粒を少 量含む。	良好	
14	同上	口 径	13.2	上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部は若干つまみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)ハケナデ(8本)、内面ヘラ削り。	外 淡褐色 内 淡茶褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・雲母・ 石英等の砂 粒を少量含 む。	良好	
15	同上	口 径	15.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部は若干つまみ上げる。体部内面には一糸の 接合痕が残る。体部下位は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)ハケナデ(7本)、内面ヘラ削り。	灰褐色—淡 褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・雲母・ 石英等の砂 粒を少量含 む。	良好	
16	同上	口 径	18.4	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ外反気味に伸びる口縁部に至る。端 部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部中 位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (3本)ハケナデ(8本)、内面ヘラ削り。	外 淡褐色 内 淡茶褐色	3mm以下の 角閃石・長 石・雲母・ 石英等の砂 粒を少量含 む。	良好	
17	同上	口 径	16.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ伸びる口縁部に至る。端部は若干上 つまむ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (4本)後ハケナデ(6本)、内面ヘラ削り。	淡茶灰色	2mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好	
18	同上	口 径	17.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ伸びる口縁部に至る。端部はつまみ 上げ、外に面をもつ。口縁部外面と底部内面 には接合痕がある。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ (5本)後ハケナデ(8本)、内面ヘラ削り。	淡褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・雲母等 の砂粒を少 量含む。	良好	
19	同上	口 径	15.0	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ伸びる口縁部に至る。端部は強く尖 る。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ、 内面ヘラ削り。	灰褐色	0.5mm以下 の角閃石・ 長石・雲母 等の砂粒を 少量含む。	良好	
20	同上	口 径	15.2	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ伸びる口縁部に至る。端部は若干上 つまみ上げる。体部内外面には一糸の接合痕が 残る。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ (6本)、内面ヘラ削り。	外 茶褐色 内 灰褐色	1mm以下の 角閃石・長 石・雲母・ 赤褐色酸化 鉄の砂粒を 少量含む。	良好	
21	同上	口 径	10.8	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、 上方向へ内湾気味に伸びる口縁部に至る。端 部は丸い。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ (10本)、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2mm以下の 長石・石英 等の砂粒を 少量含む。	良好	

遺物番号 図版番号	部 位	(cm) 注 意	口徑 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成 備 考
22 三	蓋 (土師器)	口 径	17.6	胴上内へ伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。肩部は上につまむ。体部中位以下は欠損。 口縁部平面ヨコナデ、口縁部内面・体部外面ハケナデ、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	1mm以下の長石等の砂粒を少量含む。	良好
23	体 (土師器)	底 径	3.4	口縁部・体部は欠損。底部は突出しない平底。 内外面ヘラミガキ。	外 淡灰色 内 淡灰色	長石等の細砂等を少量含む。	良好
24	同上	底 径	5.0	口縁部・体部は欠損。底部は突出した上げ底。 底部外面ナデ、胎はヘラミガキ。	暗茶褐色	長石等の細砂等を少量含む。	良好
25 三	同上	口 径 器 高	10.2 6.4	半球形の体部から屈曲し、上外方へ短く伸びる口縁部に至る。肩部は鈍く突出。底部は突出しない小さな平底。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、下位ヘラ削り、内面ヘラナデ。	淡灰色	3mm以下の長石等の砂粒を少量含む。	良好

SD-2

遺物番号 図版番号	部 位	(cm) 注 意	口徑 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成 備 考
26 四	蓋 (土師器)			最大径を中位にもつ球形の体部から屈曲し、口縁部に至る。口縁部は欠損。底部は丸底。体部外面ハケナデ(8本)、内面ナデ。	淡灰色	3mm以下の砂粒を少量含む。	良好
27 四	蓋 (土師器)	口 径	13.2	上外方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。肩部はつまみ上げ、外に凹面をもつ。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘラ削り。	茶褐色	4mm以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好
28 四	同上	口 径	12.6	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。肩部はつまみ上げる。体部中位以下は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)後ハケナデ(10本)、内面ヘラ削り。	外 淡褐色 内 灰褐色	2.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好
29	同上	口 径	12.6	口縁部は上外方へ伸び、肩部は着つまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘラ削り。	淡灰色	3mm以下の砂粒を少量含む。	良好
30	同上	口 径	13.0	口縁部は上外方へ伸び、肩部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面タタキ後ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘラ削り。	乳茶褐色	2mm以下の砂粒を少量含む。	良好
31	同上	口 径	15.2	口縁部は上外方へ外反して伸びる。肩部は着つまみ上げる。体部は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ、ハケナデ、内面ヘラ削り。	外 褐灰色 内 暗茶褐色	3.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好 保存書。
32	同上	口 径	16.4	内ヒカへ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。肩部は外へつまみ上げ、体部中位以下は欠損。 口縁部外面タタキ後ヨコナデ、内面ヨコナデ後ハケナデ、体部外面タタキ(3本)後ハケナデ(10本)、内面ヘラ削り。	淡茶褐色	2mm以下の角閃石・長石・雲母等の砂粒を少量含む。	良好

遺物番号 図取番号	器 種	(cm) 口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
33	壺 (上脚器)	口径 16.2	上内方へ伸びる体部から屈曲し、上方へ短く伸びる頸部に至る。さらに屈曲した後上外方へ伸びる口縁部に至る。肩部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ナデ。	暗茶灰色	5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	
34	壺 (上脚器)	口径 18.6	内上方へ内湾気味に伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。肩部はつまみ上げ、外に面をもつ。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(4本)後ハケナデ(6本)、内面ヘウ削り。	暗灰褐色	5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	

遺構に伴わない遺物

遺物番号 図取番号	器 種	(cm) 口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
35	壺 (上脚器)	口径 14.4	上内方へ内湾して伸びる体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。肩部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部下位は欠損。 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面タタキ(3本)、内面ヘウ削り。	灰褐色	0.5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	黒付着。
36	高杯 (須恵器)	口径 11.3 器高 3.4	杯部は丸みをもつ底から緩やかに屈曲し、上外方へ伸びる口縁部に至る。頸部は丸い。脚部は上外方へ伸びた後2段に屈曲し、下外方へ下る。肩部は凹面をもつ。 内外面屈折ナデ。	灰青色	精良 細砂粒を少	良好	欠形。 黒付着。 ヘウ記号。
37	杯蓋 (須恵器)	口径 13.0 器高 7.3	低い天井部から下内方へ内湾して口縁部に至る。肩部は丸い。 天井部約1/5屈折ヘウ削り、他は向転ナデ。	淡灰色	葉含む。	良好	ロクロ右方向。 完形。 ロクロ右方向
38	皿 (上脚器)	口径 12.4 器高 2.8	平皿に近い体底部から屈曲し、上外方へ外反気味に伸びる口縁部に至る。肩部は鈍く突る。 口縁部内外面ヨコナデ、体表面外面ナデ、内面放射状ヘクミガキ。	茶灰色	5mm以下の砂粒を少量含む。	良好	

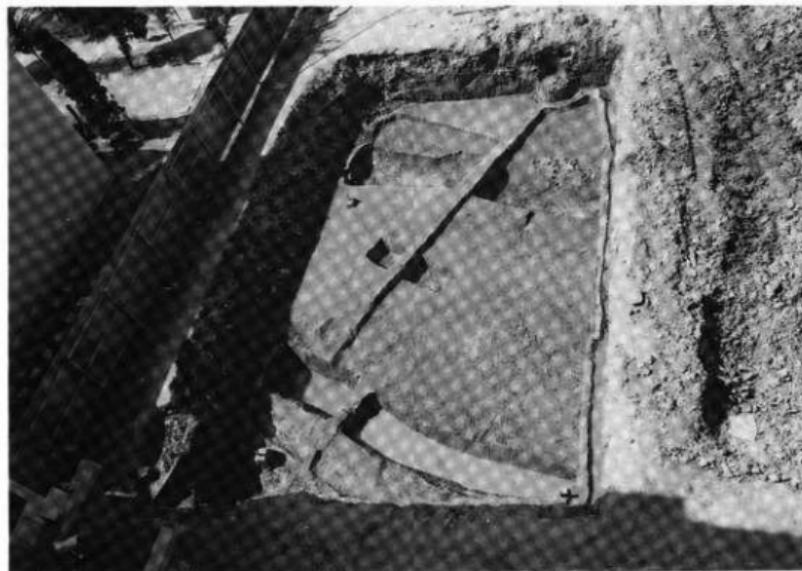
Ⅳ まとめ

今回の調査では、第2調査区で、古墳時代前期と奈良時代の遺構が検出された。奈良時代の遺構は、南部に隣接する第1次調査(SH82-1)で奈良時代に比定される遺構が検出されており、北部への広がりが確認された。また、南東部約80mで実施した第3次調査(SH87-3)でも同時期の掘立柱建物などの遺構が検出されており、当調査地の周辺で奈良時代の集落が存在していたことが明らかとなった。古墳時代前期の遺構は、当調査区の北西約60m地点(光南町1丁目29)で、昭和56年に八尾市教育委員会が実施した調査で、墓域が検出されており、両者間の有機的な関係が推定できよう。

圖 版



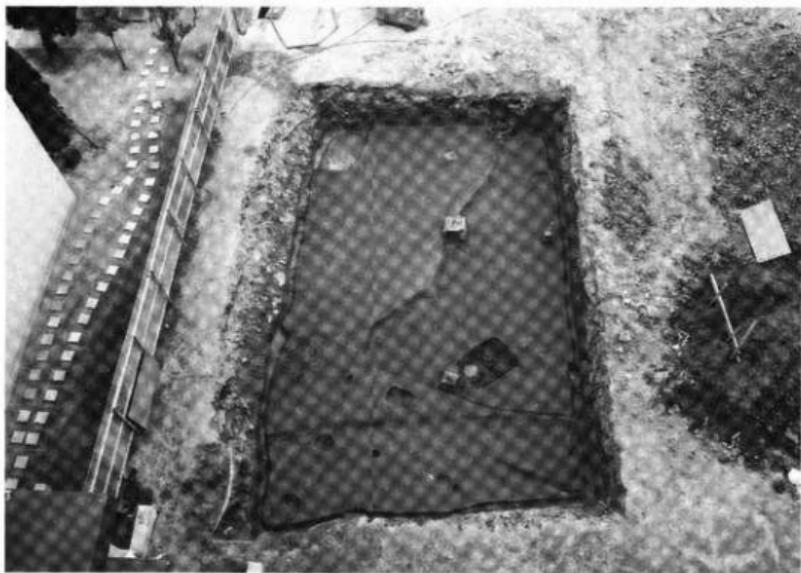
第1調査区全景(北から)



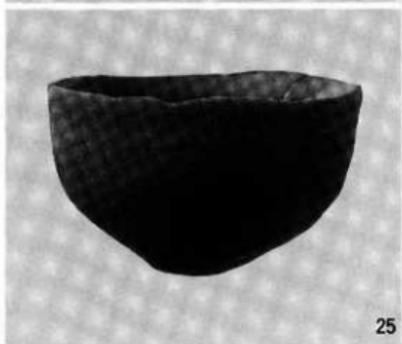
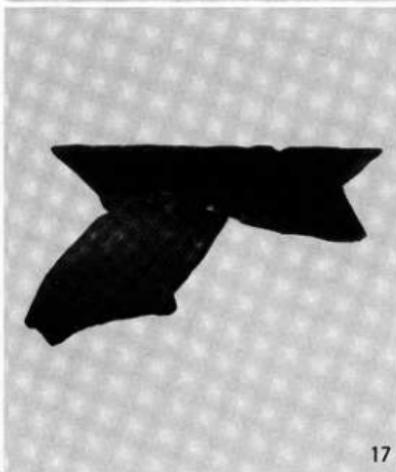
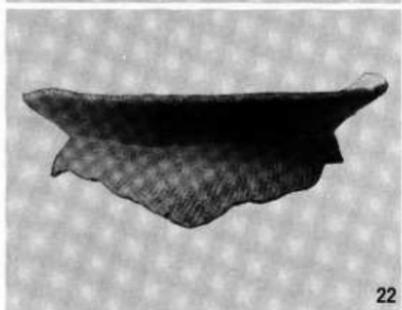
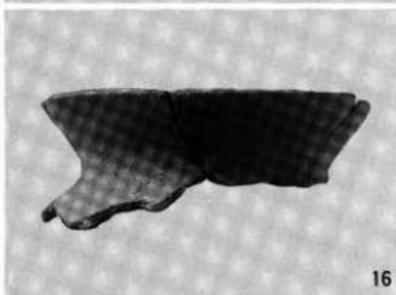
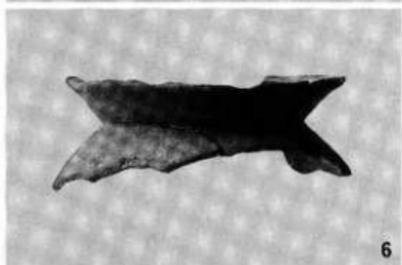
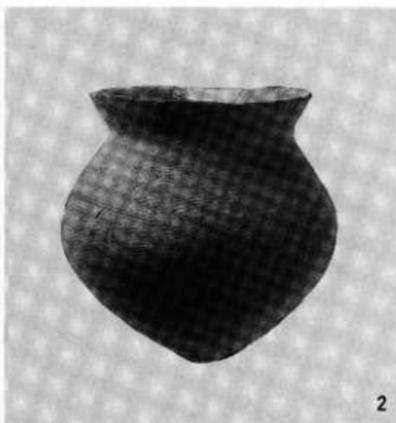
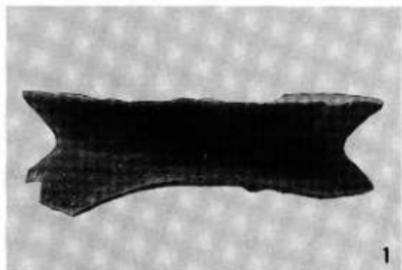
第2調査区全景(北から)

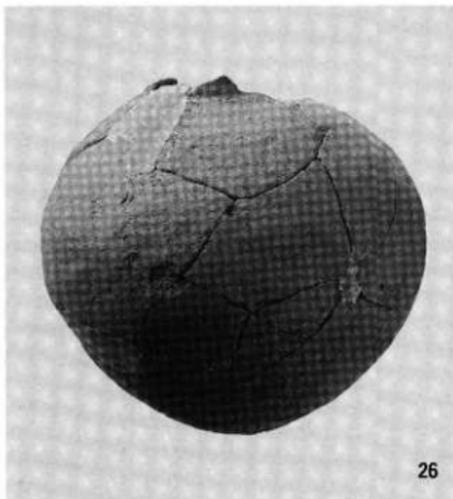


第2調査区SD1 東部検出遺物(北から)



第2調査区第2調査面全景(北から)

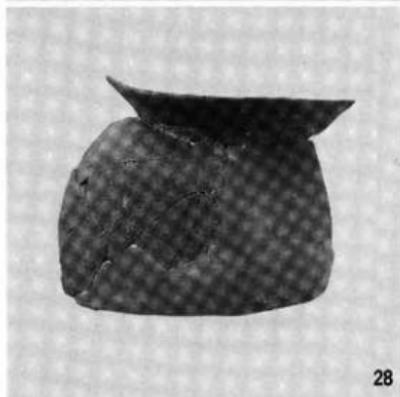




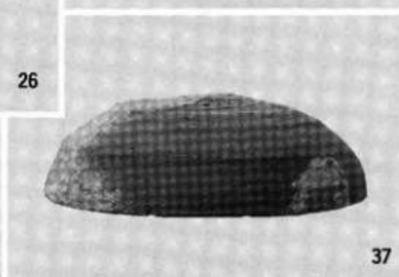
26



27



28



37



36

SD 1 26~28

遺構に伴わない出土遺物36・37

第4章 第3次調査(S H81-3)発掘調査報告

例 言

1. 本書は、八尾市清水町2丁目2-5番地で実施した校舎建替え工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書に報告する成法寺遺跡第2次調査（SH83-3）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和62年5月25日から7月15日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は812㎡を測る。なお、調査においては高井裕之・岡山清一・八元聡志・岩本多貴子・村田英子・村田圭子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成3年に刊行した。
1. 本書に関する業務は、遺物実測—岡田・高井・松村富子・村田（丰）、図面レイアウト—岩本・村田英子、図面トレース—岩本・村田（英）、遺物写真撮影—高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、第4節出土遺物観察表については村田英子が担当した。
1. 全体の編集は高萩が行った。
1. 本書の構成・編集は高萩千秋が行い、文責等は各例言に明記した。

本 文 目 次

I はじめに	39
II 調査概要	40
1. 調査の方法	40
2. 基本層序	41
3. 検出遺構・出土遺物	41
1) 奈良時代	43
2) 鎌倉時代	52
3) 遺構に伴わない遺物	54
III 出土遺物観察表	56
IV まとめ	60

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	39
第2図	調査区設定図及び区割図	40
第3図	基本層序柱状図 (S = 1/40)	41
第4図	第1調査面遺構平面図	42
第5図	SB 2 平断面図	44
第6図	SB 2 平断面図	45
第7図	SB 3 平断面図	46
第8図	SP 20 平断面図	46
第9図	SK 1 平断面図	47
第10図	SK 1 出土遺物実測図	47
第11図	SK 2 出土遺物実測図	48
第12図	SD 14 出土遺物実測図	50
第13図	SD 25 出土遺物実測図	51
第14図	SD 43 出土遺物実測図	51
第15図	SO 1 出土遺物実測図	52
第16図	SD 3 出土遺物実測図	52
第17図	第2調査面遺構平面図	53
第18図	遺構に伴わない遺物	55

表 目 次

第1表	小穴 (SP) 一覧表	48
第2表	小穴 (SP) 一覧表	49
第3表	溝 (SD) 一覧表	51

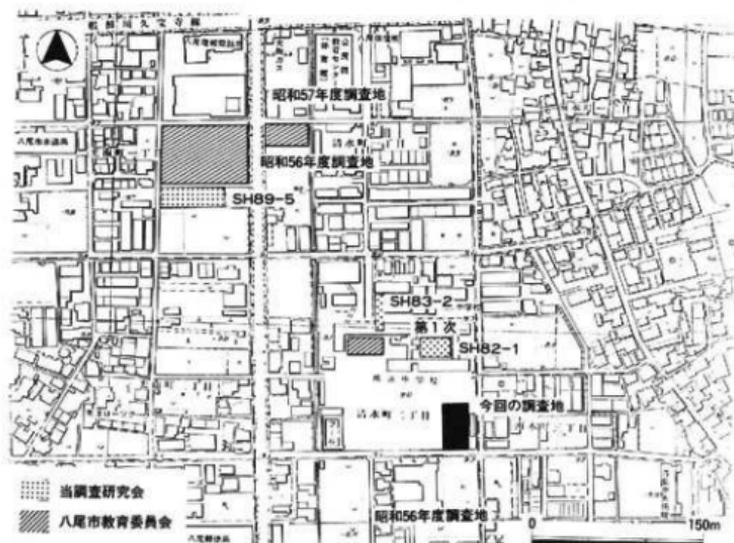
図 版 目 次

- 図版一 調査区全景 (北から)
調査区北部 (北から)
- 図版二 SB 1 (南から)
SB 1 (南から)
- 図版三 SB 1内SP 8 (南から)
SB 1内SP 9 (南から)
- 図版四 SB 1・SB 2 (南から)
SB 2 (北から)
- 図版五 SK 1全景 (西から)
SD 37 (西から)
- 図版六 北西部遺構 (西から)
下層確認トレンチ (北から)
- 図版七 出土遺物 SP 20 1 SK 1 2, 3, 5, 9 SP 25 14 SD 17 銅製品
SO 1 21・22
遺構に伴わない出土遺物 25
- 図版八 出土遺物 遺構に伴わない出土遺物

I はじめに

今回の調査は、八尾市清水町2丁目2-5に所在する市立成法寺中学校の体育館建設に伴う発掘調査で、当調査研究会が当遺跡で実施した第3次調査(SH87-3)にあたる(第1図)。

当中学校では、校舎建設に伴う発掘調査が3回にわたり実施されている。昭和56年度に八尾市教育委員会、昭和57年度に八尾市教育委員会と当調査研究会が第1次調査(SH82-1)、昭和58年度には第2次調査(SH83-2)を実施している。その結果、古墳時代前期に比定される土坑・溝、古墳時代後期～奈良時代の土坑・掘立柱建物・溝などを検出している。今回の調査区は、当中学校敷地内の南東部にあたり、当中学校内で実施された第4回目の調査に当たる。調査期間は昭和62年5月25日～7月15日迄である。調査面積は約812㎡を測る。



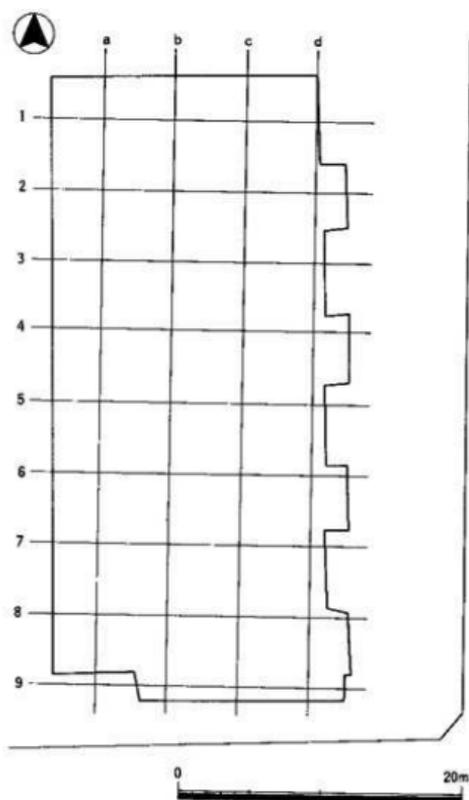
第1図 調査地周辺図

Ⅱ 調査概要

1. 調査の方法

調査は、八尾市教育委員会が実施した試掘調査のデータに基づいて、現地表面から約1.3mまでの土層を機械掘削し、以下、40cmの土層については人力による掘削を実施した。

地区別は、国土地理院の東西軸・南北軸により調査区の東西30m、南北50mの範囲内に5m四方の区画をした。地区名は北西部の隅から東西線が数字（1～9）、南北線がアルファベット



第2図 調査区設定図及び区割図

(a～d)を付した。なお、国土座標の値は、北西部の隅の交点がX=-15 3081.000、Y=-36 197.000を測る(第2図)。

2. 基本層序

当調査区では、現地表面から2.5mまでに存在する土層で普遍的に見られる10層を抽出して基本層序とした(第3図)。現地表面は標高8.8mを測る。

第1層 盛土：層厚1m。当中学校建設に伴い増設した土層である。

第2層 旧耕土：層厚10～20cm。畑と考えられ、畝の高まりが幾筋も見られる。

第3層 床土：層厚20～25cm。耕土の床土で、酸化鉄の斑点が上部に見られる。

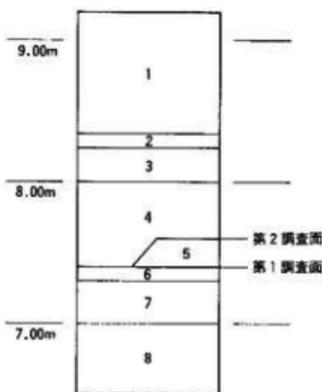
第4層 棕色砂質土：層厚20～30cm。酸化鉄を多量に含み、中世の遺物がごく少量含まれる。

第5層 棕色細砂混粘質土：層厚20～35cm。奈良～平安時代の遺物が含まれる(第2調査面)。

第6層 棕色明青灰色細砂混粘質土：層厚10～25cm。奈良時代の遺構を検出した(第1調査面)。

第7層 淡茶灰色細砂：層厚20～30cm。

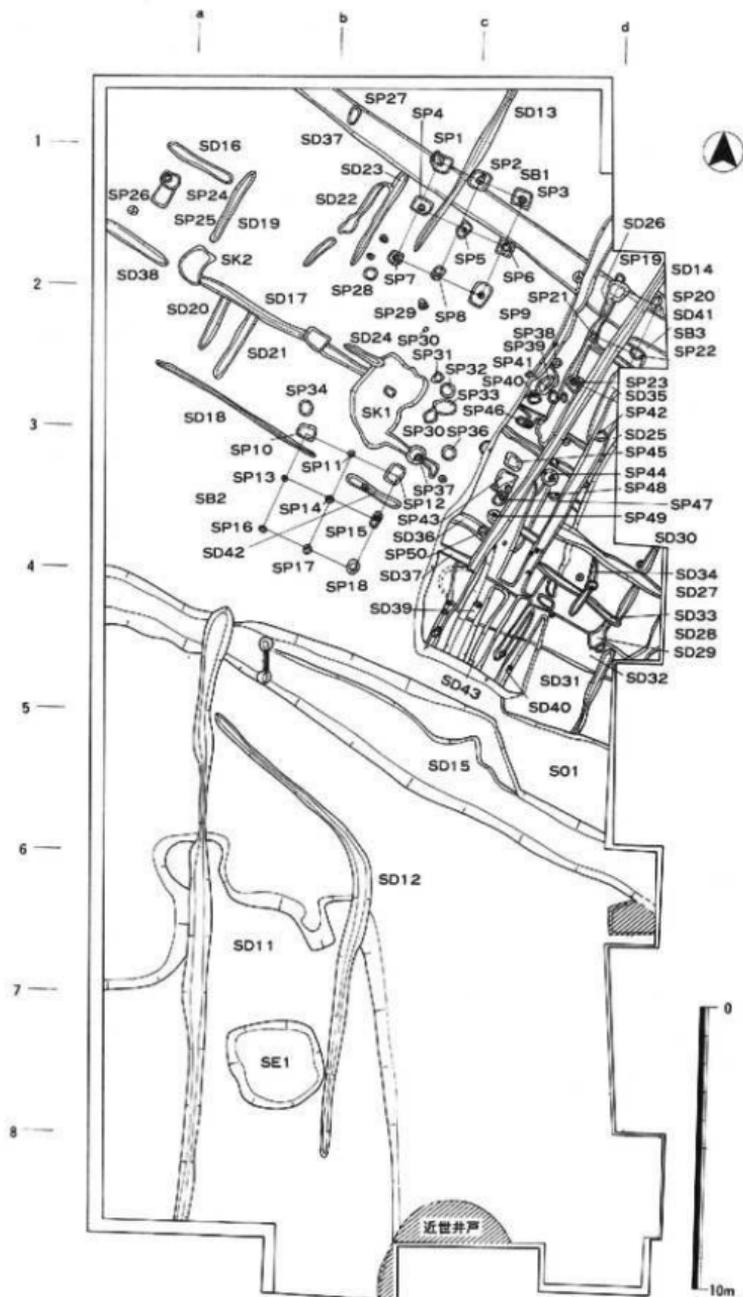
第8層 青灰色細砂：層厚10cm。



第3図 基本層序柱状図 (S=1/40)

3. 検出遺構と出土遺物

2面を調査対象面(第1調査面・第2調査面)とした。その結果、第1調査面は奈良時代に比定される掘立柱建物3棟(SB1～SB3)・小穴50個(SP1～SP50)・土坑2基(SK1・SK2)・溝33条(SD11～SD43)、第2調査面は第5層から切り込むもので鎌倉時代に比定される井戸1基(SE1)・溝10条(SD1～SD10)を検出した。以下、検出した遺構・遺物について記す(第4図)。



第4図 第1 観音面遺構平面図

1) 奈良時代

掘立柱建物 (SB)

SB1

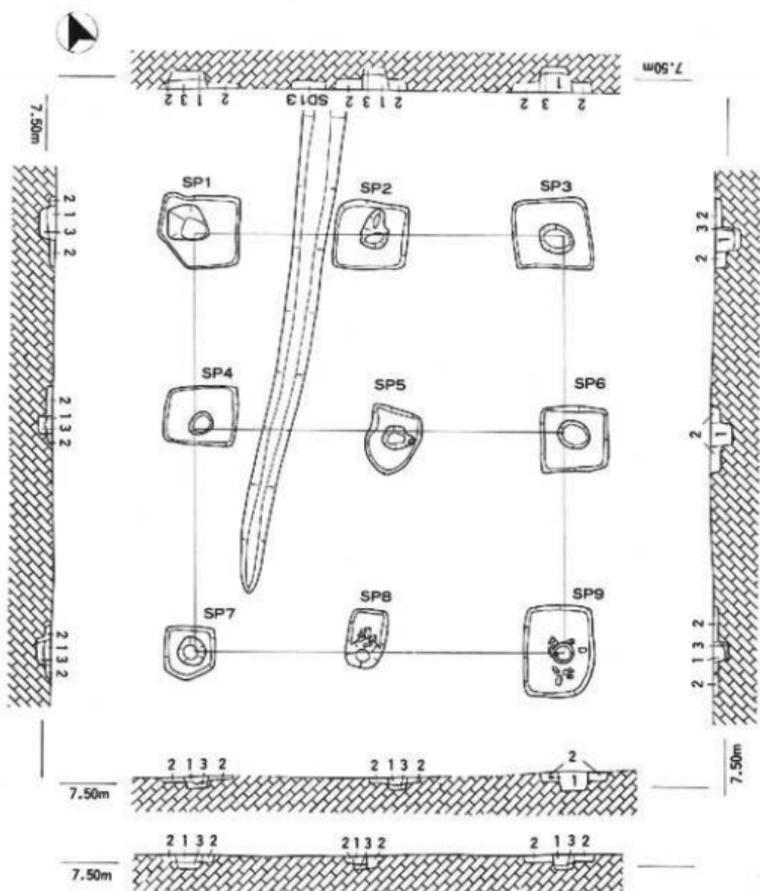
2c~d区で検出した。上部は鎌倉時代の耕作によって削平されている。規模は2×2間(3.2m)の総柱の建物である。方向は南北軸に対して東へ30度を示す。柱穴は東西が1.6m、南北が1.85mの等間隔である。柱穴の掘形の平面は隅丸方形を呈し、一辺45~82cm、深さ15~25cmを測る。柱穴内には径22~30cmを測る柱痕が見られる。なお、SP8・SP9には柱痕の周囲に小石(径4~8cm)が置かれており、SP8で6個、SP9で12個を数えた。柱穴の内部の埋土は掘形内が灰褐色~茶褐色砂質土で、柱痕内が暗灰褐色~黒褐色細砂混シルト・暗灰褐色細砂である。遺物は掘形内から奈良時代に比定される須恵器・土師器の小片がごく少量出土している(第5図)。

SB2

4b~c区で検出した。上部はSB1と同じく削平されている。規模は2×2間(3.5×3.6m)の総柱の建物である。方向は南北軸に対し東へ30度を指し、SB1と同じ方向である。柱穴の間隔は東西が西から1.8m、1.7m、南北が北から1.7m、1.9mを測る。柱穴の掘形の平面は隅丸方形を呈し、規模は一辺20~70cm、深さ10~25cmを測る。2個(SP15)の柱穴内には径22cmを測る。平面の形状がほぼ円形の柱痕が見られる。柱穴の内部には掘形が暗灰褐色細砂混シルト、柱混内が暗褐色粘質シルトが堆積している。遺物は奈良時代に比定される須恵器・土師器の小片が少量出土している(第6図)。

SB3

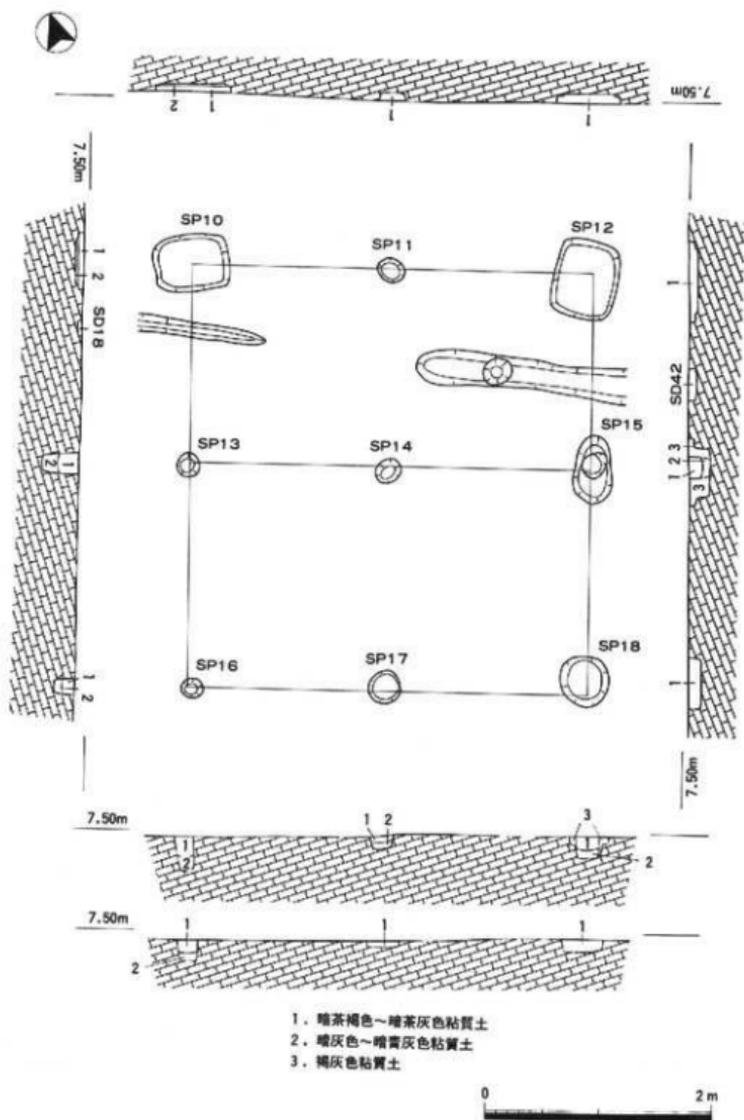
3d~e区で検出した。東部は調査区外に至っており、全体の規模は不明である。検出部で2×1間(3.6×1.6m)分を確認している。この建物はSB1・SB2と違い、鎌倉時代以降による削平をあまり受けていないが、同時期の溝と切り合う。方向はSB1・SB2と同じ方向を示す。柱穴の間隔は東西が1.6m、南北がともに1.8mを測る。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、一辺30~70cmを測る。断面は逆台形を呈し、深さは20~35cmを測る。柱穴内には平面円形を呈す。径20cmの柱痕が1個(SP23)がある。堆積土内部の埋土は、掘形内が暗茶褐色粘質シルト、柱痕内が暗灰褐色シルト粘土である(第7図)。遺物は、奈良時代に比定される須恵器の蓋杯・杯身(1)、土師器の皿等の小片が少量出土している(第8図)。また、SP19の上層から小石(径8~10cm)4個が出土している。



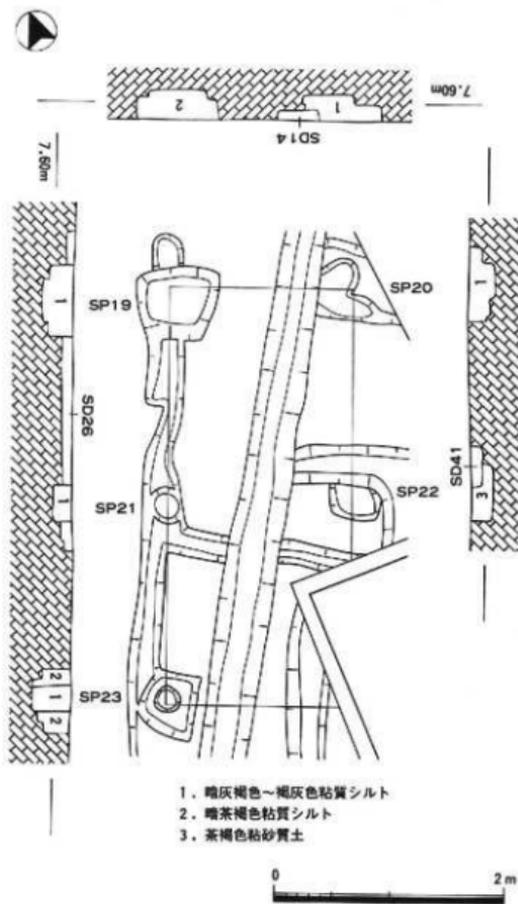
1. 黒灰色～灰茶色砂質土
2. 灰褐色～淡灰色細砂混じり砂質土
3. 暗灰色細砂混じり粘質土～茶灰色細砂質土

0 2m

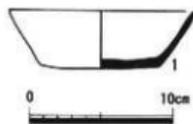
第5図 SB1平面図



第6図 SB2平面図



第7図 SB3平断面図



第8図 SP20平断面図

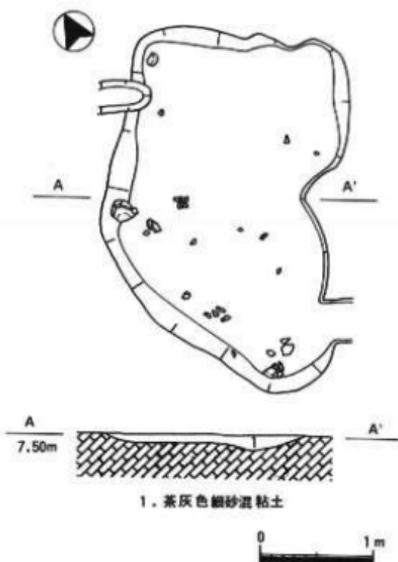
土坑(SK)

SK 1

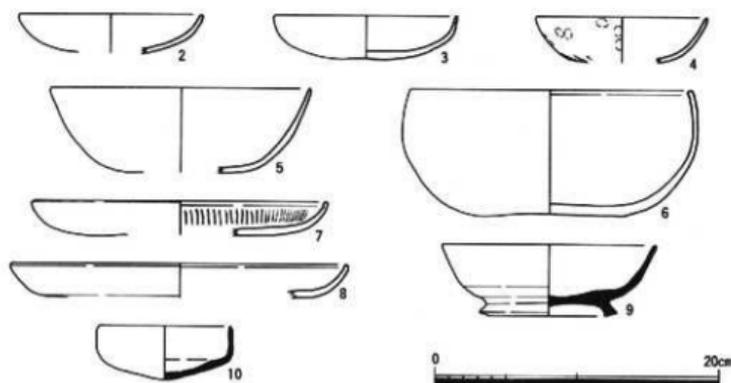
3c区で検出した。SB1とSB2の間に位置する遺構で、上部は鎌倉時代の溝によって削平されている。平面の形状は不定形を呈し、最大幅3.2m、最小幅1.75m、深さ12cmを測る。断面は浅い逆台形を呈し、中央付近の底面には若干のくぼみがみられる。堆積土は茶灰色細砂混粘土で、内部から奈良時代に比定される須恵器の杯身(9・10)、土師器の皿(7・8)・小皿(2~4)・鉢(5・6)などのほか小片が少量出土している(第9・10図)。

SK 2

2a-b区で検出した。平面の形状は不定形を呈し、最大幅1.3m、最小



第9図 SK 1平面図



第10図 SK 1出土遺物実測図

幅0.9m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は暗灰褐色細砂混シルト・褐灰色粘質シルトである。遺物は古墳時代後期に比定される須恵器の杯身(10)などの小片が少量出土している(第11図)。



第11図 SK2出土遺物実測図

小穴(SP)

SP1~SP50

調査区から50個を検出した。これらの小穴は北東部に集中している。SP1~SP23は掘立柱建物の柱穴である。その他の小穴も建物に伴う小穴と考えられるが後世に削平されて消滅したもので、調査区内で規則的に並ぶものは検出されなかった。これらの小穴の平

第1表 小穴(SP)一覽表

* 単位: cm

遺構番号	地 区	平面形	断面形	径	推 積 土	備 考	
SP1	2c	隅丸方形	逆凸形	66~70	6	暗灰褐色~暗茶灰色砂質土	SB1内
SP2	2c~2d	隅丸方形	逆凸形	62~65	10	暗茶灰色~灰茶色砂質土	SB1内
SP3	2d	隅丸方形	逆凸形	62~69	10	黒褐色~褐灰色砂質土	SB1内
SP4	2c	隅丸方形	逆凸形	52~65	4	暗灰褐色~暗茶灰色砂質土	SB1内
SP5	2c	隅丸方形	逆凸形	44~58	6	灰茶色~茶灰色砂質土	SB1内
SP6	2d	隅丸方形	逆凸形	60	11	黒灰色砂質土	SB1内
SP7	2c	隅丸方形	逆凸形	46~47	6	灰褐色~茶灰色砂質土	SB1内
SP8	2c	隅丸方形	逆凸形	34~52	7	灰褐色細砂礫砂質土	SB1内
SP9	3c~3d	隅丸方形	逆凸形	63~81	7	灰褐色~暗茶灰色砂質土	SB1内
SP10	4b	隅丸方形	逆台形	50~66	6	暗褐色粘質土 (酸化鉄を多量に含む)	SB2内
SP11	4c	円形	逆台形	22	6	暗茶褐色粘質土	SB2内
SP12	4c	隅丸方形	逆台形	50~70	8	暗茶褐色粘質土	SB2内
SP13	4b	円形	逆台形	20	32	暗茶色~茶灰色粘質土 (下層青灰色粘質土)	SB2内
SP14	4b~4c	円形	逆台形	21	14	暗茶色~茶灰色粘質土 (下層暗灰色粘質土)	SB2内
SP15	4c	楕円形	逆凸形	33~60	8	暗灰茶色~褐灰色粘質土 (下層暗灰色粘質土)	SB2内
SP16	4b	円形	逆台形	18	18	暗灰茶色粘質土 (暗灰色粘土)	SB2内
SP17	4c	円形	逆台形	28	5	暗茶灰色粘質土 (下層明青灰色粘質土)	SB2内
SP18	4c	楕円形	逆台形	42~48	12	暗茶灰色粘質土	SB2内

第2表 小穴(SP)一覧表

* 単位: cm

遺構番号	地 区	平面形	断面形	径	推 積 土	備 考	
SP19	2 d ~ 2 e	隅丸方形	逆台形	65~68	27	暗灰褐色粘質シルト	SB3内
SP20	2 e	隅丸方形	逆凸形	68以上	11	褐灰色粘質シルト (一部暗褐色粘質土)	SB3内
SP21	3 d	楕円形	逆台形	28~33	8	暗灰褐色粘質シルト	SB3内
SP22	3 e	隅丸方形	逆台形	44~	7	茶褐色粘砂質土	SB3内
SP23	3 d	隅丸方形	逆凸形	49~58	30	褐灰色粘質シルト	SB3内
SP24	2 a	楕円形	逆凸形	52~65	6	暗茶灰色粘質シルト	
SP25	2 a	隅丸方形	逆台形	60~	8	茶灰色粘質シルト	
SP26	2 a	楕円形	逆台形	26~30	15	茶灰色細砂混粘質シルト	
SP27	1 c	楕円形	逆台形	37~71	8	茶灰色細砂混シルト (炭を含む)	
SP28	2 c	円形	逆台形	41	9	茶褐色~褐灰色砂質土	
SP29	3 c	隅丸方形	逆凸形	32	7	暗茶灰色粘質土	
SP30	3 c	楕円形	逆台形	14~21	8	暗茶灰色細砂混粘質土	
SP31	3 c	円形	逆台形	38	6	茶褐色細砂混粘質土	
SP32	3 c	円形	逆台形	50	6	暗灰褐色細砂混粘質土 (土器片・炭化物を含む)	
SP33	3 c	楕円形	逆台形	55~82	7	暗灰褐色細砂混粘質土 (酸化鉄・炭化物を含む)	
SP34	3 b	楕円形	逆台形	46~50	9	暗茶灰色粘質土	
SP35	3 c	隅丸方形	逆台形	34~46	7	暗茶色~暗灰褐色粘質土	
SP36	4 c	円形	逆台形	47	6	暗茶色~暗灰褐色粘質土	
SP37	4 c	円形	逆凸形	60	6	暗灰褐色粘質シルト	
SP38	3 d	円形	逆台形	30	7	茶灰色~褐灰色粘質シルト	
SP39	3 d	楕円形	逆台形	32~74	30	茶褐色粘質土	
SP40	3 d	楕円形	逆台形	30~46	14	暗灰褐色粘質シルト	
SP41	3 d	楕円形	逆凸形	34~46	15	暗茶褐色シルト混粘土	
SP42	3 d	楕円形	逆台形	36~42	7	茶灰褐色細砂混砂質土	
SP43	4 d	隅丸方形	逆凸形	66~84	15	褐灰色粘質土	
SP44	4 d	楕円形	逆凸形	56~66	21	褐灰色~暗褐色粘質土 (下層茶褐色粘質土)	
SP45	4 d	隅丸方形	逆台形	51~60	14	褐灰色細砂混粘質土	
SP46	3 d	楕円形	逆凸形	28~60	15	暗灰褐色粘質シルト	
SP47	4 d	楕円形	逆凸形	44~62	9	茶灰色細砂混粘質シルト	
SP48	2 a	円形	逆台形	20~41	13	褐灰色粘質土	
SP49	4 d	楕円形	逆凸形	44~49	13	茶灰褐色粘質シルト (下層淡青灰色シルト)	
SP50	4 d	円形	逆台形	30	15	茶褐色粘質シルト (下層暗灰色細砂混粘質土)	

面の形状には円形のもの8個、楕円形のもの14個、隅丸方形のもの5個がある。断面は逆台形18個と逆凸形9個に分かれる。規模は検出部で、径30～70cm、深さ6～15cmを測るものが大部分である。堆積土は色調が褐色茶色～茶灰色で、シルト～細砂泥粘質土である。各小穴については第1・2表を参照されたい。

溝 (SD)

SD11

5b～9b区で検出した。方向は南北方向を示す。規模は検出部で、幅10～70cm、深さ10～25cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は青灰色細砂泥粘土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。時期は第2調査面で検出した鎌倉時代のSD1と同時期と考えられる。

SD12

6b～9c区で検出した。方向は南東～北西に伸びた後屈曲し、北東へ伸びる溝で、南北部はともに途中で途切れている。規模は検出部で、幅30～50cm、深さ10～20cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰青色細砂泥粘土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。

SD13

1d～2c区で検出した。方向は北西～南東を示す。規模は検出部で、幅26～40cm、深さ6cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は明青灰色細砂泥粘質土である。遺物は奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している。

SD14

2e～4d区で検出した。方向は北西～南東を示す。規模は検出部で、幅38～48cm、深さ14～17cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰褐色細砂シルト混粘土で、内部から奈良時代～鎌倉時代に至る土器の小片が少量出土している (第12図)。

SD15

調査区中央で検出した。方向は南西～北東を示す。規模は検出部で、幅1.2m、深さ20～30cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は茶灰色細砂泥粘土である。遺物は奈良時代の土器の小片が少量出土している。

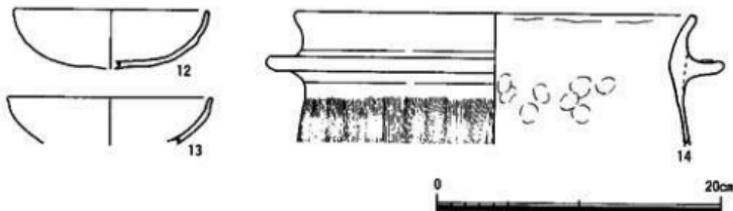
溝 (SD)

SD16～SD43

調査区北部の住居域内で検出している。溝の方向には南西～北東と南東～北西の2方向があ

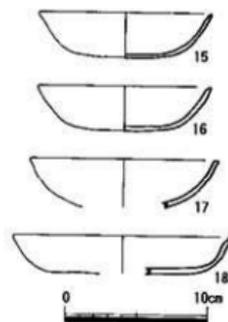


第12図 SK2出土遺物実測図



第13図 SD25出土遺物実測図

る。規模は検出部で、幅14~74cmの小溝と幅62~164cmのやや大きい溝があるが、前者の方にほとんど含まれる。深さは2~30cmを測り、比較的浅い。堆積土はベース面の土層によって埋まっている土層が異なるが、溝の時期は若干の切り合い関係がみられるが、ほぼ同時期に比定してもよいものであろう。溝の性格として考えられることは畝溝・鋤溝などの耕作溝である。同一面では奈良時代の住居域を検出しているが、この住居域が何かの諸事情により移動ないしは廃絶したものと考えられる。



第14図 SD43出土遺物実測図

第3表 溝(SD)一覧表

遺構番号	地 区	方 向	断面形	幅	深 さ	堆 積 土 層	備 考
SD16	2 a ~ 2 b	南東-北西	楕円形	30-40	4-6	灰褐色細砂混シルト	
SD17	2 b ~ 3 c	南東-北西	楕円形	30-40	8-9	暗灰色細砂混シルト	S K 1 が切る
SD18	3 a ~ 4 b	南西-北東	楕円形	14-22	3-7	暗褐色粘質シルト	
SD19	2 b	南西-北東	楕円形	26-30	5-7	暗褐色粘質シルト	
SD20	3 b	南西-北東	楕円形	24-34	6-8	灰褐色粘質シルト	S D17 が切る
SD21	3 b	南西-北東	楕円形	34-40	3-8	暗褐色粘質シルト	S D17 が切る
SD22	2 b ~ 2 c	南西-北東	楕円形	16-24	4-5	暗褐色粘質シルト	
SD23	2 c	南西-北東	楕円形	16-36	2-7	暗褐色粘質シルト	
SD24	3 c	南東-北西	楕円形	18-24	6-10	暗褐色粘質シルト	
SD25	4 c ~ 3 d	南西-北東	逆台形	28-80	12-18	暗褐色粘質シルト	S D27 が切る
SD26	3 d	南西-北東	楕円形	16-38	5-10	暗褐色粘質シルト	S P35・S K 2 が切る
SD27	4 d ~ 5 e	南東-北西	楕円形	28-58	10-27	暗褐色粘質シルト	
SD28	5 e	南西-北東	楕円形	30-60	5-7	暗褐色粘質土	
SD29	4 d ~ 5 e	南西-北東	逆台形	26-64	3-5	暗褐色粘質シルト	S D33 が切る
SD30	4 d ~ 5 e	南西-北東	逆台形	26-64	3-5	暗褐色粘質シルト	
SD31	4 d ~ 5 e	南西-北東	逆台形	20-32	3-5	暗褐色粘質シルト	S D32 が切る
SD32	4 c ~ 5 e	南東-北西	逆台形	62-164	13-18	暗褐色粘質シルト	
SD33	3 d ~ 5 e	南東-北西	楕円形	20-32	2-10	暗褐色粘質シルト	S D30 が切る
SD34	4 d ~ 5 d	南西-北	楕円形	18-26	3-4	暗褐色粘質シルト	S D27・S P34 が切る
SD35	3 e	南西-北東	楕円形	30-	7-13	暗褐色粘質シルト	S D21 が切る
SD36	4 c ~ 4 d	南東-北西	逆台形	40-47	18-28	暗褐色粘質シルト	S D14 が切る
SD37	4 c ~ 4 d	南東-北西	楕円形	28-32	27-28	暗褐色粘質シルト	S D14 が切る
SD38	2 a	南東-北西	楕円形	30-42	6-11	暗褐色粘質シルト	
SD39	4 c ~ 5 d	南西-北東	逆台形	78-	8-26	暗褐色粘質シルト	
SD40	5 d	南西-北東	楕円形	30-40	7-13	暗褐色粘質シルト	
SD41	3 e	南東-北西	楕円形	104-	11-15	暗褐色粘質シルト	S D14 が切る
SD42	4 c	南東-北西	楕円形	24-30	5-7	暗褐色粘質シルト	
SD43	3 d ~ 5 d	南西-北東	楕円形	38-54	8-23	暗褐色粘質シルト	

1) 鎌倉時代

SO1

5d~6d区で検出した。東部は調査区外に至り、南部はSD15に切られる。北部はSD31を切る。東西3.8m以上、南北3.2m以上、深さ33cmを測る。堆積上は暗灰色砂混粘質土・暗黒灰色粘質土で、内部から奈良時代〜鎌倉時代に比定される土師器の皿(19)・甕(20)、須恵器の杯蓋(21)・杯身(22)・甕(23)などの小片が少量出土している(第15図)。

溝(SD)

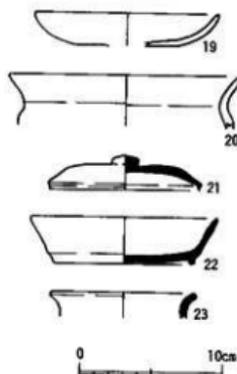
SD1~SD10

第5層上面で10条検出した。調査区中央で検出したSD1が幅・規模ともに大きく、南から北方へ伸びた後、中央付近で屈曲し北東方向へ伸びる溝で、SD3~SD10は調査区北部で南西-北東の方向に伸びる。SD2はSD1の屈曲部から北西方向に至るものである。これらの溝は耕作に関連するもので、下層で検出している溝の方向と一致しており、耕地区画がほとんど変わっていないことが分かった。SD3内から鎌倉時代に比定される瓦器小皿(24)が出土している(第16図)。

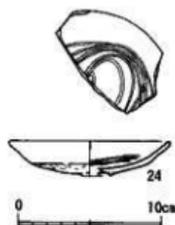
個々の溝の法量などについては第3表に記す。

第1表 溝(SD)一覧表

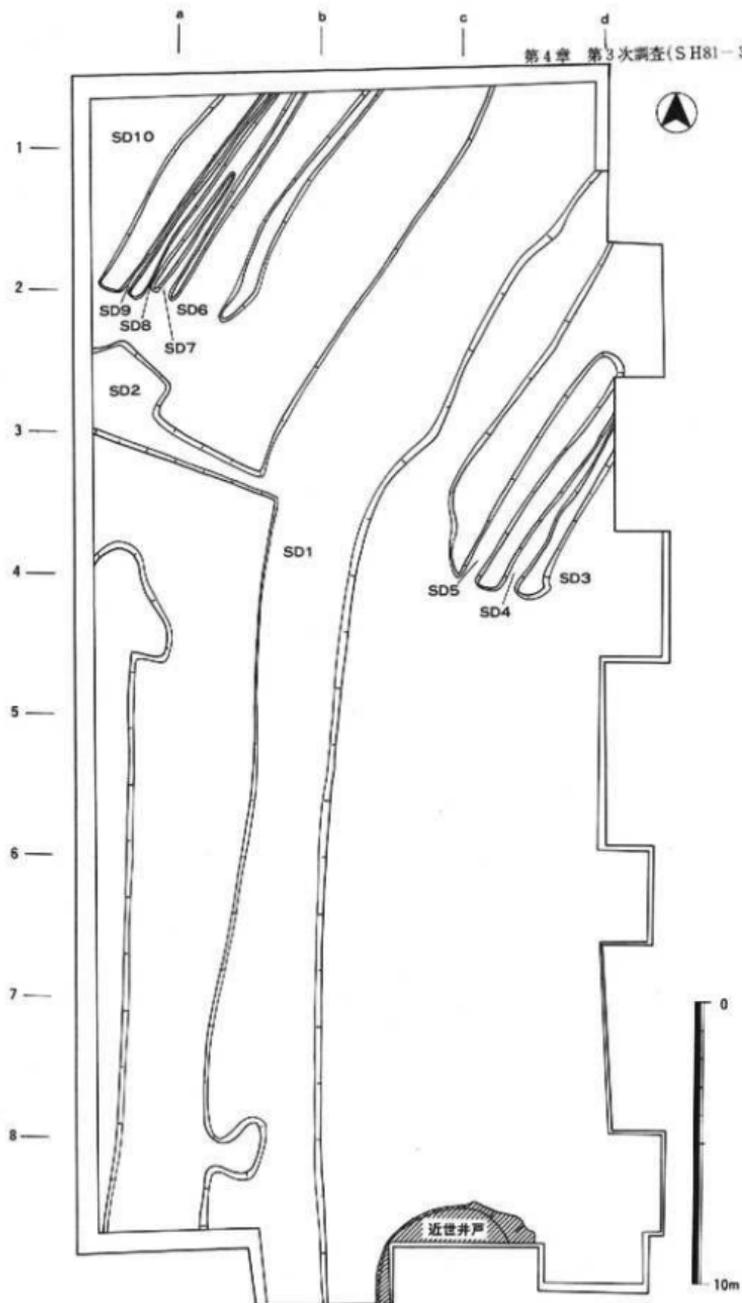
遺構番号	地区	方向	断面形	幅	深さ	堆積	上	備考
SD1	1b~10d	南北	皿状形	390~500	8~13	青灰色粘土		SD2と合流
SD2	3a~4b	南東-北西	皿状形	80~350	9~11	青灰色粘土		SD1と合流
SD3	4d~6e	南西-北東	皿状形	450~	5~15	暗灰色粘質シルト		
SD4	3e~5c	南西-北東	皿状形	30~70	4~5	淡灰褐色細砂混粘土		
SD5	3d~4e	南西-北東	碗状形	70~130	4~10	淡灰褐色細砂混粘土		
SD6	1b~3c	南西-北東	皿状形	90~170	3~11	淡灰褐色細砂混粘土		
SD7	1a~3b	南西-北東	皿状形	30~40	9~10	淡灰褐色細砂混粘土		
SD8	1a~3b	南西-北東	碗状形	60~100	7~12	淡灰褐色細砂混粘土		
SD9	1a~2b	南西-北東	皿状形	30~40	7~11	淡灰褐色細砂混粘土		
SD10	1a~2b	南西-北東	碗状形	350~	7~13	淡灰褐色細砂混粘土		



第15図 SO1出土遺物実測図



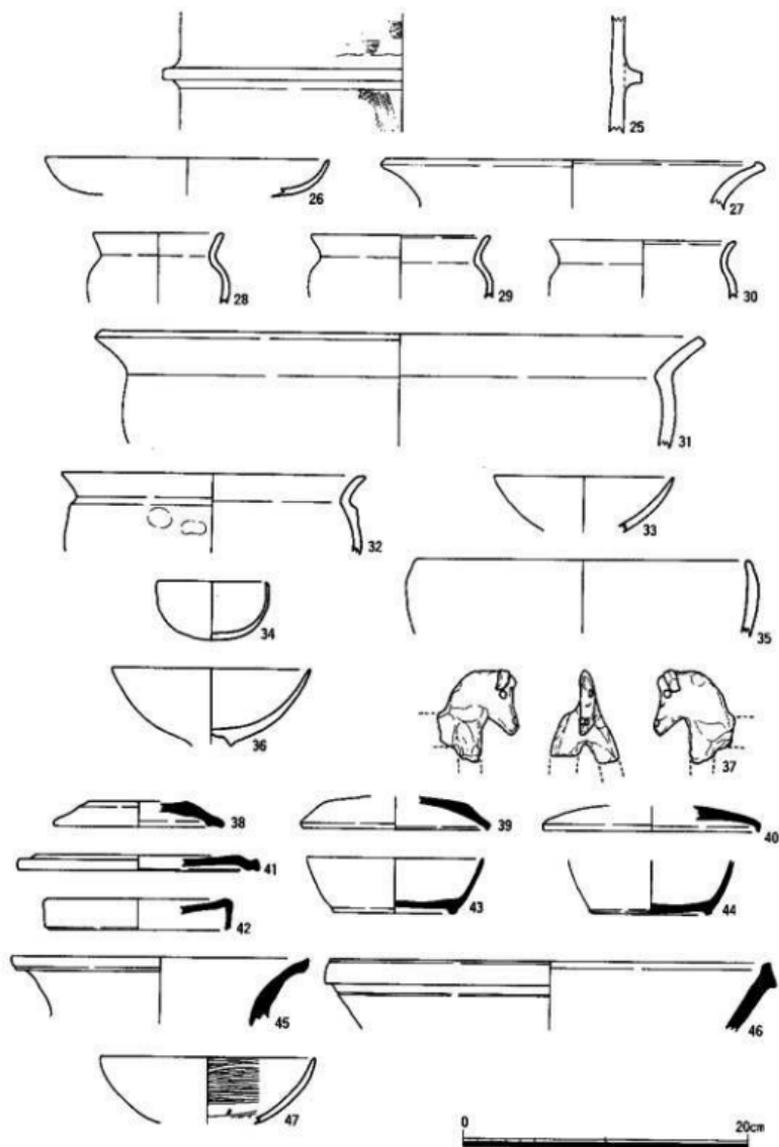
第16図 SD3出土遺物実測図



第17図 第2調査面遺構平面図

3) 遺構に伴わない出土遺物

調査区内で出土した遺物はコンテナ箱にして約7箱分である。このうち、遺構に伴わない遺物は約半分を占めている。遺物は古墳時代前期（庄内式）から近世に至る各種のものを出土している。特に第4層と第5層内の出土である。第4層は鎌倉時代に比定される土器を中心に、第5層は奈良時代に比定される土器を中心に出土している。図示できたものについて記す。古墳時代中期に比定される円筒埴輪（25）、飛鳥から奈良時代に比定される土師器の皿（26）・甕（27～30・32）・大型の鉢（31）・小型の鉢（34・42）・高杯（33・36）・土馬（35）、須恵器の壺蓋（42）・杯蓋（38～41）・杯（43・44）・甕（45）・鉢（46）、鎌倉時代に比定される瓦器椀（47）である（第18図）。また、時期不明の銅製品（図版7）が1点出土している。



第18図 遺構に伴わない遺物

Ⅲ 出土遺物観察表

遺物番号 採取番号	種 類	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1 七	杯身 須恵器 SP20	口 径 1.15 器 高 13.0	平らな杯底部から思案し上外方へ伸びる。 1) 縁部はやや尖り気味。 口縁部内外面回転ナデ、内面不定方向ナデ 外面回転ヘラクズリ後不定方向ナデ。	内 乳灰白色 外 灰白色	2mm以下の 砂粒をごく 微量に含む。	良好	完形
2 七	杯 土師器 SK1	口 径 12.8	底部から外方へ伸びた後緩やかに屈曲し 上外方へ伸びる。口縁部は丸く終わる。底部 は欠損。 口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面刺刺の為 不明。	内 乳灰茶 色 外 暗灰青 色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	外面に煤付 着。 1/4 残存
3 七	同上 SK1	口 径 12.8 器 高 3.1	浅い半球形で、口縁部は丸く終わる。1) 縁 部ヨコナデ、内外面磨耗の為不明。	内 乳灰茶 色 外 橙茶色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/2 残存
4	同上 SK1	口 径 12.0	杯底部から緩やかに屈曲し、上外方へ伸び る。口縁部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、外面擦ナデ後ヘラミガキ 内面磨耗の為不明。	乳灰茶色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/2 残存
5	杯 土師器 SK1	口 径 18.2	やや平らな底部から思案し、上外方へ伸び る。口縁部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、その他磨耗の為不明。	乳灰茶色	3mm以下の 微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/5 残存
6 七	同上 SK1	口 径 20.0 器 高 8.7	平らな杯底部から上外方へ内面しながら伸 びる口縁部はやや内側に肥厚する。 口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	乳灰灰色	3mm以下の 微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/2 残存
7	同上 SK1	口 径 20.6	平らな杯底部から思案し、上外方へ強く伸 びる。1) 縁部は内側に肥厚し、丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内面ナデ後ヘラミガキ、 外面磨耗の為不明。	乳灰茶色	1.5mm以下の 微砂粒を ごく少量含 む。	良好	1/5 残存
8	同上 SK1	口 径 23.8	杯底部から上外方へ強く伸びる。1) 縁部 は内側に肥厚し、丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内外面磨耗の為不明。	内 乳灰茶 色 外 乳灰茶 色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/6 残存
9 七	杯身 須恵器 SK1	口 径 5.0 器 高 15.0	杯底部から上外方へ伸びる。口縁部は丸 く終わる。断面ハ字形に方形の高台が付く。 回転ナデ。	灰色	3-6mmの 砂、微砂粒 を少量含む。	良好	3/4 残存
10	杯身 須恵器 SK1	口 径 9.2 器 高 3.8	やや尖りさみの杯底部から上方へ伸びる。 口縁部は丸く終わる。 内外面回転ナデ。	灰色	2.5mm 以下 の砂粒を微 量に含む。	良好	
11	杯 土師器 SD14	口 径 8.9	外部から上方へ外反しながら伸びる。口縁 部は丸く終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、外面ナデ。	橙茶色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/3 残存
12	杯 土師器 SD25	口 径 13.4 器 高 4.2	浅い半球形で、口縁部は丸く終わる。口縁 部内外面ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/4 残存
13	杯 土師器 SD25	口 径 13.4	口縁部は僅かに外反する。口縁部は丸く 終わる。 口縁部内外面ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	微砂粒を含ま ぬ。	良好	1/5 残存
14 七	引釜 土師器 SD25	口 径 27.8	1) 縁部は上方へ外反して伸びる。口縁部 は丸く終わる。胴部外面に磨がえる。胴は水 平に伸び、底部は丸い。 口縁部・胴はヨコナデ、内面ナデ、外面ハ ケナデ。	暗橙茶色	1-1.5mm の砂粒を含ま ぬ。	良好	1/6 残存
15	杯 土師器 SD43	口 径 12.0 器 高 3.2	浅い半球形で、やや平らな底部をもつ。口 縁部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	橙茶色	1-1.5mm の砂粒を含ま ぬ。	良好	1/2 残存

遺物番号 図版番号	器 種	(mm) 口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	土 質	焼 成	備 考
16	杯 土師器 SD43	口径 12.1	浅い半球形で、やや平らな底部をもつ。口縁部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	内 乳灰褐色 外 微茶色	微砂粒を含む。	良好	1/4残存
17	杯 土師器 SD43	口径 13.4	口縁部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	褐色色	微砂粒を含む。	良好	1/5残存
18	皿 土師器 SD43	口径 15.2 器高 2.7	平らな底部から直出し、上外方へ伸びる。 口縁部は内側に肥厚する。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	褐色色	微砂粒を含む。	良好	1/5残存
19	中皿 土師器 SO1	口径 12.8	平らな杯底部から上方へ伸びる。口縁部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳灰褐色	2mm以下の微砂粒を微量を含む。	良好	1/4残存
20	兼 土師器 SO1	口径 14.2	口縁部は上外方へ伸びる。口縁部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他器種の為不明。	乳灰褐色	2.5mm以下の微砂粒をごく少量含む。	良好	1/5残存
21	7 兼 土師器 SO1	口径 10.6 器高 2.4	平らな天井部からト外方へ伸びる。口縁部は下方につまみ出す。天井部外側につまみが付く。 回転ナデ。	灰色	2mm以下の微砂粒を含む。	良好	1/2残存
22	7 杯身 土師器 SO1	口径 13.0 器高 3.3	平らな杯底部から上外方へ伸びる。口縁部は丸く終わる。断面ハ字形に方形の高台が付く。 回転ナデ。	乳灰色	8mm以下の砂粒を少量含む。	良好	3/4残存
23	兼 土師器 SO1	口径 10.5	外反する口縁部で、端部は丸く終わる。 回転ナデ。	乳灰色	砂粒を少量含む。	良好	1/5残存
24	小皿 土師器 SD3	口径 11.2	浅い半球形で、口縁部は丸く終わる。底部外面に小さな張り付け高台が付く。 口縁部・高台ヨコナデ、他ナデ。見込み部は縦線筋文。	黄灰色	微砂粒を含む。	良好	1/3残存
25	7 土師器 兼4番	タガ上幅 0.8 タガ下幅 2.1 タガ高 1.2 タガ径 33.9	筒状で、断面台形のタガが通る。体部外面に接合痕1本がみられる。 内面・タガヨコナデ、外面ハケナデ。	内 暗灰色 外 微茶色	3.5mm砂粒を微量含む。	良好	小片
26	皿 土師器 兼4番	口径 19.8	上外方へ内湾して伸びる口縁部で、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳灰褐色	微砂粒を含む。	良好	1/6残存
27	兼 土師器 兼4番	口径 26.2	外上方へ外反して伸びる口縁部で、端部はトにつまみ上げる。 内外面ヨコナデ。	内 乳灰褐色 外 乳灰茶色	微砂粒を含む。	良好	1/6残存
28	同上 兼4番	口径 8.8	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 暗灰色 外 暗茶褐色	4mm以下の砂粒を含む。	良好	1/4残存
29	同上 兼4番	口径 12.4	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 微茶褐色 外 赤灰乳色	4mm以下の砂粒を含む。	良好	1/4残存
30	同上 兼4番	口径 13.0	口縁部は上外方へ伸びる。端部はやや上に面をもつ。 内外面とも磨耗のため不明。	内 乳灰茶色 外 乳系灰色	2mm以下の砂粒を含む。	良好	1/3残存

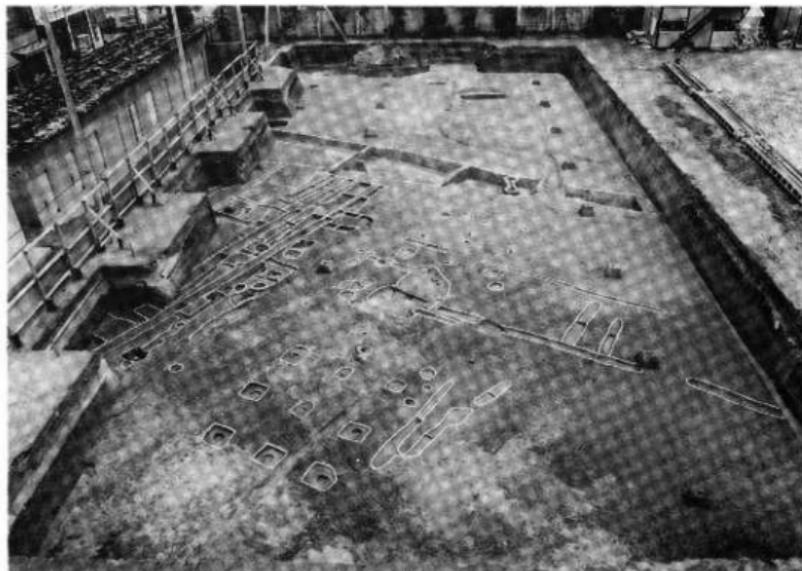
器物番号 図取番号	器 種	(cm) 法量	11任 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	施 成	備 考
31	壺 土師器 第4層	口 径	42.0	外上方へ伸びる口縁部で、肩部は外に面をもつ。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ。	内 灰茶色 外 乳灰茶色	3mm以下の 砂粒を含む。	良好	1/6 残存
32	同上 第4層	口 径	21.2	外上方へ伸びる口縁部で、肩部は内側に面をもつ。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラナデ、外面ナデ・指環痕。	暗褐色	微砂粒を含む。	良好	1/6 残存
33	高杯 土師器 第4層	口 径	10.6	上外方へ内湾しながら伸びる口縁部で、肩部は丸く終わる。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	乳褐色	3mm以下の 砂粒を含む。	良好	1/5 残存
34	外 土師器 第4層	口 径	7.6	半球形で、口縁端部は鈍く尖る。 口縁部ヨコナデ、他ナデ。	内 乳灰色 外 乳灰茶色	1.5mm以下の 砂粒を含む。	良好	1/2 残存
35	同上 第4層	口 径	23.2	上方へ内湾しながら伸びる口縁部、肩部は丸く終わる。 内外面ヨコナデ。	内 茶褐色 外 乳茶色	微砂粒を含む。	良好	1/7 残存
36	高杯 土師器 第4層	口 径	13.8	半球形の杯体部で、口縁端部は丸く終わる。肩部は欠損。 口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヨコナデ。	乳灰褐色	1.5mm以下の 砂粒をごく少量含む。	良好	1/4 残存
37	土馬 土師器 第4層	口 径	11.6	頭部のみで、馬頭には目・鼻・耳がはっきりと付けられている。 手すくね。	茶褐色	微砂粒を含む。	良好	1/4 残存
38	杯蓋 須恵器 第4層	口 径	11.6	大井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。内側には小さなかえりがある。 天井部外面回転ヘラナズリ、他は回転ナデ。	灰色	2.5mm以下の 砂粒を少量含む。	良好	1/3 残存
39	同上 第4層	口 径	15.0	大井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は下方へつまみ出す。 回転ナデ	灰色	微砂粒を含む。	良好	1/3 残存
40	同上 第4層	口 径	15.0	大井部から外下方へ伸びる口縁部、端部は下方へつまみ出す。 回転ナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1/4 残存
41	同上 第4層	口 径	16.8	平らな天井部から外方へ伸びる口縁部、端部は下方へ屈曲し、下につまみ出す。 回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含む。	良好	1/3 残存
42	壺蓋 須恵器 第4層	口 径	12.5	凹んだ天井部から外方へ伸びた後屈曲し、下方へ伸びる口縁部、端部は凹面をもつ。 内側不定方向のナデ、他は回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含む。	良好	1/4 残存
43	杯身 須恵器 第5層	口 径 器 高 底 部 径	12.3 3.93 8.8	平らな杯底部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。底部外面に断面台形の高台が付く。 口縁部回転ナデ、底部内外面不定方向のナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1/2 残存
44	同上 第4層	底 部 径	7.8	平らな杯底部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は欠損。底部外面に断面方形で八字形に開いた高台が付く。 回転ナデ。	乳灰色	微砂粒を含む。	良好	1/3 残存
45	壺 須恵器 第4層	口 径	21.8	外上方へ外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 回転ナデ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	1/5 残存

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 器高	形態・調料等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
46	鉢 須恵器 第4層	口 径 30.0	外上方へ伸びる口縁部、肩部は上につまみ 上げ、外に歪をもつ。 回転ナデ。	灰青色	微砂粒を含 む。	良好	1/6 残存
47	碗 瓦器 第4層	口 径 15.0	半球形で、口縁肩部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ。見込み 格子研文。	黒灰色	微砂粒を含 む。	良好	1/5 残存

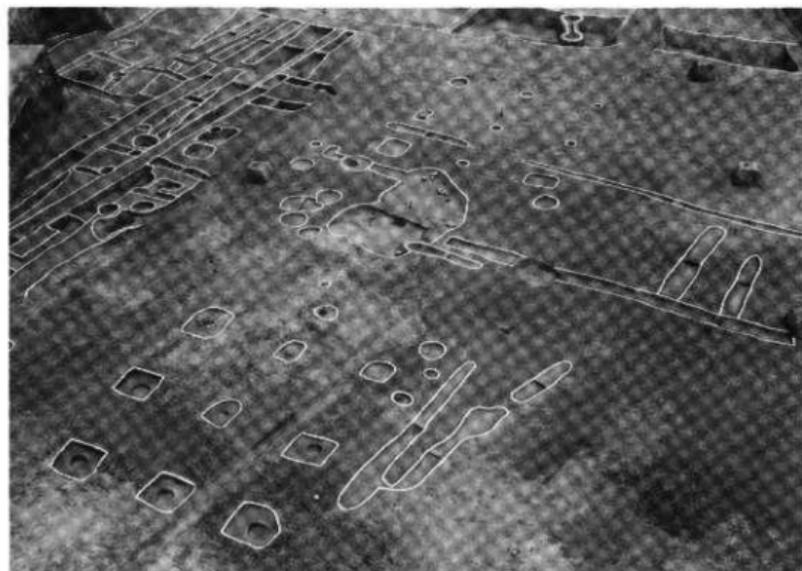
Ⅳ まとめ

今回の発掘調査は、成法中学校内の第4次の調査にあたり、敷地内の南東部に位置する調査であった。調査では奈良時代から近世に至る遺構・遺物を検出した。特に、掘立柱建物を中核とする奈良時代の住居域の一部を検出することができた。この時期の遺構は当敷地内で実施した調査（SH82-1・SH85-3）でも検出されており、少なくとも南北100mにわたって居住域が広がっていたことが明らかになった。また、遺物としては包含層から祭祀用に使用したと考えられる馬をかたどった土製品（土馬の頭部分）が出土しており、この付近で祭祀的なのが行われたのであろう。

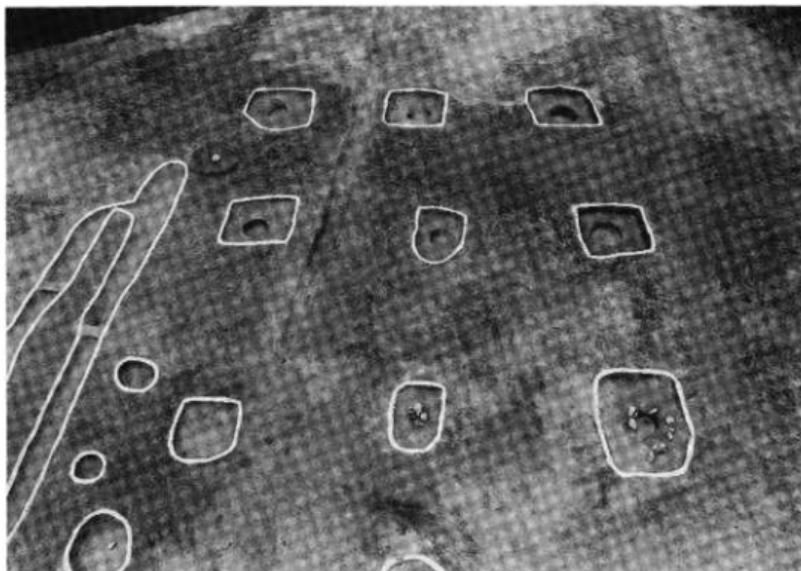
圖 版



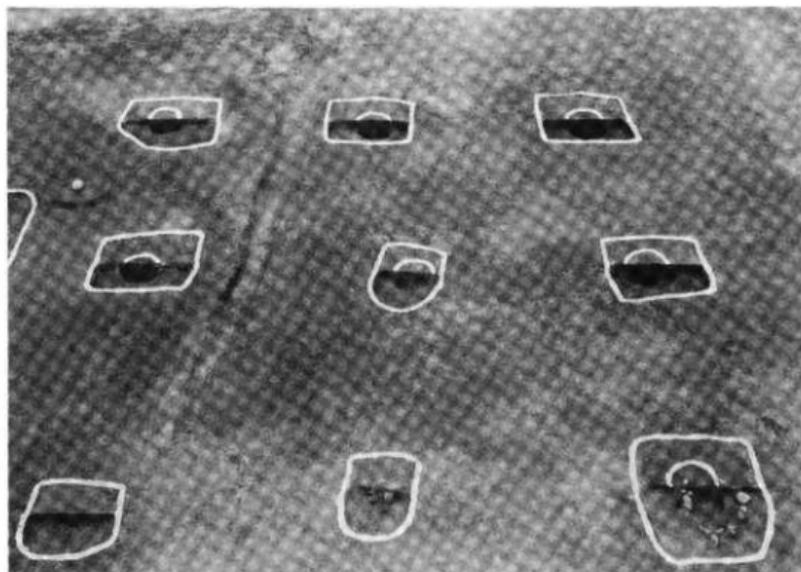
調査区全景(北から)



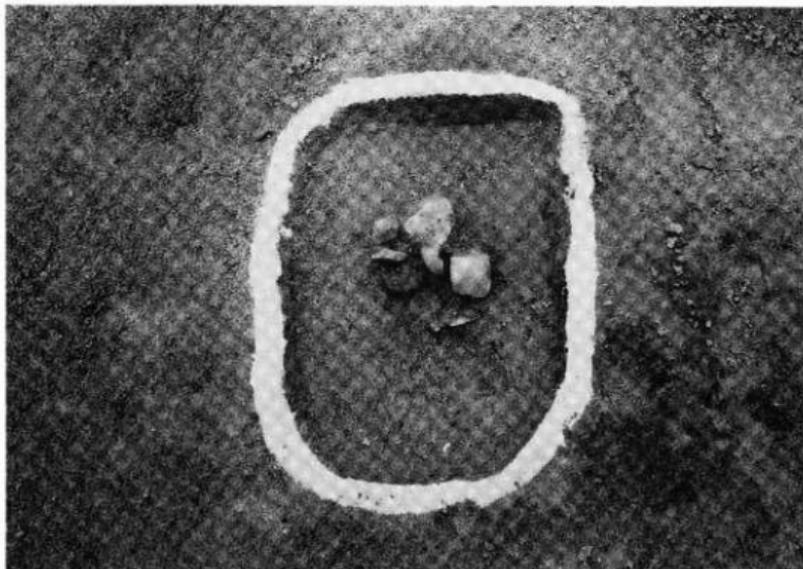
調査区北部(北から)



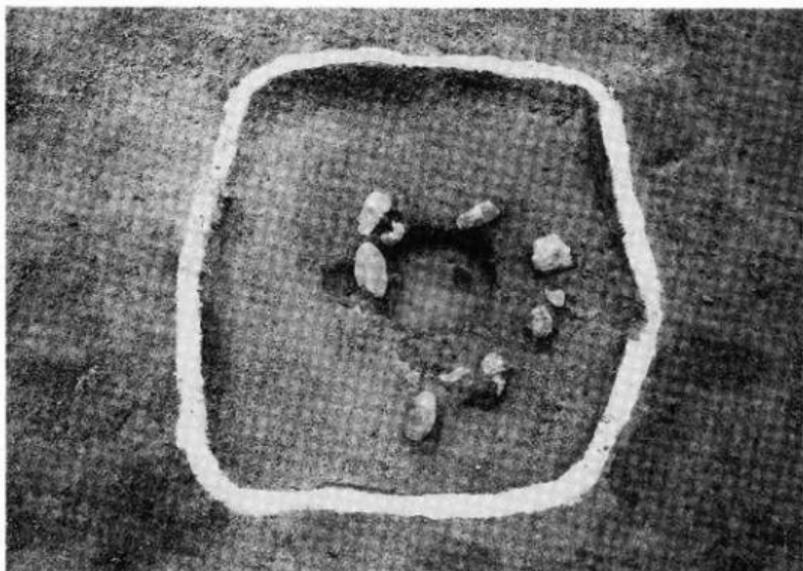
SB1 (南から)



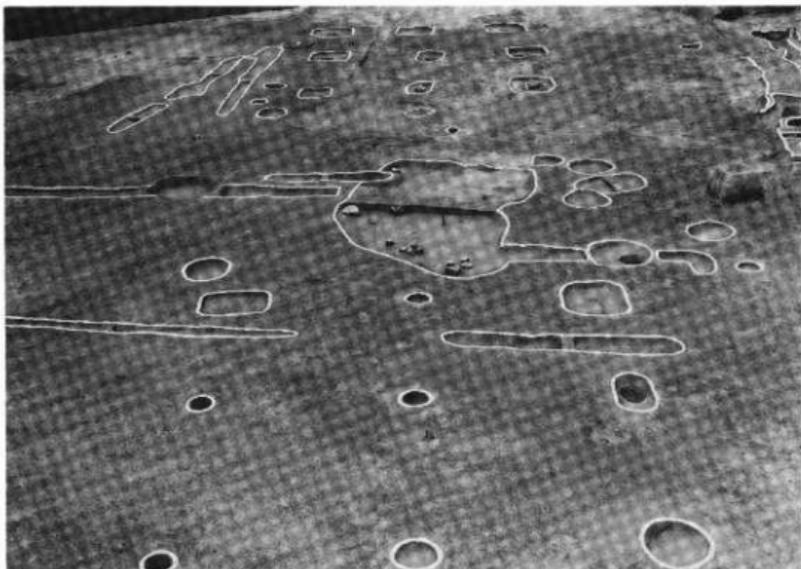
SB1 (南から)



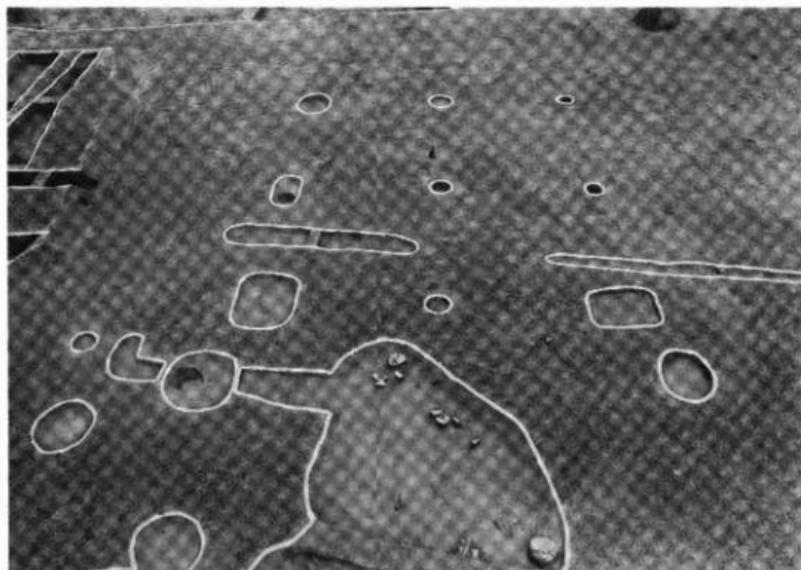
SB1内・SP8(南から)



SB1内・SP9(南から)



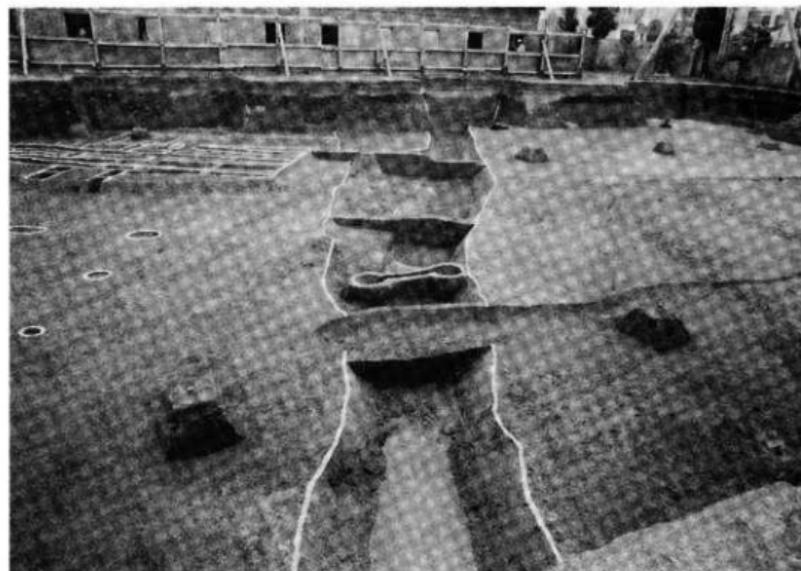
SB1・SB2(南から)



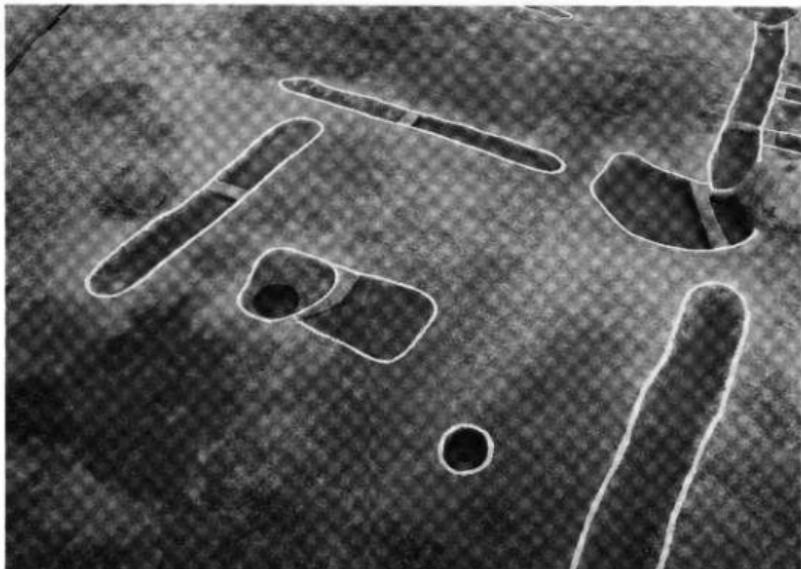
SB2(北から)



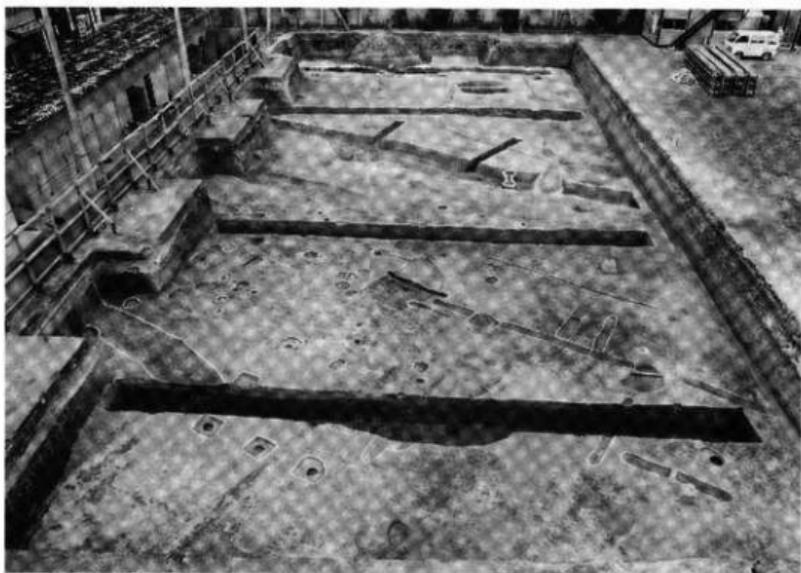
SK 1 全景(西から)



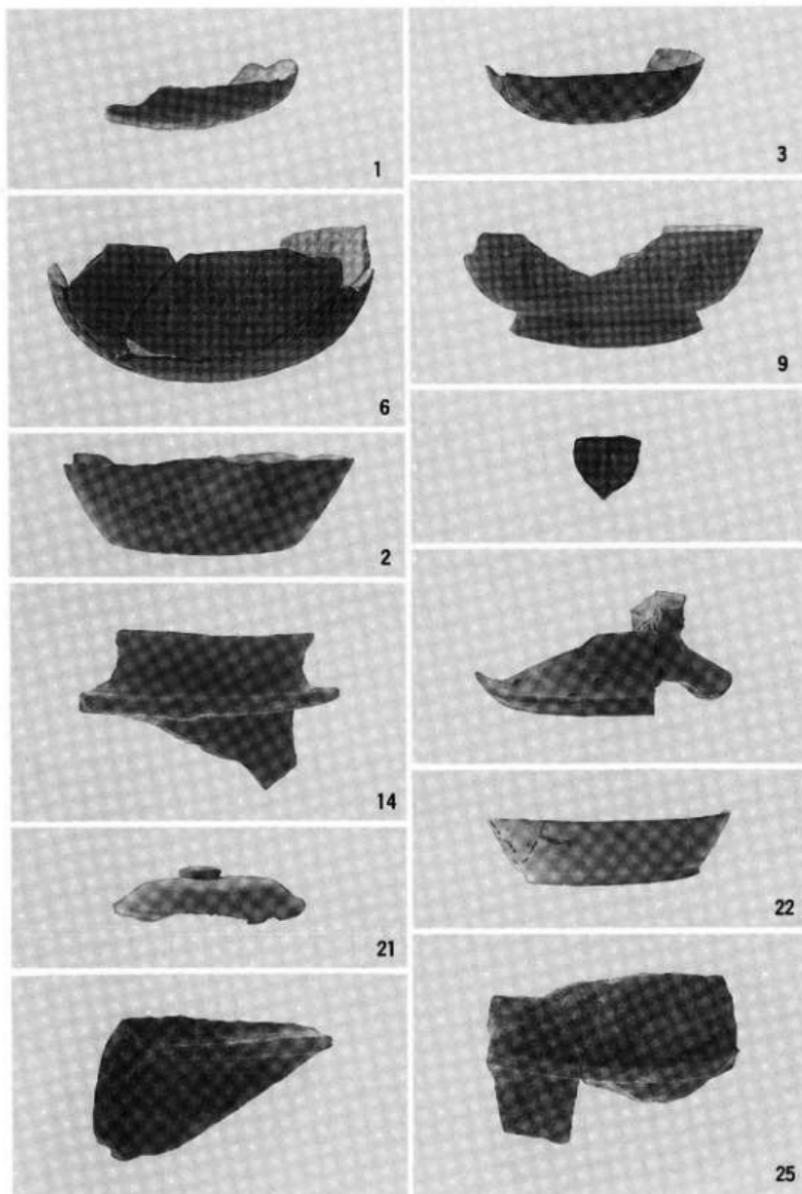
SD 37(西から)



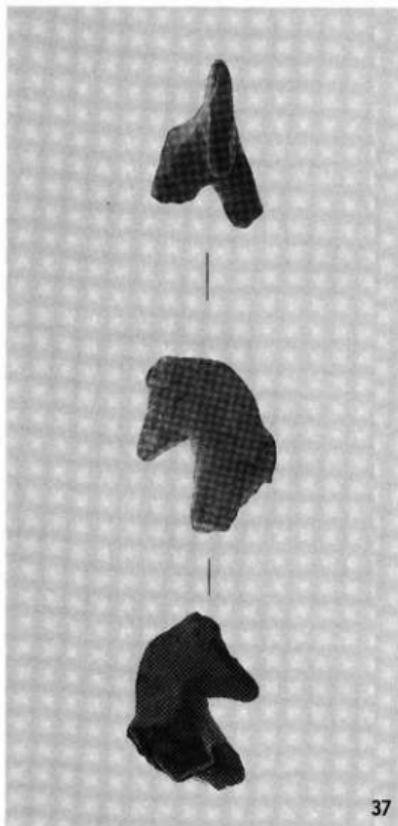
北西部遺構(西から)



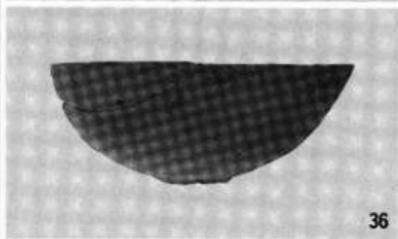
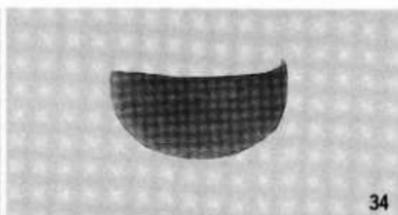
下層確認トレンチ(北から)



SP20 1 SK1 2・3・6・9 SP25・14 SD17 銅製品
 SO1 21・22
 遺構に伴わない出土遺物 25



遺構に伴わない出土遺物



第5章 第4次調査(S H88-4)発掘調査報告

例 言

1. 本書は、八尾市南本町1丁目10番地で実施した大阪シーリング印刷事務所建設工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書に報告する成法寺遺跡第4次調査（SH83-4）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は昭和63年11月7日から12月5日にかけて、高萩千秋を担当として実施した。調査面積は540㎡を測る。なお、調査においては高井裕之・八元聡志・岩本多貴子・村田英子・村田圭子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成3年に刊行した。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測—岡田・高井、図面レイアウト—岩本・村田英子、図面トレース—岩本・村田（英）、遺物写真撮影—高萩が行った。本書の執筆は主に高萩が担当したが、第4節出土遺物観察表については村田英子が担当した。
1. 全体の編集は高萩が行った。

本文目次

I はじめに	61
II 調査概要	62
1. 調査の方法と経過	62
2. 基本層序	65
3. 検出遺構・出土遺物	66
遺構に伴わない遺物	76
III 出土遺物観察表	79
IV まとめ	84

插图目次

第1图	调查地周辺图	61
第2图	调查区設定图及び区割图	62
第3图	遺構平面图	63・64
第4图	基本層序柱状图 (S = 1/40)	65
第5图	SX 1 出土遺物実測图	66
第6图	SX 2 出土遺物実測图	66
第7图	SX 1・SX 2 平断面图	67
第8图	SX 3 平断面图	68
第9图	SX 3 出土遺物実測图	69
第10图	SE 1 平断面图	69
第11图	SE 1 出土遺物実測图	69
第12图	SK 4 断面图	70
第13图	SK 4 出土遺物実測图	70
第14图	SK 5 断面图	71
第15图	SK 5 出土遺物実測图	71
第16图	SK 6 断面图	71
第17图	SK 6 出土遺物実測图	71
第18图	SK 6 断面图	72
第19图	SK 6 出土遺物実測图	72
第20图	SK 12 出土遺物実測图	73
第21图	SK 13 出土遺物実測图	73
第22图	SK 14 出土遺物実測图	73
第23图	SK 15 出土遺物実測图	74
第24图	SK 16 出土遺物実測图	74
第25图	SK 18 出土遺物実測图	74
第26图	SK 20 断面图	75
第27图	SK 21 断面图	75
第28图	SD 1・SD 2 断面图	77
第29图	遺構に伴わない出土遺物実測图	78

表 目 次

第1表 小穴 (SP) 一覧表 76

図 版 目 次

- 図版一 第1調査区全景 (北から)
第2調査区全景 (北から)
- 図版二 第3調査区全景 (北から)
第2調査区5b~7b区 (南から)
- 図版三 第2調査区5b~7b区 (北から)
第2調査区SX1 (西から)
- 図版四 第2調査区SX2 (西から)
第2調査区SE1・SK13 (東から)
- 図版五 第2調査区SE1・SK13 (東から)
第2調査区SK15 (西から)
- 図版六 第2調査区SX16 (東から)
第2調査区SX17 (東から)
- 図版七 第3調査区SD1・SP27 (西から)
第3調査区5a区 (北西から)
- 図版八 第3調査区SX3 (南西から)
第3調査区SX3 (東から)
- 図版九 第3調査区SX3 (東から)
第3調査区SX3 (北から)
- 図版一〇 第3調査区SX3 (北から)
第3調査区SK22 (東から)
- 図版一一 第3調査区SK23 (西から)
- 図版一二 出土遺物 SX2 4 SX3 7・9 SE1 10 12
SK4 15・17 SK5 18・19
- 図版一三 出土遺物 SK6 21 SK7 23 SK12 25 SK16 33
遺構に伴わない遺物 36~38・53

I はじめに

今回の調査は、南本町1丁目10に所在する㈱大阪シーリング印刷の事務所建設工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡で実施した第4次調査(SH88-4)にあたる。当調査地の北方に近接する都市計画道路平野中高安線では拡張工事に伴う発掘調査が大阪府教育委員会によって昭和60年度から継続的に実施されている。その結果、弥生時代中期に比定される方形周溝墓の墓域、古墳時代前期の竪穴住居・井戸・溝等の居住域が検出されている。当調査地は、昭和61年度に実施された調査地の南部に位置する。調査期間は昭和63年11月7日～12月5日までである。調査面積は約540㎡を測る。

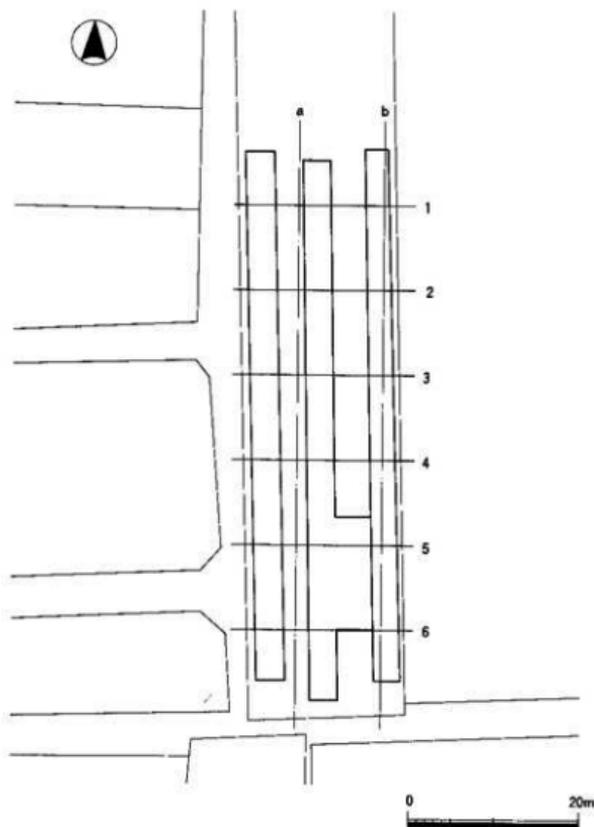


第1図 調査地周辺図

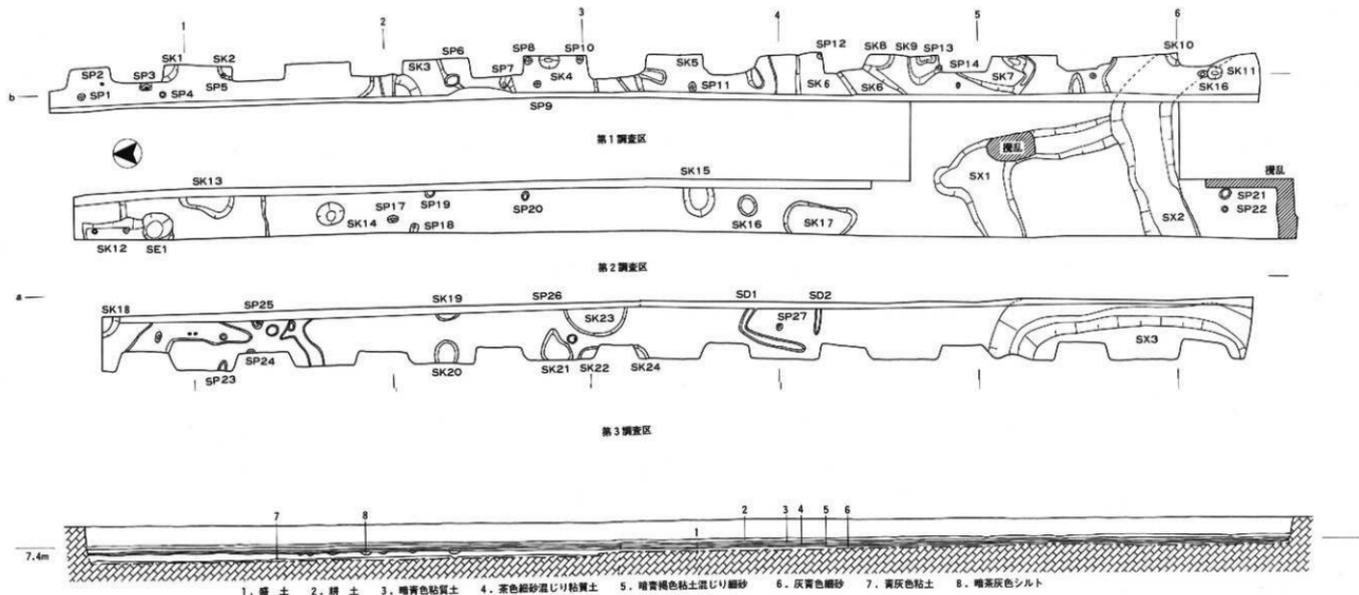
II 調査概要

1. 調査の方法と経過

八尾市教育委員会の指示書に従って建物の基礎部分に幅3m×長さ60mのトレンチ3本（東から第1調査区～第3調査区）を設定し、現地表下約1.5mまでの土層を機械掘削し、以下の土層については人力掘削を実施した。なお、第1調査区と第2調査区の南側の間については遺構の性格を知るために拡張した。また、第1調査区では、下層（弥生時代中期の遺構）を確認する目的で前面を約40cm掘り下げた。



第2図 調査区設定図及び区割図



第3図 通横平面図

地区割(第2図)は、調査区の北東隅から東西線が数字(1~6)、南北線がアルファベット(a~b)を呼称した。なお、基準点の国土座標の値は東西軸(1ライン)がX=3110.257、南北側(aライン)がY=-35 350.000を測り、区割りの南北線は国土座標の軸に対し2°西へ振っている。

調査では、現地表下1.5m(標高7.0m)に存在する第6層淡灰色~灰青色細砂の上面で古墳時代前期(庄内式古相)に比定される遺構を検出した。遺構は方形周溝墓3基(SX1~SX3)、井戸1基(SE1)、土坑24基(SK1~SK24)、小穴27個(SP1~SP27)・溝2条(SD1・SD2)である。出土遺物は、遺構内及び上面に存在する第5層暗茶色~暗青褐色細砂混粘質土内から弥生時代後期(第V様式)~古墳時代前期(庄内式)に比定される土器片が、コンテナ箱にして約6箱分出土した。

2. 基本層序

調査区内で、現地表面から約1.8mまでの間に存在する土層内から普遍的にみられる7層を抽出して基本層序とした(第4図)。現地表面は標高8.3mを測る。

第1層 盛土。層厚1m。工場跡地で、基礎コンクリートが部分的に残っている。

第2層 旧耕土。層厚10~15cm。近年まで耕作土である。

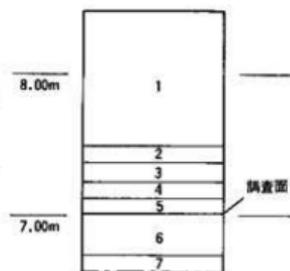
第3層 黄褐色~茶色細砂混粘質土。層厚10~20cm。耕上の床土である。

第4層 灰褐色~茶色細砂混粘質土。層厚10~15cm。自然堆積土である。

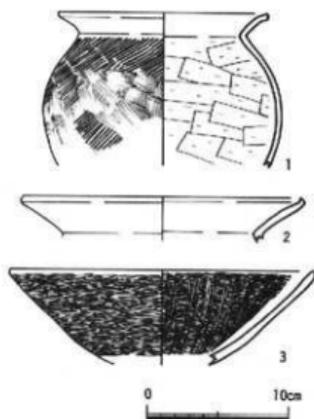
第5層 暗灰色~暗青褐色粘土混細砂。層厚5~15cm。第V様式~庄内式に比定される土器の小片が少量含まれている。

第6層 淡灰色~灰青色細砂。層厚25~30cm。洪水層の堆積土で、この上面(標高7.0m前後)で古墳時代前期に比定される遺構を検出した。

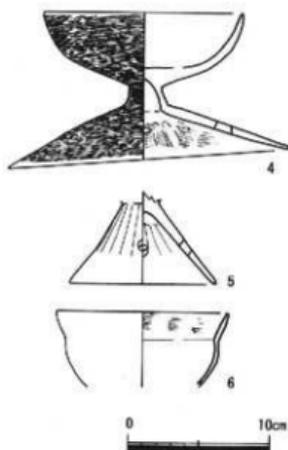
第7層 淡灰色~灰青色粘土。層厚20cm。粘性が強い土層で、炭化物が少量含まれている。



第4図 基本層序柱状図(S=1/40)



第5図 S X 1 出土遺物実測図



第6図 S X 2 出土遺物実測図

3. 検出遺構と出土遺物

方形周溝墓 (S X)

S X 1

S X 2の北部で検出した。検出できたのは東溝と北溝の一部でS X 2に切られており、西溝は調査区外に至り、不明である。規模は確認できたところで、南北辺8 m前後、溝幅は東溝約1.4~1.5 m、北溝2.1~2.4 mを測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、暗灰青色粘質細砂の層が堆積している。遺物は、溝内から庄内式中相の庄内式甕(1・2)・高杯(3)がごく少量出土している(第5図)。

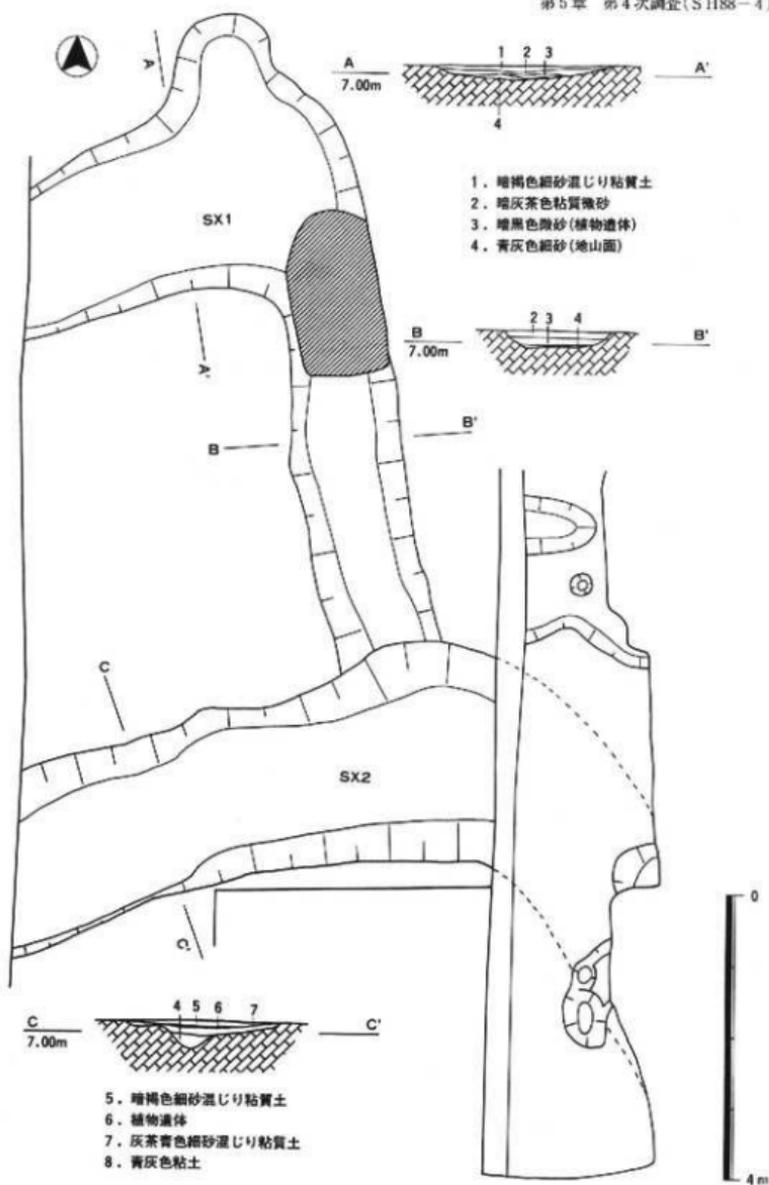
S X 2

第2調査区の南部から北溝と東溝を検出した。北溝の東側ではS X 1の東溝を切っている。方向は東溝を軸にすると東に対し北へ約70°振っている。規模は確認できたところで、東西辺約8.0 m、溝は東溝が2.4 m、北溝が2.2~2.6 mで、深さ15~25 cmを測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、上方から暗褐色細砂混粘質土・黒褐色粘質土・灰茶青色細砂混粘質土の土層がレンズ状に堆積している。遺物は、溝内から庄内式甕・高杯(4)・器台(5)・鉢(6)などの小片が少量出土している。

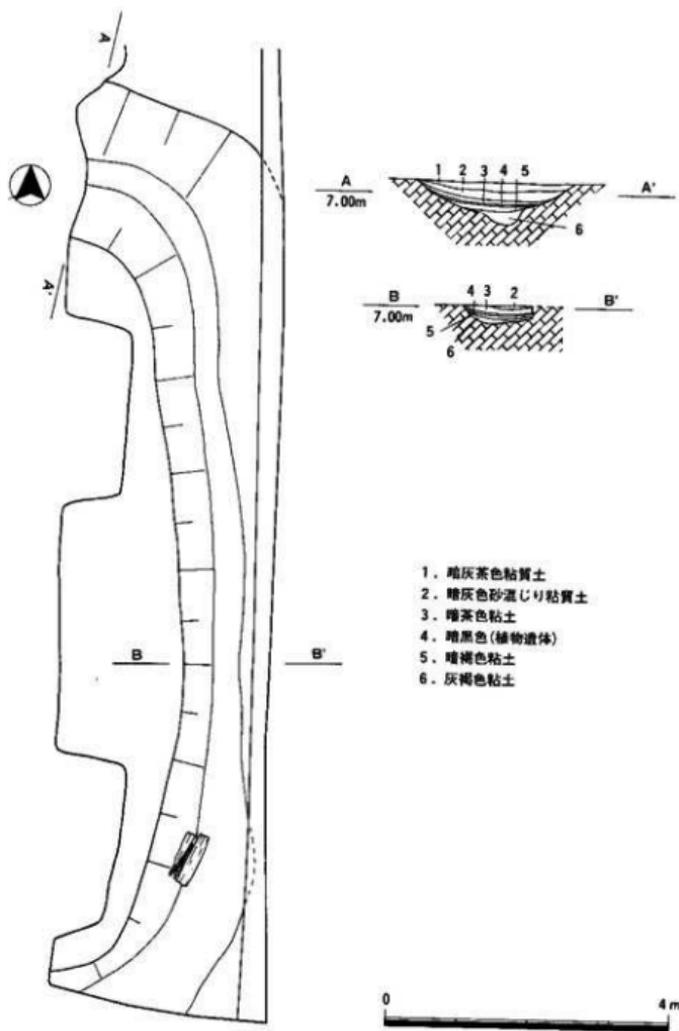
S X 3

第3調査区の南部で検出した。南溝と北溝の一部と東溝が確認できた。方向は東溝を軸にするとほぼ南北方向を呈している。規模は確認できた

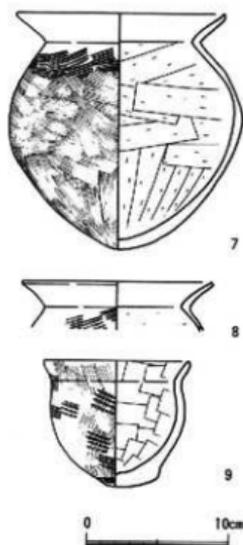
ところで、南北辺約10.5 m、溝幅は東溝が1.5~1.7 m、北溝2.3 mで、深さ40~60 cmを測る。溝の断面は浅い半円形を呈し、上方から暗灰茶色粘質土・暗灰色細砂混粘質土・暗茶色粘土・黒褐色粘質土(植物遺体を含む)・暗褐色粘土・灰褐色粘土の土層がレンズ状に堆積している。遺物は、溝内の北東角から1個体分の庄内式甕(7)と鉢(9)、南東隅から木製品の板材1点が出土している。その他、溝内部から庄内式甕(8)のはか小片がごく少量出土している。



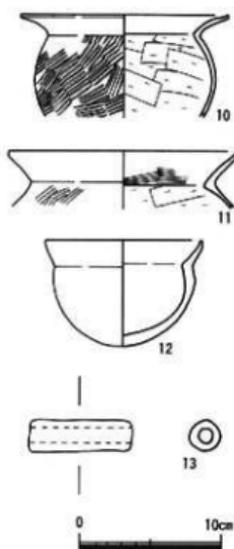
第7図 SX1・SX2平面図



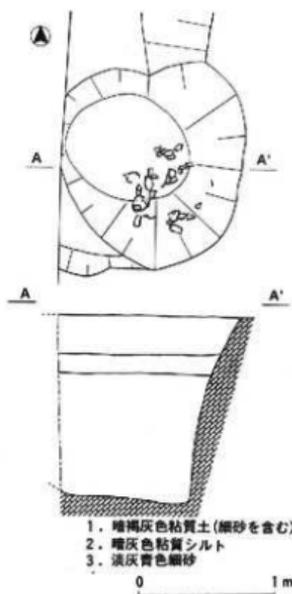
第6図 SX3 平面図



第9図 S X 3 出土遺物実測図



第10図 S E 1 出土遺物実測図



1. 暗褐色粘質土(細砂を含む)
2. 暗灰色粘質シルト
3. 淡灰青色細砂

第10図 S E 1 平面図

井戸 (S E)

S E 1

第2調査区の北部(1b区)で検出した。平面の形状は円形を呈する素掘りの井戸で、SK12を切り込んでいる。規模は検出部で、径1.3~1.5m、深さ1.4mを測る。断面は逆台形を呈し、上方から第1層暗褐色粘質土・第2層暗灰色粘質シルト・第3層淡灰青色細砂が堆積している(第10図)。遺物は第1層の上部で集積していた庄内式古相の壺(10・11)・鉢(12)・器台・高杯などの破片と第2層内から土埴(13)1点が少量出土している(第11図)。

土坑 (SK)

SK 1

第3調査区の北部(1c区)で検出した。北東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.8m、南北0.6m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

SK 2

SK 1の南部(2c区)で検出した。南東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北0.5m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

SK 3

第1調査区の北部(3c区)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西2m、南北3m、深さ26cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式土器をごく少量出土している。

SK 4

第3調査区の北部(3c区)で検出した。SP 7に切られ、東西は調査区外に至る。規模は検出部で、東西2m、南北4.56m、深さ26cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・褐黑色炭素混じり粘質土・灰茶色細砂・暗青色細砂混じり粘質土が堆積している。底面にはSP 8～SP 10が切り込んでいる(第12図)。

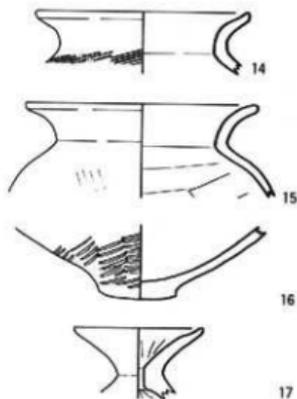
遺物は、内部から庄内式のV式系甕(14～16)・器台(17)をごく少量出土している(第13図)。



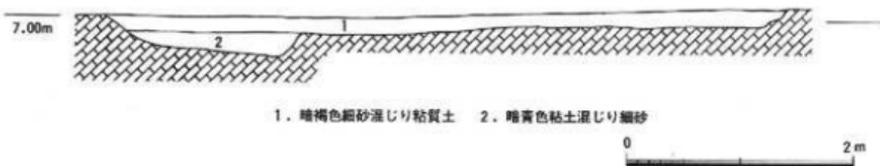
1. 暗褐色細砂混じり粘質土
2. 褐黑色炭素混じり粘質土
3. 灰茶色細砂
4. 暗青色細砂混じり粘質土



第12図 SK 4 断面図



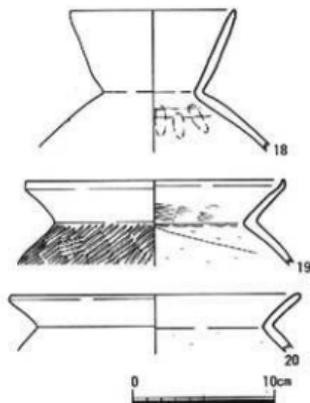
第13図 SK 4 出土遺物実測図



第14図 SK 5断面図

SK 5

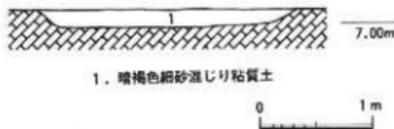
第1調査区の北部(4c区)で検出した。東西は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.7m、南北1.4m、深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・暗青色粘土混じり細砂が堆積している(第14図)。底面には、SP11が切り込んでいる。遺物は、壺(18)・庄内式甕(19・20)のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している(第15図)。



第15図 SK 5出土遺物実測図

SK 6

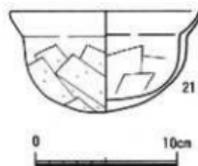
第3調査区の中央部(5c区)で検出した。東西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西2m、南北3.2m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土が堆積している(第16図)。底面にはSP12が切り込んでいる。遺物は、鉢(21)のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している(第17図)。



第16図 SK 6断面図

SK 7

第3調査区の南部(5c・6c)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8m、南北4m、

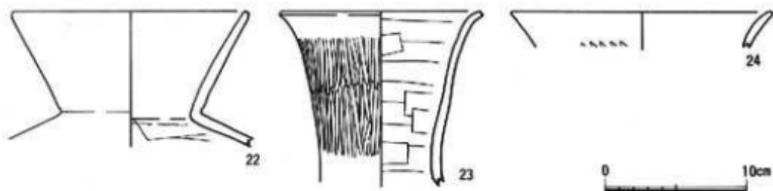


第17図 SK 6出土遺物実測図

深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗褐色細砂混じり粘質土・暗灰色細砂・灰青色細砂・暗灰色細砂・暗灰青色細砂が堆積している(第18図)。遺物は、V様式の長頸壺(23)・庄内式の壺(22)・V様式寛(24)をごく少量出土している(第19図)。



第18図 SK 6 断面図



第19図 SK 6 出土遺物実測図

SK 8

第1調査区の南部(5c)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.8m、南北1.15m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK 9

第1調査区の南部(5c)で検出した。SP14に切れ、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.5m、南北1.6m、深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗青色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK 10

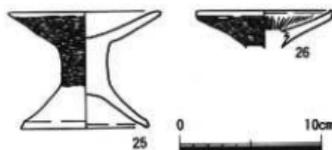
第1調査区の南部(6c・7c)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北0.5m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK 11

第1調査区の南部(7b・7c)で検出した。平面の形状は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径0.5m、南北0.7m、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK12

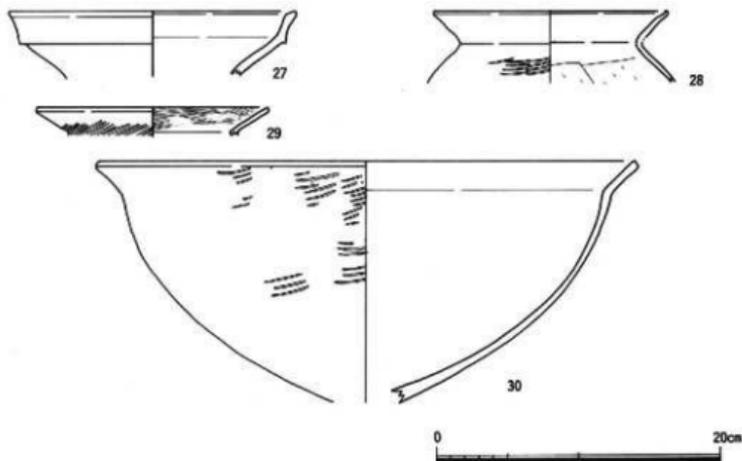
第2調査区の北部(1b)で検出した。南部ではSE1が切り込んでいる。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.1m、南北4.45m、深さ30cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色シルトが堆積している。遺物は、内部から器台(25・26)の他が少量出土している(第20図)。



第20図 SK12出土遺物実測図

SK13

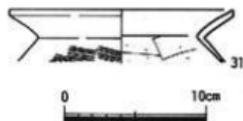
第2調査区の北部(2b)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1m、南北2m、深さ13cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗青色砂質土が堆積している。遺物は、壺(27)・庄内式甕(28・29)・鉢(30)のほか土器の小片がごく少量出土している(第21図)。



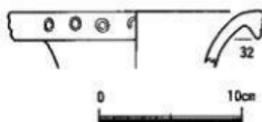
第21図 SK13出土遺物実測図

SK14

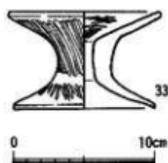
第2調査区の北部(2b)で検出した。平面は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径1.15m、南北1.36m、深さ36cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、庄内式甕(31)のほか土器の小片がごく少量出土している(第22図)。



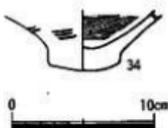
第22図 SK14出土遺物実測図



第23図 SK 15出土遺物実測図



第24図 SK 16出土遺物実測図



第25図 SK 18出土遺物実測図

SK 15

第2調査区の中央部(4 b)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8m、南北1.57m、深さ30cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、庄内式の壺(32)が出土している(第23図)。

SK 16

第2調査区の中央部(4 b)で検出した。平面は楕円形を呈する。規模は検出部で、東西径0.88m、南北径0.8m、深さ18cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、小型器台(33)のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している(第24図)。

SK 17

第2調査区の中央部(5 b)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.8m、南北3.7m、深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質シルトが堆積している。遺物は、内部から庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK 18

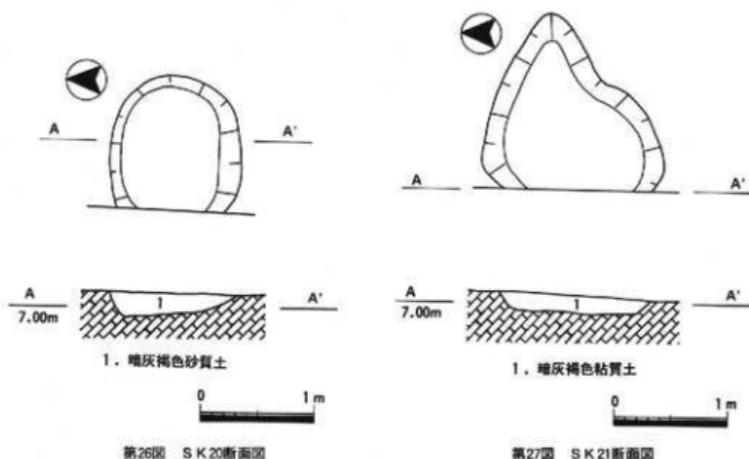
第3調査区の北部(1 a)で検出した。北東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1m、南北0.8m、深さ40cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰青色粘土混粗砂が堆積している。遺物は、V様式の底部(34)のほか庄内式期の土器の小片がごく少量出土している(第25図)。

SK 19

第3調査区の北部(3 a)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.7m、南北1.26m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗茶灰色細砂が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK 20

第3調査区の北部(3 a)で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.2m、南北1.18m、深さ20cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している(第26図)。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。



第26図 SK20断面図

第27図 SK21断面図

SK21

第3調査区の中央(3a)で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.6m、南北1.6m、深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質土が堆積している(第27図)。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK22

第3調査区の中央部(3a・4a)で検出した。西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北1m、深さ10cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色粘質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK23

第3調査区の中央部(3a・4a)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.7m、南北3.26m、深さ15cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

SK24

第3調査区の中央部(4a)で検出した。東部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西0.6m、南北0.6m、深さ13cmを測る。断面は逆台形を呈し、暗灰褐色砂質土が堆積している。遺物は、庄内式期の土器をごく少量出土している。

小穴 (SP)

SP1～SP27

調査区外から27個を検出した。平面の形状は円形のもの楕円形のもの不明のものがある。規模は径14～32cmの小さいものと、径33～62cmの大きいものがあり、径の小さいものが多く検出している。深さは10～20cmを測り、断面は逆台形である。堆積土は暗灰褐色砂質土である。

第1表 小穴 (SP) 一覧表

遺構番号	トレンチ番号	区	平面図	断面図	径	深さ	堆 積 土
SP 1	第1調査区	1 b	円 形	逆台形	35	48	暗褐色砂質土
SP 2		1 c	楕円形	逆台形	24-18	8	暗褐色砂質土
SP 3		1 c	—	—	—	—	—
SP 4		1 b	楕円形	逆台形	30-44	48	暗褐色砂質土
SP 5		1 c	円 形	逆台形	30	35	暗褐色砂質土
SP 6		2 b	楕円形	逆台形	58-73	13	暗褐色砂質土
SP 7		3 b	円 形	逆台形	50	40	暗褐色砂質土
SP 8		2 c	楕円形	逆台形	34-30	21	暗褐色砂質土
SP 9		3 b	円 形	逆台形	33	10	暗褐色砂質土
SP 10		3 c	—	—	—	—	—
SP 11		4 b	楕円形	逆台形	38-52	12	暗褐色砂質土
SP 12		4 c	—	—	—	—	—
SP 13		5 c	円 形	逆台形	38	38	暗褐色砂質土
SP 14		5 c	楕円形	逆台形	28-38	35	暗褐色砂質土
SP 15	4 c	円 形	逆台形	30	25	暗褐色砂質土	
SP 16	7 c	楕円形	逆台形	29-32	25	暗褐色砂質土	
SP 17	第2調査区	2 b	円 形	逆台形	40	17	暗褐色砂質土
SP 18		3 b	円 形	逆台形	40	22	暗褐色砂質土
SP 19		3 b	—	—	—	—	—
SP 20		3 b	円 形	逆台形	40	10	暗褐色砂質土
SP 21		3 b	円 形	逆台形	46	12	暗褐色砂質土
SP 22		7 b	円 形	逆台形	26	10	暗褐色砂質土
SP 23		7 b	—	—	—	—	—
SP 24		2 a	—	—	—	—	—
SP 25	第3調査区	2 a	—	—	—	—	—
SP 26		3 a	円 形	逆台形	62	15	暗褐色砂質土
SP 27		4 a	楕円形	逆台形	48	15	暗褐色砂質土

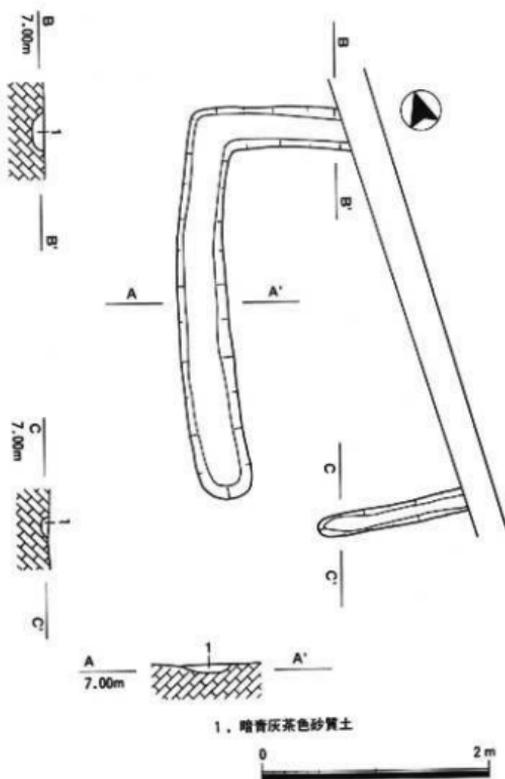
溝 (SD)

SD1・SD2

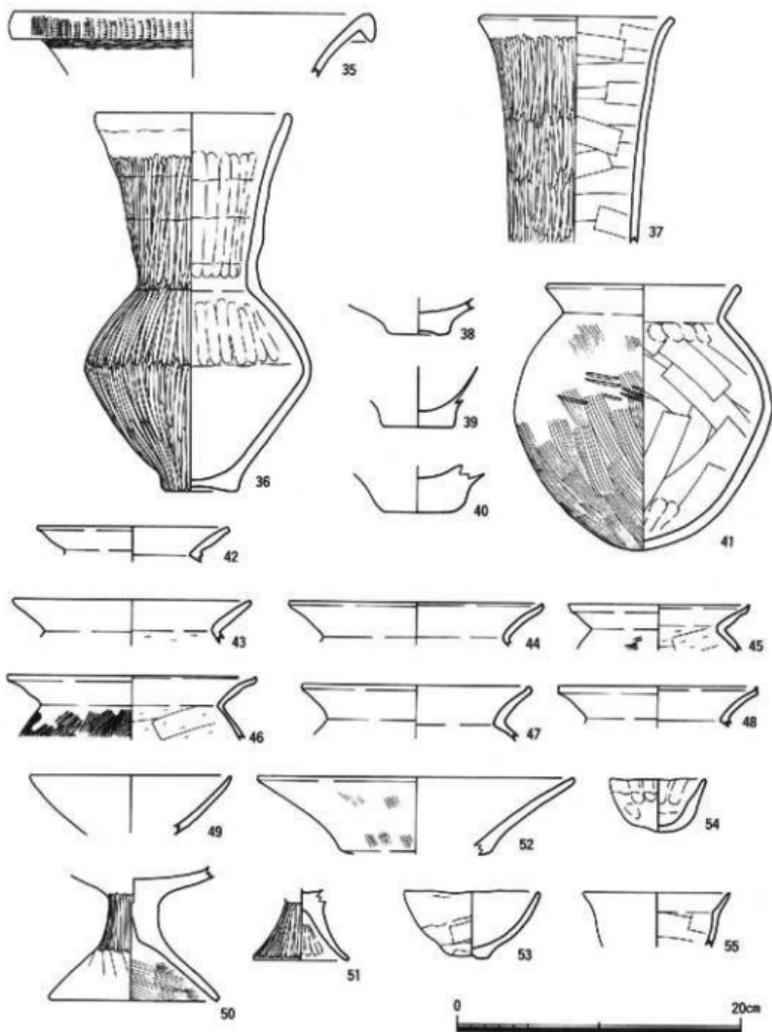
第3調査区中央で検出した。SD1の平面形状はL字形を呈しており、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、検出長東西0.8m、南北1.8m、幅30～40m、深さ5～10cmを測る。SD2は東西方向に伸びるもので、東部は調査区外に至る。規模は検出部で、検出長0.8m、幅30m、深さ8cmを測る (第28図)。

遺構に伴わない出土遺物

遺物は第4層と第5層内から出土している。出土量はコンテナ箱にして約2箱分である。時期は弥生時代中期～古墳時代前期に至る遺物である。以下、図示できたものについて記す。弥生時代中期の遺物は、第Ⅲ様式の壺 (36)、弥生時代後期の遺物は、第1調査区のSD1・SD2に囲まれた砂層上面で出土した第Ⅴ様式の長頸壺 (37・38)・甕 (39～41) がある。古墳時代前期の遺物には、庄内式甕 (42～49)・高杯 (50～52)・鉢 (53)・小型の鉢 (54)・小型壺 (55) がある (第29図)。



第28圖 SD1・SD2断面図



第296図 遺構に伴わない出土遺物実測図

III 出土遺物観察表

遺物番号 収蔵番号	形 種	(cm) 口徑 法量 器高	形製・調査等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
1	壺 土師器 SX-1	口 徑 14.7	体部から屈曲し、外上方へ外反して伸びる口縁部、肩部は上につまみ、外に内面をもつ。口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(5本)後ハケナデ(6本)、内面ヘラケズリ。	淡灰褐色	2.5mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	備付書。1/2残存
2	同上 SX-1	口 徑 19.8	外上方へ外反して伸びる口縁部、肩部は上につまみ。口縁部ヨコナデ	暗茶灰色	3mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/7残存
3	高杯 土師器 SX-1	口 徑 10.7	外上方へ外反して伸びる口縁部、肩部は丸く終わる。脚部は欠損。内外面ヘラミガキ、内面放射状暗文。	淡茶灰色	2.5mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/4残存
4	同上 十二 SX-2	口 徑 14.0 器 高 11.4 脚部径 20.2	杯部は半球形で、口縁部は丸く終わる。脚部は短い柱状部から屈曲し、大きく外下方へ強く裾部に至る。肩部丸く終わる。脚部ヘラミガキ、杯部内面磨耗の高不明、脚部内面滑りナデハケナデ。	淡茶褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む。(赤褐色酸化鉄・長石)	良好	定形
5	器台 土師器 SX-2	脚部径 10.2	受皿は欠損。脚部は下外方へ伸び、端部は丸く終わる。四方孔有り。内面ヘラナデ、ナデ、外面調整不明。	淡灰茶色	2.5mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/2残存
6	鉢 土師器 SX-2	口 徑 12.0	体部から屈曲し、上外方へ内湾気味に伸びる口縁部、肩部は丸く終わる。口縁部内面ハケナデ、皿はナデ。	淡灰茶色	1mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/4残存
7	壺 土師器 十二 SX-3	口 徑 14.6 口 徑 16.7 最大径 16.5	枡四形の体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部、肩部はつまみ上げる。肩部はやや尖りぎみ。口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(8本)後ハケナデ(8本)、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	定形
8	同上 SX-3	口 徑 13.5	外上方へ外反気味に伸びる口縁部、肩部はつまみ上げる。口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(6本)、内面ヘラケズリ。	暗灰茶色	3.5mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/6残存
9	鉢 土師器 十二 SX-3	口 徑 10.2 器 高 8.9	半球形の体部から屈曲し、上外方へ強く伸びる口縁部、肩部は丸く終わる。外面タタキ(4本)後ハケナデ(6本)、内面ヘラナデ。	暗灰褐色	2mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	定形
10	壺 土師器 十二 SE-1	口 徑 14.6	体部から屈曲し、外上方へ外反して伸びる口縁部、肩部はつまみ上げる。口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(6本)内面ヘラケズリ。	乳灰褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/3残存
11	同上 SE-1	口 徑 16.0	体部から屈曲し、上外方へ外反して伸びる口縁部、肩部はつまみ上げる。口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を多量に含む。(雲母・角閃石・長石)	良好	1/7残存

遺物番号 四版番号	器 種	(cm) 口径 器高	形状・調査等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
十二	鉢 土師器	口 径 11.0 器 高 7.2	半球形の体部から屈曲し、上外方へ内湾気味に伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	内 淡灰茶色 外 暗灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む(雲母・長石・石英)。	良好	完形
	SE-1						
十二	土師 土師器	長 さ 7.4 径 2.2	管状形である。 外面ナデ。	暗灰色	1mm以下の砂粒を多量含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	完形
	SE-1						
十二	壺 土師器	口 径 14.8	外反して伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ(5本)後ハケナデ(5本)、内面ナデ。	暗灰褐色	2.5mm以下の砂粒を多量含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/6残存
	SK-4						
十二	同上	口 径 16.2	外反して伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部外面ハケナデ、内面ハラナデ。	淡灰灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/5残存
	SK-4						
十二	同上	底 径 5.0	体部上位以上は欠損。突出する平底。 体部外面タタキ、内面割離で不明。	内 乳灰茶色 外 淡黒灰色	3mm以下の砂粒を多量含む(長石・石英)。	良好	1/5残存
	SK-4						
十二	器台 土師器	口 径 9.0	上外方へ伸びる受部、端部は少しつまむ。受部と脚部間は貫通している。脚部は欠損。 外面ナデ、内面ハラナデ。	乳灰灰色	4mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)。	良好	1/2残存
	SK-4						
十二	甗 土師器	口 径 11.6	体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面指ナデ。	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を少量含む(長石・角閃石・雲母)。	良好	1/4残存
	SK-5						
十二	同上	口 径 18.2	体部から屈曲し外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ後ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ハラケズリ。	内 淡灰茶色 外 暗茶褐色	3mm以下の砂粒を少量含む(長石・角閃石・雲母)。	良好	1/5残存
	SK-5						
十二	同上	口 径 20.3	体部から屈曲し外上方へ伸びる口縁部、端部はつまみ上げ、外に面をもつ。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ。	淡灰茶色	2mm以下の砂粒を少量含む(長石・角閃石・雲母)。	良好	1/6残存
	SK-5						
十三	鉢 土師器	口 径 13.4 器 高 7.2	半球形の体部から屈曲し外上方へ内湾気味に伸びる口縁部、端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部内面ハラナデ、外面ハラケズリ。	淡灰茶色	4.5mm以下の砂粒を少量含む(長石・雲母)。	良好	完形
	SK-6						
十三	壺 土師器	口 径 16.0	体部から屈曲し、上外方へ伸びる口縁部、端部は丸く終わる。体部は欠損。 口縁部割離のため不明、体部内面ハラナデ、外面ナデ。	内 暗茶褐色 外 暗茶褐色-暗灰色	5mm以下の砂粒を多量含む(長石・角閃石・雲母)。	良好	1/6残存
	SK-6						
十三	長頸壺 弥生土器	口 径 14.0	上方へ外反して伸びる口縁部、端部は外に面をもつ。体部は欠損。 口縁部外面ハラミギキ、内面ハラナデ。	淡黄褐色	5mm以下の砂粒を多量含む(長石)。	良好	1/5残存
	SK-6						

遺物番号 照像番号	器 種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
24	壺 甕生土器 SK-7	口径 18.3	口縁部は外上方へ伸びる。肩部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ。	淡灰紫色	3.5mm以下の砂粒を少量含む(長石・炭粒)。	良好	1/8残存
25	甗台 土師器 SK-12	口径 10.5	受部は外上方へ伸びる。肩部は丸く終わる。脚部は中央の中柱部から下方へ開く裾部に至る。肩部は下につまみ出す。 受部外面ヘラミガキ、内面磨耗のため不明脚部内面ナデ。	淡茶褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	完形
26	同上 SK-12	口径 9.4	受部は外上方へ伸びる。肩部は上につまむ。脚部は欠損。 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ後放射状縮文。	乳灰紫色	2mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/3残存
27	壺 土師器 SK-13	口径 20.0	口縁部は外上方へ伸びた後屈曲し、外上方へ伸びる。肩部は内側に曲をもち、器南部外面には襷がある。	淡茶褐色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/5残存
28	壺 土師器 SK-13	口径 16.2	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部。肩部は上につまみ。 口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	内 淡茶褐色 外 乳灰紫色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/5残存
29	同上 SK-13	口径 16.2	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部。肩部は上につまみ。 口縁部内面ハケナデ、外面タタキ後ヨコナデ。	陶灰色	2mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/7残存 深付蓋。
30	鉢 土師器 SK-13	口径 38.0	半球形の体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部。肩部は外に面をもつ。底部は欠損。 口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ後ナデ、内面ナデ。	淡茶褐色	7mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/3残存
31	壺 土師器 SK-14	口径 15.7	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部。肩部は上につまみ。 口縁部ヨコナデ。体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	暗茶褐色	1mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/3残存
32	壺 土師器 SK-15	口径 19.6	外上方へ外反する口縁部。肩部は豊れどがり、外に面があり、竹管圧文が流る。 外面ナデ、内面ヨコナデ。	淡灰紫色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/6残存
33	甗台 土師器 SK-16	口径 10.6 口径 6.9	受部は外上方へ伸び、肩部は丸く終わる。脚部は短い中柱部から外下方へ開く。肩部は下につまむ。受部と脚部は貫通している。 外面ヘラナデ、受部内面ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	淡茶灰色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	完形
34	壺 甕生土器 SK-18	底径 5.1	突出する平底。体部は欠損。 外面タタキ後ナデ、内面ヘラナデ。	淡茶灰色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・長石・角閃石)。	良好	1/5残存

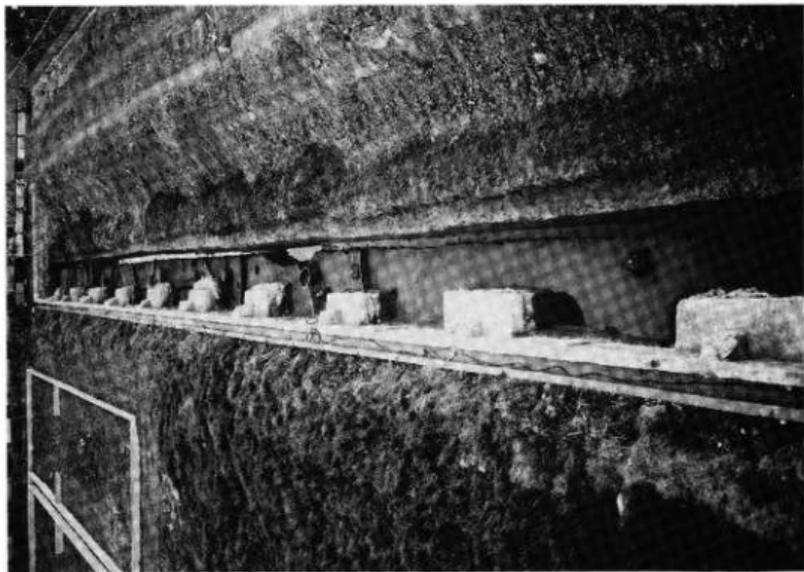
遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 口径高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
35 十三	壺 弥生土器 第5層	口径 25.0	口縁部は外上方へ外反気味に伸び、肩部は大きく垂れ下がる。端面に刺突文。 外面刺突文・ヘラミガキ、内面ナデ。	内 淡茶灰色 外 淡灰赤色	3.5mm以下の砂粒を多量に含む(角閃石・長石)。	良好	1/7残存
36 十三	長頸壺 弥生土器 第4層	口径 13.6 器 高 16.0 底 径 5.1	中位に最大径をもつ体部から上方へ外反して伸びる狭い口縁部で、肩部は丸く終わる。底部は突出するやや上げ底。 口縁部上位ヨコナデ、口縁部下位・体部外面ヘラミガキ、内面ナデ。指ナデ、内外面に7本の接合痕がみられる。	淡茶灰色一 層系褐色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	完形
37 十三	同上 第4層	口径 13.2	口縁部は上方へ外反気味に長く伸びた強く縁部付近で外反する。肩部は外に面をもつ。大部は欠損。 口縁部付近ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	淡灰黄色	1.5mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	1/4残存
38 十三	壺 弥生土器 第4層	底 径 4.2	突出するやや上げ底。体部上位は欠損。外面ナデ、内面ヘラナデ。	暗黒灰色	2mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	底部のみ残存
39 十三	同上 第4層	底 径 4.8	突出する平底。体部上位は欠損。内外面ナデ。	内 暗黒灰色 外 乳灰色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	底部のみ残存
40 十三	同上 第4層	底 径 4.0	突出する平底。体部上位は欠損。内外面ナデ。	内 暗灰褐色 外 淡茶灰色	4mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	底部のみ残存
41 十三	壺 十層器 第4層	口径 13.2 器 高 18.9 最大径 18.2	やや上位に最大径をもつ横円形の体部から屈曲し、上方へ伸びる口縁部に至る。肩部は外に面をもつ。底部は丸底。 口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ後ハケナデ、内面ヘラナデ・指ナデ。	暗系褐色	6mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	完形
42 十三	同上 第4層	口径 13.4	口縁部は外上方へ伸びる。肩部は外に面をもつ。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	淡茶灰色	5mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	1/4残存
43 十三	同上 第4層	口径 16.6	口縁部は外上方へ伸びる。肩部は丸く終わる。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	淡灰茶色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	1/4残存
44 十三	同上 第4層	口径 18.0	口縁部は外上方へ伸びる。肩部はつまみ上げる。体部以下は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ。	暗茶灰色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	1/4残存
45 十三	同上 第4層	口径 12.8	口縁部は外上方へ伸びる。肩部はつまみ出す。体部以下は欠損。 口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ後ヨコナデ、体部外面タタキ、内面ヘラケズリ。	乳灰茶色	3mm以下の砂粒を多量に含む(雲母・角閃石・長石)。	良好	1/4残存

遺物番号 図版番号	器 種	(m) 口径 口径	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
46	土師器 第4層	口 径	17.4	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、 端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナタキ、内面ヘ ラケズリ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
47	同上 第4層	口 径	15.6	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、 端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
48	同上 第4層	口 径	13.6	体部から屈曲し、外上方へ伸びる口縁部、 端部はつまみ上げる。体部は欠損。 口縁部ヨコナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
49	高杯 土師器 第4層	口 径	14.0	上外方へ伸びる杯体部から口縁部、端部は 丸く終わる。脚部は欠損。 杯部内外面ナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
50	同上 第4層	底 径	11.6	脚部は下外方へ伸びる柱状部から、斜下方 へ伸びる頸部に至る。端部は丸く終わる。杯 部は欠損。 柱状部外面ヘラミガキ、頸部外面ヘラナデ、 内面ハケナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
51	同上 第4層	底 径	6.4	脚部は下外方へ外反して伸びる柱状部から 頸部に至る。端部は丸く終わる。杯部は欠損。 脚部外面ヘラミガキ、内面指ナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
52	同上 第4層	口 径	22.0	上外方へ伸びる杯体部から口縁部、端部は 丸く終わる。脚部は欠損。 杯部外面ハケナデ、内面ナデ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/4残存
53	鉄 上層器 第4層	口 径 口 径	9.4 4.5	半球形の体部で、口縁端部は丸く終わる。 底部は突出する平底。 外面ヘラナデ、内面ナデ。	内 淡灰茶 色 外 淡灰茶 色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/2残存
54	同上 第4層	口 径 口 径	6.6 3.8	やや変形した半球形で、端部は丸く終わる。 内外面指ナデで、接合痕が残る。	乳灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	完形
55	同上 第4層	口 径	10.2	体部から屈曲し上外方へ伸びる口縁部、端 部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラ ケズリ。	淡灰茶色	4mm以下の 砂粒を少量 含む(角閃 石・雲母・ 長石)。	良好	1/5残存

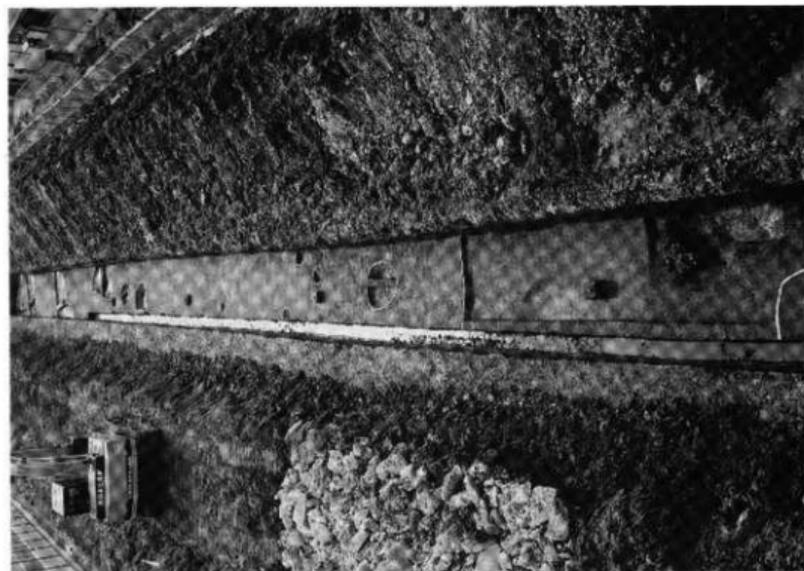
IV まとめ

今回の調査では、古墳時代前期の庄内式古相と新相の遺構・遺物を検出した。遺構は調査区南部で方形周溝墓、調査区北部で井戸・小穴などが検出されており、隣接した既往調査の結果と総合すると、庄内式古相の時期では調査区の南部が墓域で、北部が居住域であったが、庄内式新相～布留式古相の時期になると墓域が北部にまで及ぶようになり、居住域が東部に移動していることが窺える。また、同一遺構面上で弥生時代後期に比定される長頸壺が出土しており、この時期の遺構が付近に存在していた可能性が高い。

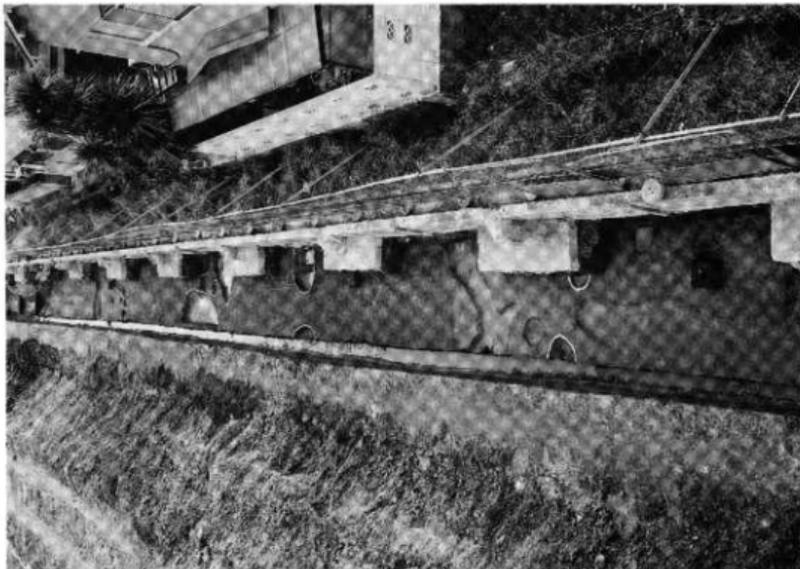
圖 版



第1調査区全景(北から)



第2調査区全景(北から)



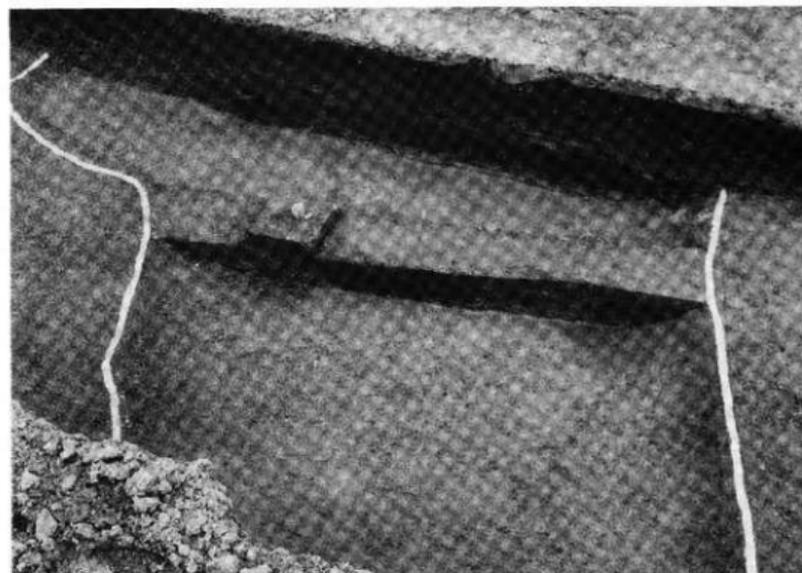
第3調査区全景(北から)



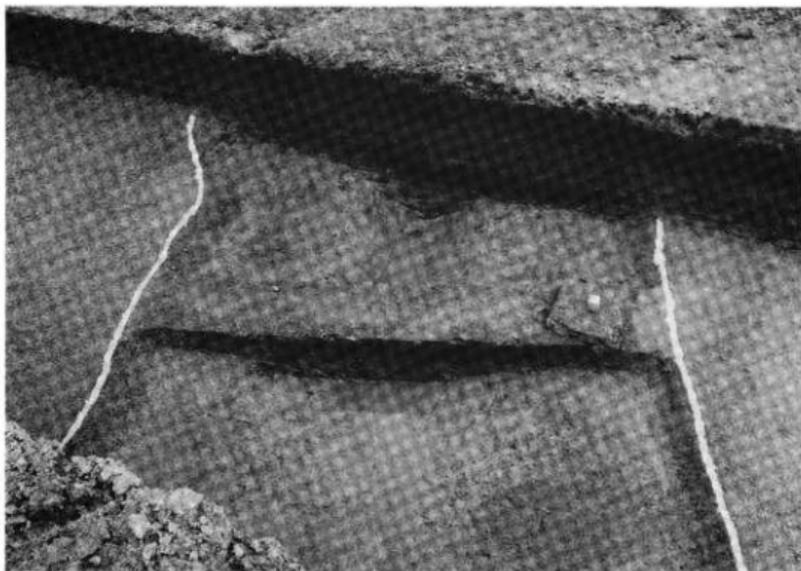
第2調査区 5b~7b区(南から)



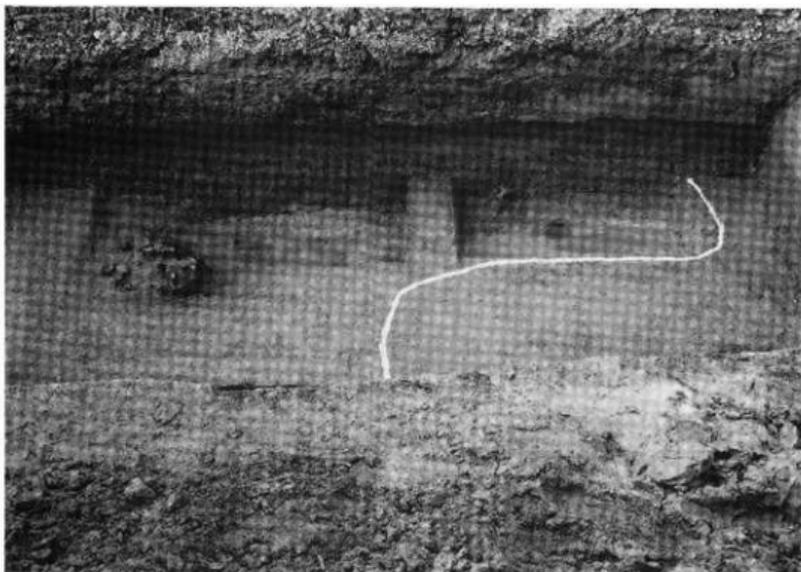
第2調査区 5b~7b区(北から)



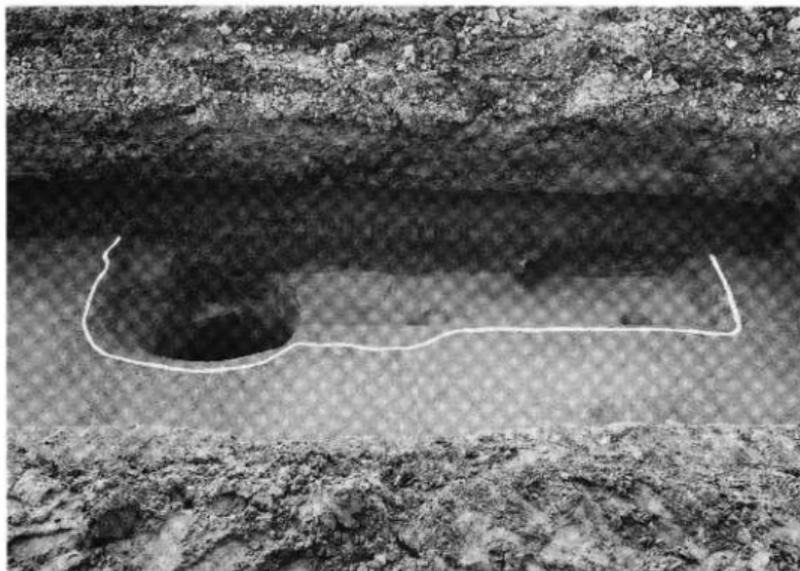
第2調査区 SX1(西から)



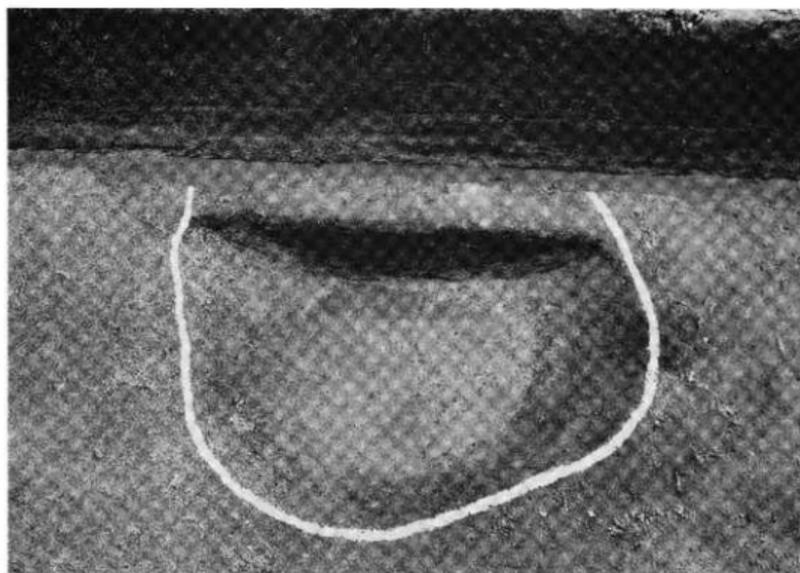
第2調査区 SX2(西から)



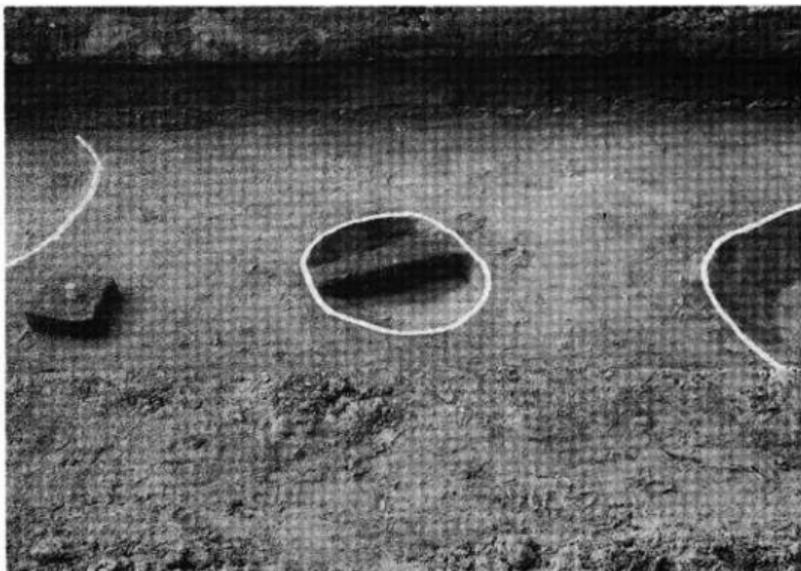
第2調査区 SE1・SK13(東から)



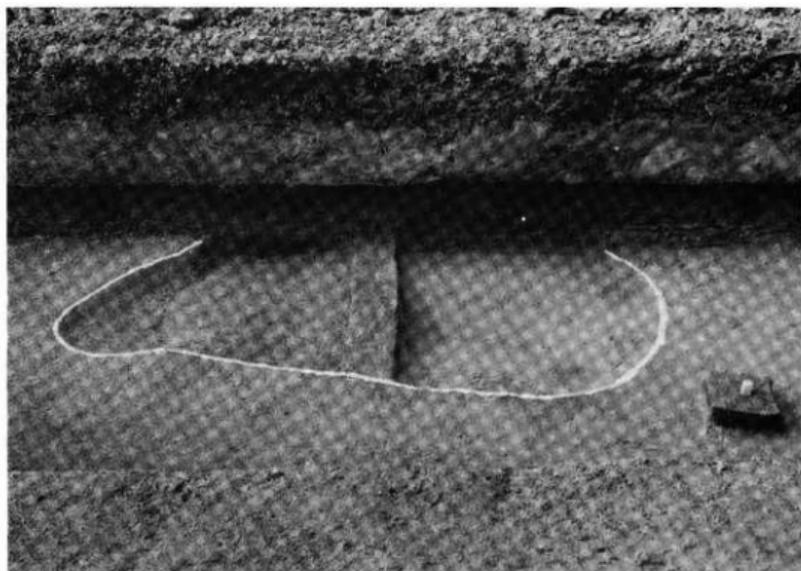
第2調査区 SE1・SK13(東から)



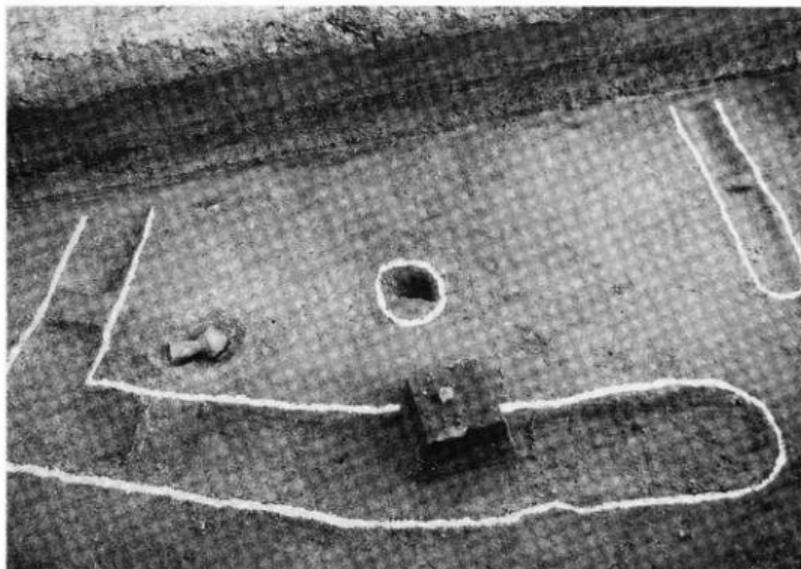
第2調査区 SK15(西から)



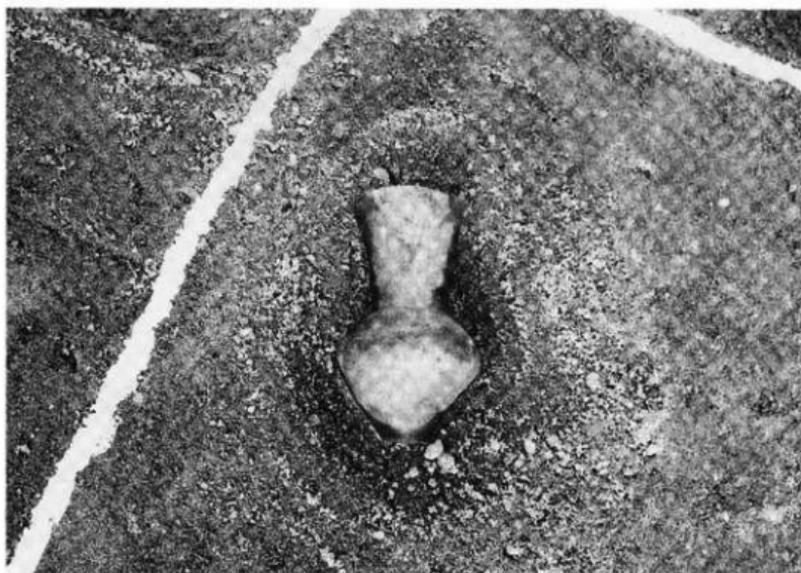
第2調査区 SK17(東から)



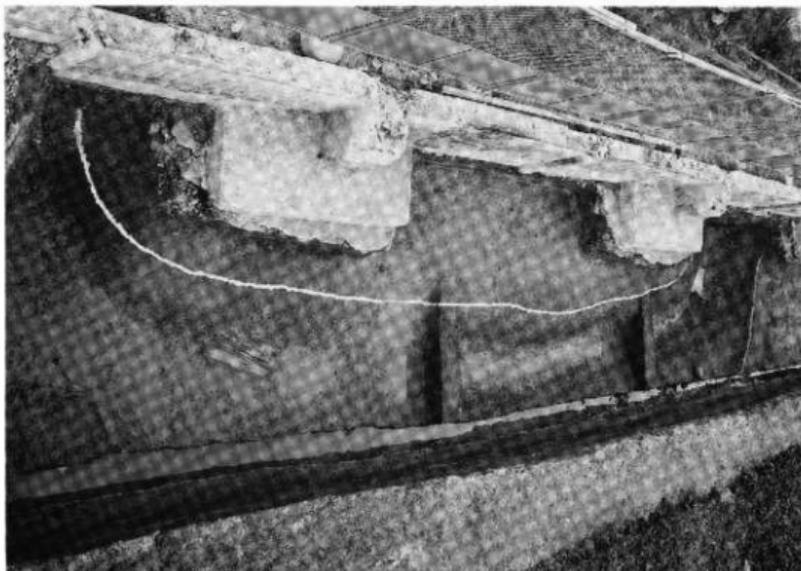
第2調査区 SK18(東から)



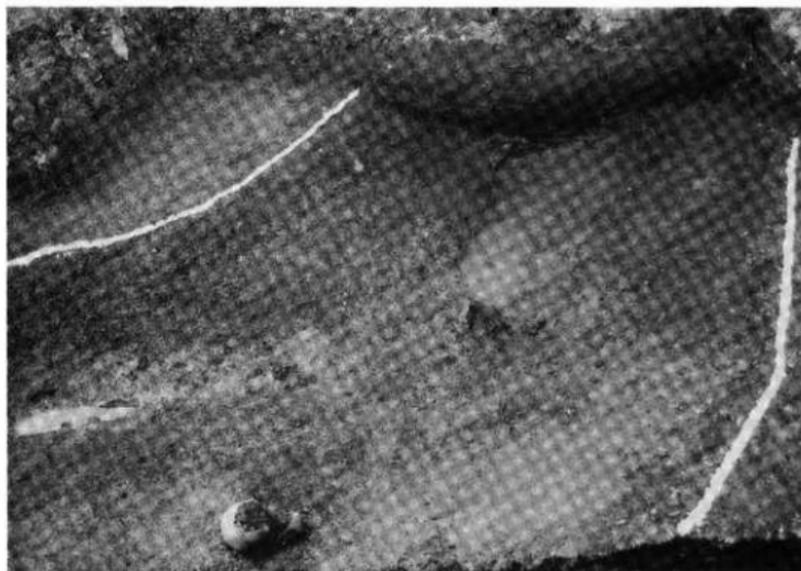
第3調査区 SD1・SP27(西から)



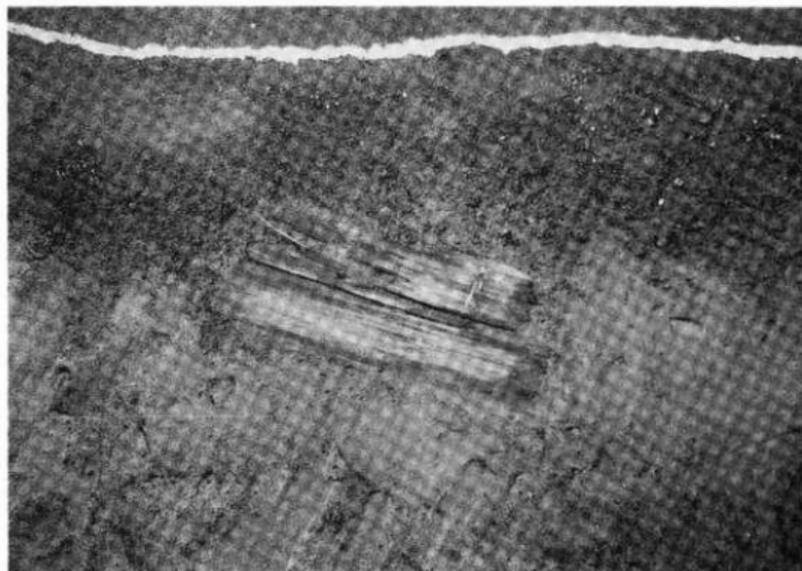
第3調査区 5a区(北西から)



第3調査区 SX3 (南西から)



第3調査区 SX3 (東から)



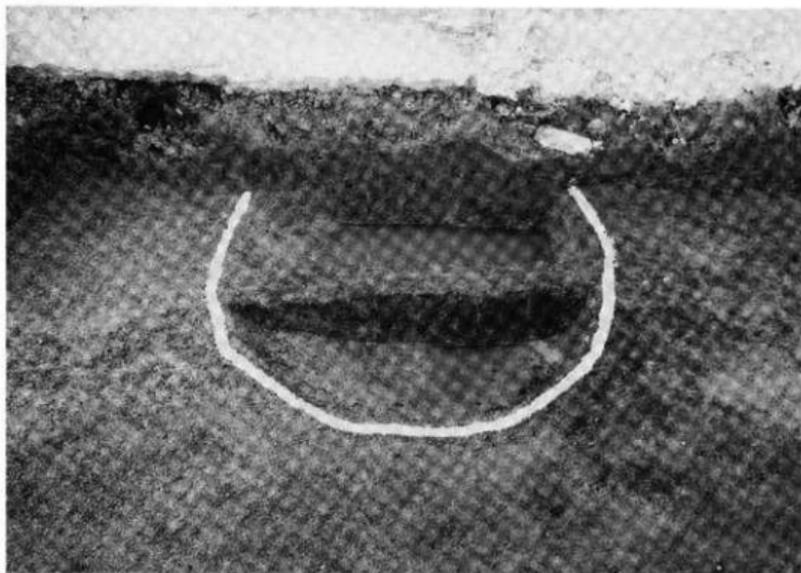
第3調査区 SX3 (東から)



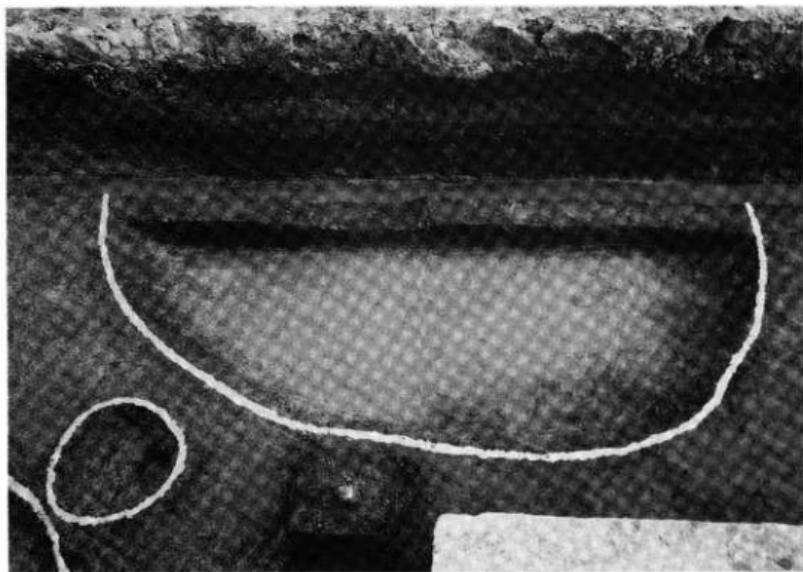
第3調査区 SX3 (北から)



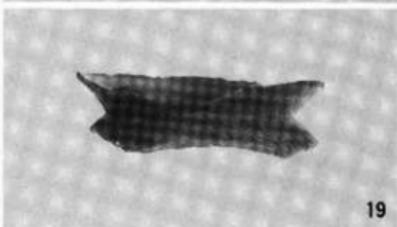
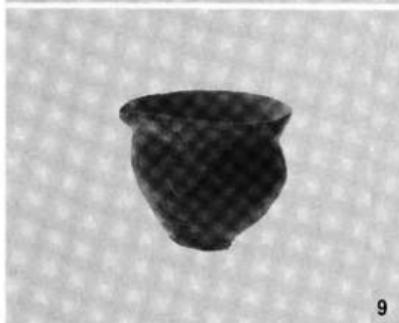
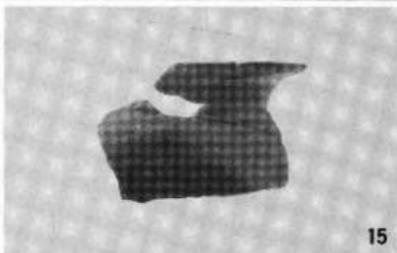
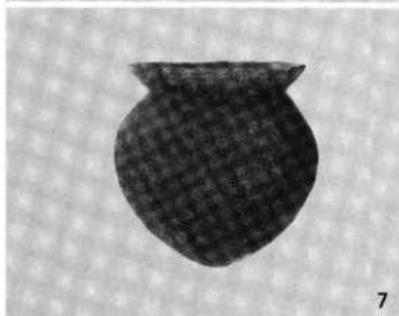
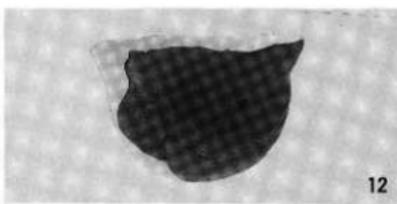
第3調査区 SX3(北から)



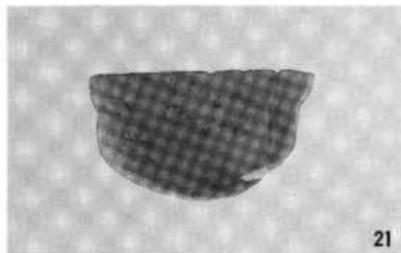
第3調査区 SK22(東から)



第3調査区 SK23(西から)



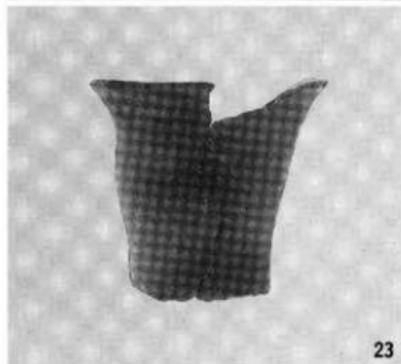
SX 2 4 SX 3 7·9 SE 10·12
SK 4 15 17, SK 5 18·19



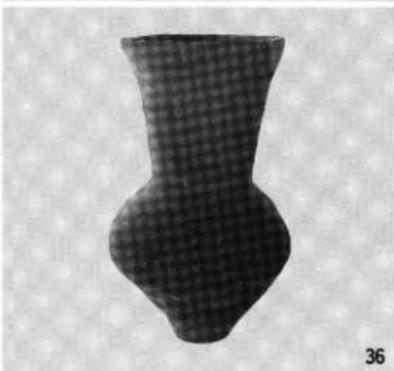
21



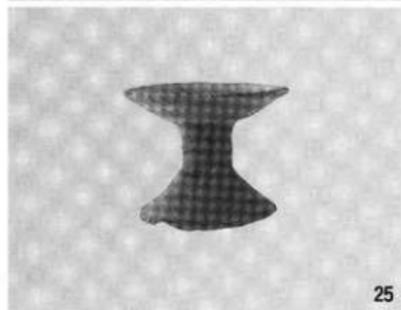
35



23



36



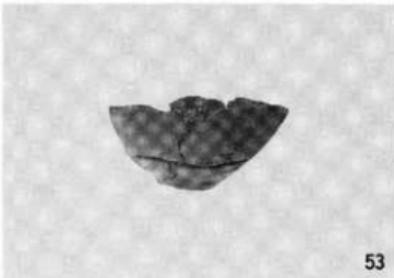
25



37



33



53

第 6 章 第 6 次調査報告(S H90- 6)発掘調査報告

例 言

1. 本書は、八尾市南本町4丁目24で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する成法寺遺跡第6次調査(SH90-6)の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が大石友三郎氏委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年2月20日から3月3日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。調査面積は168㎡である。なお、調査においては岡田聖一・北尾光男・正木洋二・八元聡志が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後実施し、平成3年3月31日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-別所秀高・真柄竜、図面レイアウト-原田、図面トレース-中西隆子、遺物撮影-原田が行った。
1. 本書の執筆および編集は原田が行った。

本文目次

I はじめに	85
II 調査概要	86
1. 調査方法と経過	86
2. 基本層序	86
3. 検出遺構・出土遺物	86
III 出土遺物観察表	95
IV まとめ	99

插图目次

第1图	調査区設定図および地区割図	85
第2图	検出遺構平面図	87
第3图	SK-1出土遺物実測図	88
第4图	SK-1平面図	89
第5图	SK-2平面図	90
第6图	SK-2・SK-3出土遺物実測図	91
第7图	SD-1・SD-2断面図	92
第8图	SD-2・SD-3・SP-13・SP-15出土遺物実測図	94

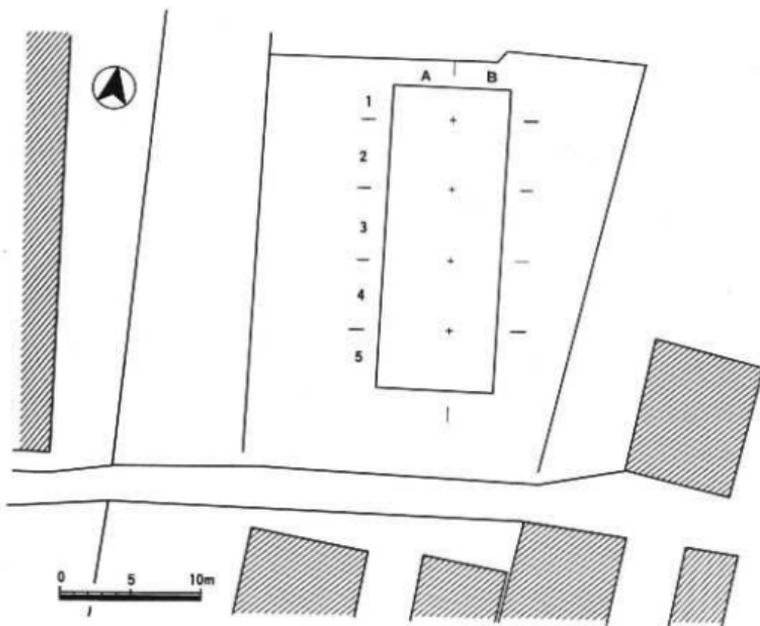
図版目次

図版一	調査区全景
図版二	SK-1北部 SK-1南部
図版三	SK-2 SK-3
図版四	SD-2断面
図版五	SK-1・SK-2出土遺物
図版六	SK-2・SK-3・SD-2・SP-15出土遺物
図版七	SD-2・SD-3・SP-13・SP-15出土遺物

I はじめに

平成元年11月25日、大石友三郎氏から八尾市南本町4丁目24で共同住宅を建設する旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。八尾市教育委員会文化財室では、当該地が成法寺遺跡範囲の東部に当ることから、遺構および遺物包含層の有無を確認するため、平成元年12月8日に試掘調査を実施した。その結果、地表下0.5mまでに弥生時代・古墳時代・中世の土器を含む遺物包含層の存在を確認した。この試掘結果から、八尾市教育委員会文化財室では文化財保護法に基づき発掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通知した。

発掘調査にあたっては、事業者・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で協議を行い、当調査研究会が事業者から委託を受けて実施することが決定された。現地での発掘調査は、平成2年2月20日から3月3日までの11日間にわたって実施した。調査面積は168㎡である。内業整理および本書作成業務は、調査終了後平成3年8月31日まで随時実施した。



第1図 調査区設定図および地区割図

Ⅱ 調査概要

1. 調査方法と経過

共同住宅の建築予定地に東西8m、南北21mの調査区を設定した。掘削に際しては、八尾市教育委員会文化財室の試掘結果に基づいて、現地表下0.4mまでの土層は重機により排除し、以下0.2m前後については人力掘削を実施して、試掘調査で確認された弥生時代～中世の遺物包含層と遺構の関係を追求した。その結果、現地表0.5m前後（標高8.9m）に存在する第4層および第5層上面で室町時代中期に比定される土坑3基（SK-1～SK-3）、溝3条（SD-1～SD-3）、小穴15個（SP-1～SP-15）を検出した。

調査区の地区割については、調査区の中央部を通る南北ラインを任意に設定した。東西ラインは南北ラインに直交させ、調査区を東西にほぼ二分するように設定した。一区割の単位は5m四方で、東西方向は西からA・B、南北方向は北から1～5で表した。各地区の表示には、東西軸と南北軸の組み合わせで、1A区～5B区と呼称した。

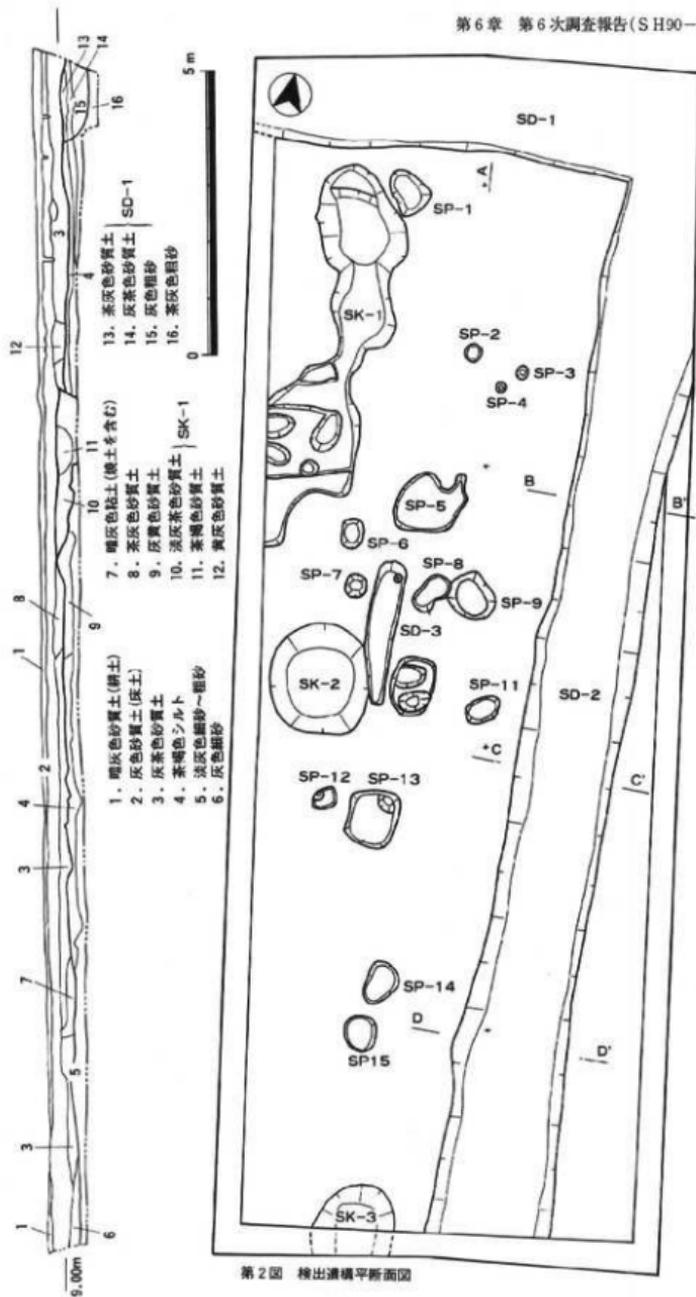
2. 基本層序

ここでは普遍的に存在した土層5層を基本層序とした。以下、各層を概説する。

- 第1層：耕土。暗灰色砂質土。層厚0.1m前後を測る。地表面の標高は9.4m前後である。
- 第2層：灰色砂質土。層厚0.15～0.3m。南部に行くに従って層厚が漸増している。鎌倉時代末期以降に比定される遺物が少量含まれている。
- 第3層：灰茶色砂質土。層厚0.1～0.3m。北から南に向かってゆるやかに傾斜するもので、北部と南部の比高差は0.3mを測る。鎌倉時代末期以降に比定される遺物が少量含まれている。
- 第4層：茶褐色シルト。層厚0.1～0.2m。調査区の南部では欠如している。この土層上面が遺構構築のベース面である。
- 第5層：淡灰色の色調で土質には細砂～粗砂がある。層厚は0.2m以上である。調査区の南部では、この土層上面が遺構構築のベース面である。弥生時代後期に比定される遺物を含むが、量は微量である。

3. 検出遺構・出土遺物

調査の結果、現地表下0.5m前後（標高8.9m）付近に存在する第4層および第5層上面で、鎌倉時代末期から室町時代中期に比定される土坑3基（SK-1～SK-3）、溝3条（SD-1～SD-3）、小穴15個（SP-1～SP-15）を検出した。出土遺物は各遺構のほか、第2層・第3層からコンテナ箱に4箱程度出土したが、大半が小破片で完形のものは極少量である。



第2図 検出遺構平面断面図

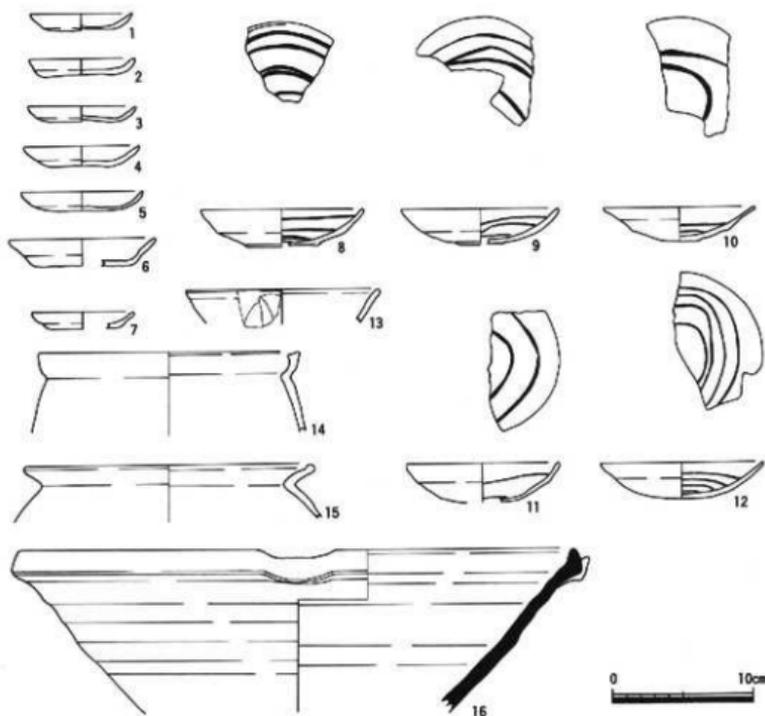
以下、検出遺構および出土遺物について概要を記す。なお、出土遺物の形態については一部本文中でふれるが、個々の法量・調整等の詳細についてはⅢ出土遺物観察表を参照されたい。

土坑 (SK)

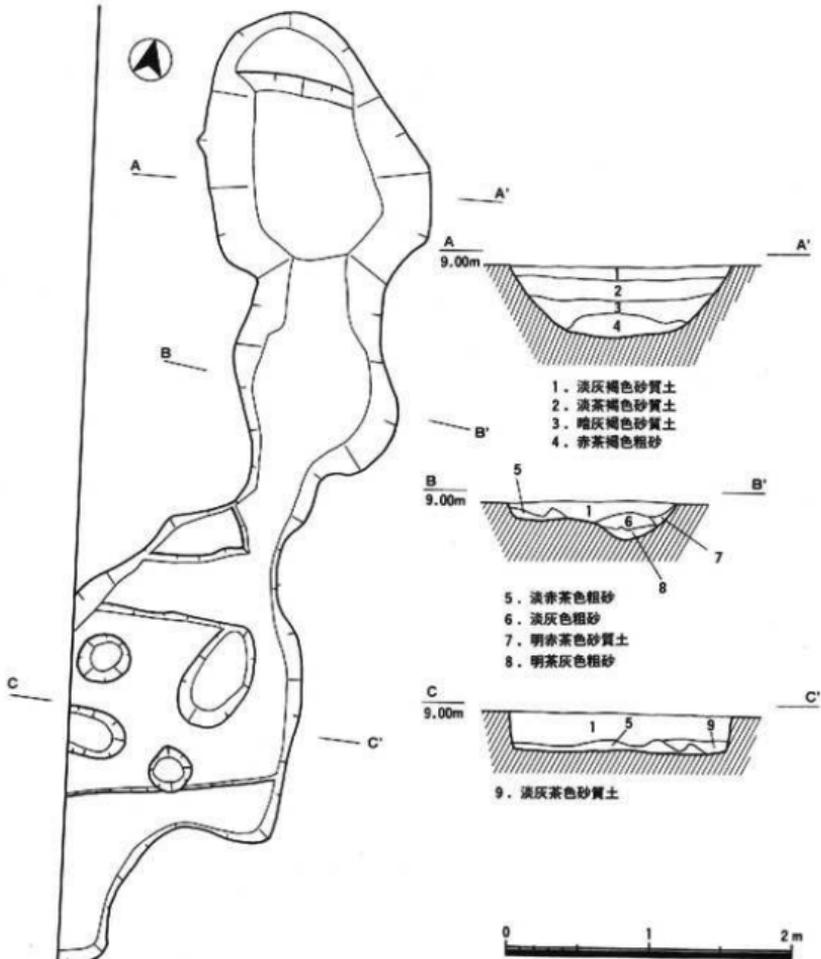
SK-1

調査区の北西部で検出した。溝状を呈するもので、検出部で南北幅6.6m・東西幅1.5mで、深さは北部で0.5m、南部で0.25mを測る。内部堆積土層は北部では上層から第1層淡灰褐色砂質土・第2層淡茶褐色砂質土・第3層暗灰褐色砂質土・第4層赤茶褐色粗砂で、南部では上層から第1層淡灰褐色砂質土・第5層淡赤茶色粗砂・第9層淡灰茶色砂質土である。

遺物は主に第1層淡灰褐色砂質土から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿441・土釜5、須恵器甕43・鉢4、瓦器碗327・小皿1・土釜1・足釜2、青磁碗5、厩瓦8であるが、大半



第3図 SK-1出土遺物実測図



第4図 SK-1 平面図

が小破片であった。そのうち図示できたものは16点(1~16)である。

土師器小皿(1~6)はほぼ水平な底部から斜上方に立ち上がるもの(1~5)と、体部が上方へ伸びた後、角度を斜上方へ変えるもの(6)がある。瓦器碗は5点(8~12)を図示したが、他の資料も含めてすべて和泉型であった。すべて浅い碗形を呈するもので、形骸化し

た高台を有する（8～10）と高台が消滅したもの（11・12）がある。見込みのヘラミガキは一本線による渦巻状である。前者が八尾市域幅年のⅣ-2、後者がⅤ-1に当る。（7）は瓦器小皿で体部がやや外反気味に斜上方へ伸びる。（13）は龍泉窯系の青磁碗で、体部外面に鎊蓮弁文が施されている。（14・15）は土師器土釜で、（14）は口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、口縁端部は内傾する面を持つ。（15）は「く」の字状に屈曲する口縁部を有するもので、口縁端部は内側に肥厚している。（14）は菅原分類による大和Ⅰ型aに当たり、15世紀後半に比定されている。（16）は東播系の須恵器こね鉢である。遺物の特徴から土坑の廃絶時期は、一部の夾雑物を除けば14世紀後半から15世紀初頭の一時期に推定される。

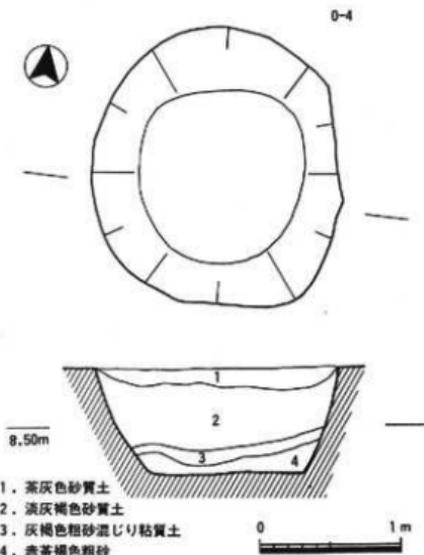
SK-2

調査区の西部で検出した。南北方向に長い楕円形を呈するもので、東西幅1.8m・南北幅1.95m・深さ1.5mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。内部堆積土層は上層から第1層茶灰色砂質土・第2層淡灰褐色砂質土・第3層灰褐色粗砂混じり粘質土・第4層赤褐色粗砂である。

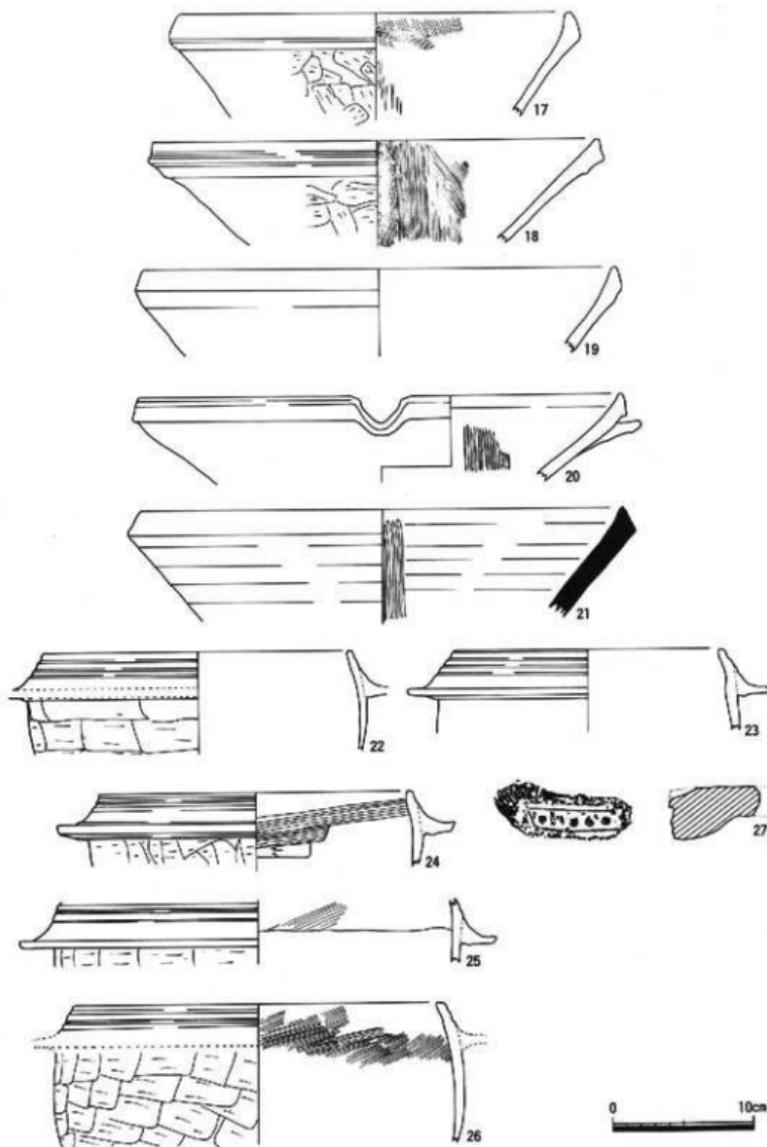
遺物は第1層・第2層・第3層から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿193・土釜1、瓦器椀104・甕1・土釜7・鉢30、磁器碗9、屋瓦20であるが大半が小破片であった。

そのうち図示できたものは9点（17・19～23・25～27）である。鉢には瓦器質摺鉢（17・19・20）と須恵質こね鉢（21）がある。瓦器質摺鉢3点は共に口

縁部が逆「く」の字に屈曲するものである。須恵器摺鉢（21）は口縁部が内傾する面を持つもので、内面にやや太めの摺目が施されている。土釜には土師質の（22・23・26）瓦器質の（25）がある。土師器土釜は小型の（22・23）とやや大型の（26）がある。いずれも底部が欠損するもので、ほぼ水平に貼り付けられた鈎から口縁部が内傾して立ち上がるもので、口頸部外面に三段の段を有する（22・23）と二段の（26）がある。（25）は瓦器質の土釜で、口頸部外面に二条の沈線が走る。（27）は瓦当面に対して左部分が遺存する連珠文軒平瓦で、二本の圈線間に小粒で隆起の大きい珠文を配するもので、珠文が5個遺存していた。



第5図 SK-2平面図



第6図 SK-2・SK-3出土遺物実測図

遺物の特徴から土坑の廃絶時期は14世紀後半に比定されよう。

SK-3

調査区の南端で検出した。南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部で東西幅1.5m・南北幅1.8m・深さ0.6mを測る。内部堆積土は灰色砂質土である。

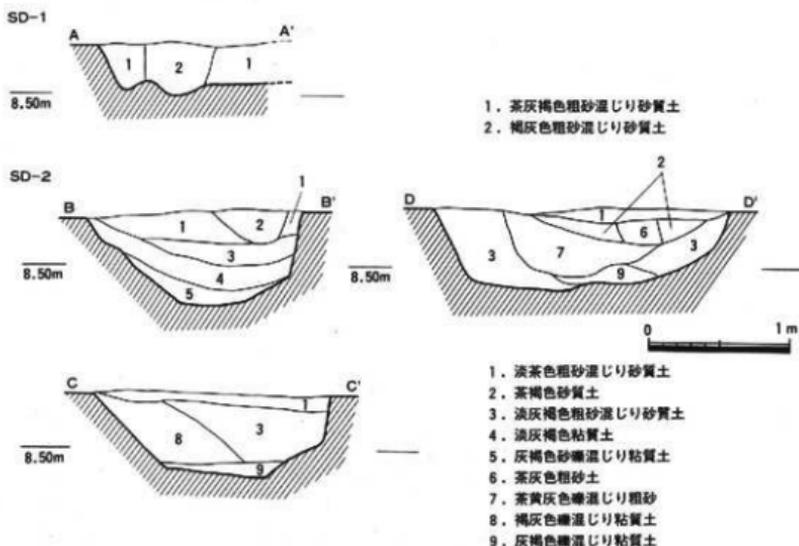
出土遺物の内訳は土師器小皿50、瓦器碗25・土釜4・鉢1であるが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは2点(18・24)である。瓦器摺鉢(18)は口縁部が逆「く」の字を呈するもので、体部内面には櫛状工具による摺目が施されている。(24)は瓦器土釜で口頸部の外面に三段の段を有する。

溝(SD)

SD-1

調査区の北部で検出した。東西方向に伸びるもので東部はSD-2と合流している。検出部で長さ6.4m・幅2.0m・深さ0.3mを測る。内部堆積土は第1層茶灰褐色砂混じり砂質土・第2層褐色粗砂混砂質土である。

遺物は土師器鉢1・高杯1・小皿23・土釜1、瓦器碗2が出土したが、大半が小破片で図示できたものはない。



第7図 SD-1・SD-2断面図

SD-2

調査区の東部で検出した。南北方向に伸びるもので、北端はSD-1と合流している。検出部で長さ21m・幅1.6~1.8m・深さ0.4m~0.7mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。

遺物は各層からコンテナ箱に半分程度出土した。出土遺物の内訳は土師器甕2・高杯3・小皿312・土釜4・鉢2、須恵器壺1・杯身1、瓦器椀50・甕2・足釜1・壓瓦6点であるが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは9点(28・29・32・34・37・40・43・45・46)である。(28・29・32)は土師器小皿である。(28)は水平な底部から外反気味に立ち上がった後、角度を斜上方に変えるもので、体部中位に指頭圧痕が遺存している。(29)は口縁部が上外方に立ち上がる。(32)は底部と体部の境に明瞭な段を有する。(34)は土師器中皿で口縁部が斜上方へ直線的に立ち上がる。(40)は土師器摺鉢で流し口を有する。(43)は土師器土釜で、口頸部は内傾して立ち上がり外面に三段の段を有する。甕は水平方向よりやや上方に貼り付けられており、甕以下には煤が付着している。(45)は平瓦で、凹面に細かい布目、凸面に隆線で構成される叩きが縦位に施されている。(46)は丸瓦で玉縁を有する。

遺物の特徴から溝の廃絶時期は14世紀後半から15世紀初頭の時期に比定されよう。

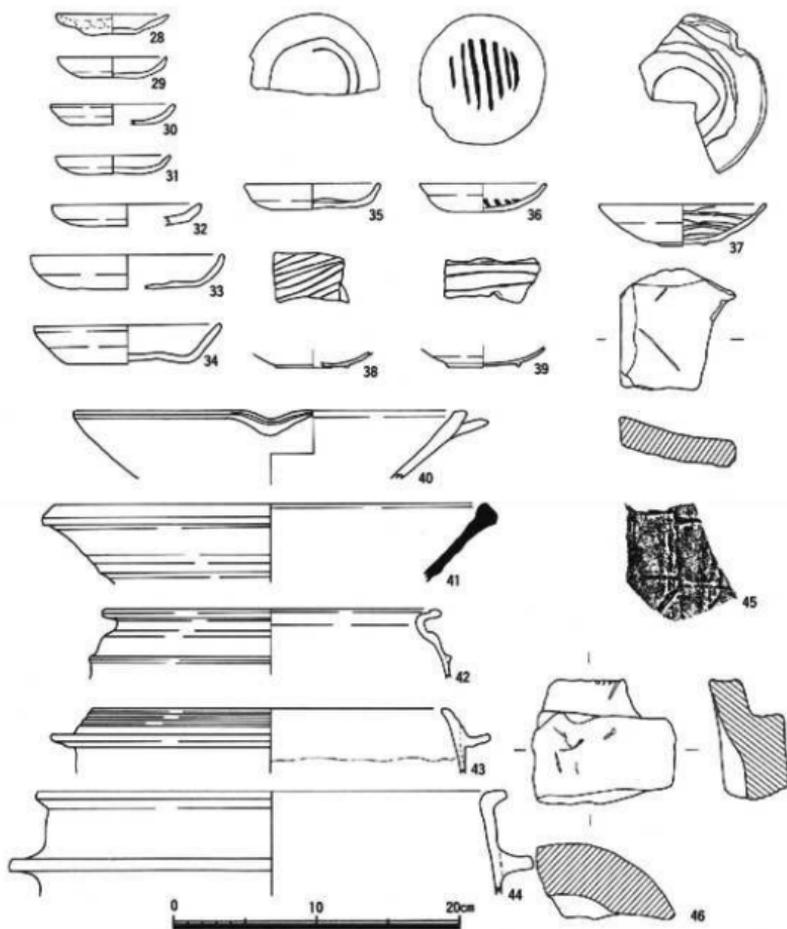
SD-3

調査地の中央部で検出した。南北方向に伸びるもので、西南部はSK-2に切られている。長さ2.5m・幅0.55m・深さ0.15mを測る。内部堆積土は上層から淡褐色気色砂質土・淡灰茶色砂質土である。遺物は主に下層から出土した。出土遺物の内訳は土師器小皿33・土釜1・須恵器甕1、黒色土器椀1、瓦器椀23、壓瓦1が出土したが、大半が小破片であった。そのうち図示できたものは1点(42)である。(42)は土師器土釜で口頸部で内傾して立ち上がった後、口縁部付近で大きく外反するもので、口縁端部は内側に折り返されて肥厚気味に終わる。甕は断面の形状が三角形を呈する。色調はにぶい褐色で、胎土には精良な粘土を使用する。菅原分類の大和B型dに当たるもので、14世紀後半に比定されている。

小穴(SP)

総数で15個(SP-1~SP-15)を検出した。平面の形状で区別すれば、円形4個・楕円形8個・方形2個・不定形1個で、上面幅0.2~0.85m・深さ0.1~0.7mを測る。

遺物はSP-2・SP-11を除く各小穴から土師器小皿・土釜、須恵器鉢、瓦器椀・小皿・土釜、陶器、白磁等の小破片が少量出土した。そのうち図示できたものは、SP-13の須恵器こね鉢(41)とSP-15の土師器小皿(30・31)・中皿(33)・土釜(44)、瓦器小皿(35・36)・椀(38・39)である。(41)は東播系の須恵器こね鉢で口縁部が逆「く」の字を呈する。土師器小皿(30・31)は水平な底部から口縁部が斜上方へ立ち上がる(30)と上外方へ立ち上がる(31)がある。(33)は土師器中皿で、水平な底部から口縁部が内湾気味に立ち



第8図 SD-2・SD-3・SP-13・SP-15出土遺物実測図

上がる。瓦器小皿（35・36）は水平な底部から口縁部が斜上方へ立ち上がるもの（35）と丸味のある底部から内湾気味に立ち上がる（36）がある。瓦器腕（38・39）は、ともに底部のみが遺存するもので、形骸化した高台が付く。見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。（44）は土師器土釜で水平方向に伸びる甕が付く。口縁部は「く」の字に屈曲している。

Ⅲ 出土遺物観察表

SK-1

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 法量	口徑 器高	形態・調整等の特徴	色	胎	土	焼成	備 注	考 証 存 状 況
1	土師器 小皿	7.1 1.2		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	浅黄褐色	密		良好		1/6
2	土師器 小皿	7.4 1.3		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	灰白色	密		良好		1/2
3	土師器 小皿	7.7 1.1		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	灰白色	密		良好		1/4
4	土師器 小皿	8.1 1.4		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面未調整。	にぶい 黄褐色	密		良好		1/3
5	土師器 小皿	8.6 1.4		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面指痕は直遺存。	浅黄色	密		良好		1/4
6	土師器 中皿	10.3 1.9		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内面ナデ。底部外面弱いナデ。	にぶい 黄褐色	密		良好		1/4
7	瓦器 小皿	7.4 1.2		手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底 部内外面ナデ。	灰色	密		良好		1/6
8	瓦器 椀	11.4 2.7		口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。高 内は一周せず部分的に切れる部分がある。内 面に渦巻状ヘラミガキ。	灰色	やや粗		良好	1mm大の長 石を散見す る	1/6
9	瓦器 椀	11.2 2.6		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体 部外面指痕形成後、弱いナデ。内面に渦巻 状ヘラミガキ。	淡灰色	密		良好		1/4
10	瓦器 椀	10.8 2.4		口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体 部外面指痕形成後、弱いナデ。内面体部に ヘラ先による圧痕遺存。内面に渦巻状ヘラミ ガキ。	淡灰色	やや粗		良好		1/3
11	瓦器 椀	11.0 2.8		口縁部外面ヨコナデ。体部内面ナデ。体部 外面弱いナデ。内面に渦巻状ヘラミガキ。	淡灰色	やや粗		良好		1/3
12	瓦器 椀	11.5 2.6		口縁部外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。内 面に渦巻状ヘラミガキ。	灰白色～灰 色	やや粗		良好	外面に赤ね 焼痕	1/3

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
13	内底 碗	13.7	—	ロケロ成形。体部外面滴漙全文を施す。胎には光沢がありやや厚目に施釉されている。全体に粗い貫入が入る。	オリーブ灰色	緻密	堅緻	陶器京系 口縁部 1/6
14 五	土師器 壺	18.4	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰白色	密	良好	外面塚付着 1/6
15 五	土師器 壺	20.1	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰白色	やや粗 0.5-1mm 程度の長石、 クサリ裡を 含む	良好	外面塚付着 1/6
16 五	須恵器 こね鉢	39.2	—	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部上位内外面回転ナデ。体部中位以下の内外面ナデ。	淡青灰色	やや粗	堅緻	体部内面灰 化物付着 1/6

SK-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
17 五	瓦器 楕鉢	27.5	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。体部内面上位ハケナデ。胎はナデ。体部内面に磨状工具による損目を施す。	淡灰色-灰色	やや粗 1mm大の長石 を多量に 含む	良好	1/6
19	瓦器 楕鉢	34.4	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケナデの後、弱いなデ。体部内面ナデ。	淡灰色	やや粗 0.1-1mm 大の長石を 多量に含む	良好	1/8
20 五	瓦器 楕鉢	27.6	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケナデ。体部内面ナデ。体部内面16本/3.3cmを単位とする磨状工具による損目を施す。	外面 乳白色 内面 淡灰色	密	良好	1/6
21	須恵器 楕鉢	34	—	マキアゲ・ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面回転ナデ。体部内面磨状工具による損目を施す。	淡灰色	やや粗 0.5mm大の 長石を少量 含む。	堅緻	1/12
22 五	土師器 土 釜	21.5	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。体部内面ナデ。	乳白色	やや粗	良好	頸部以下塚 付着 1/6
23 六	土師器 土 釜	18.5 口径25.7	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	淡黄褐色	密	良好	頸部以下塚 付着 1/4
25 六	瓦器 土釜	— 口径33.8	—	マキアゲ成形。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面左下りのハケナデの後ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	淡灰茶色	やや粗	良好	1/6
26 六	土師器 土 釜	26.0	—	マキアゲ成形。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面右下りのハケナデ。体部外面横位のヘラケズリ。内面はヨコナデ。	にぶい黄色 -黒色	やや粗 0.1mm大の 砂粒を多量 に含む。	良好	体部外面塚 付着 1/6
27 六	軒平瓦	— 幅3.5	—	瓦当面に対して左部分が遺存。蓋は破損である。外縁は上外縁が下外縁に比して傾斜で嵌位置に付く。現状で二本の縦線間に小粒で隆起の大きい珠文が二重遺存している。	淡灰色	やや粗 0.1-0.5mm 大の長石を 多量に含む。	良好	1/2

SK-3

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
18 六	瓦器 指鉢	31.5 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面右下りのハケナデ。体部内面筋状土具による襷目(←単位は不明)。	淡灰色	やや粗 1mm大の長石・石英を含む	良好	1/8
24 六	瓦器 土釜	22.1 —	口径28.1	マキアゲ成形。口縁部外面および肩部内外面ヨコナデ。口縁部内面横化のハケナデ。体部外面ハラケズリ。	淡灰色	やや粗	良好	肩裏面以下 保存者 1/4

SD-2

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
28 六	土師器 小 皿	7.9 1.5	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面指摺止痕遺存。底部内外面ナデ。	茶灰色	密	良好	内面および 口縁部外面 保存者 1/2
29 六	土師器 小 皿	7.7 1.5	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内外面ナデ。	浅黄褐色	密	良好	1/2以上
32 六	土師器 小 皿	10.4 1.6	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部ナデ。	浅黄褐色	密	良好	1/4
34 六	土師器 中 皿	13.0 2.2	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面縦いナデ。	浅黄褐色	密	良好	1/2
37 七	瓦器 椀	11.8 2.8	—	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面削いナデ。体部内面ナデ。高台部ナデ。体部内面溝巻状ヘアミガキ。	灰白色-灰色	やや粗	良好	1/2
40 七	土師器 指 鉢	27.6 —	—	マキアゲ成形。口縁部内外面ヨコナデ。他はナデ。	淡茶色	やや粗	良好	1/4
43 七	土師器 土 釜	25.0 —	口径31.2	マキアゲ成形。口縁部および肩部ヨコナデ。他はナデ。	灰色	やや粗	良好	1/8
45 七	平 瓦	— —	—	西面細い布目遺存。凸面は陰鏝で構成される可きを縦位に施す。表面に糠れ砂が遺存。	乳灰色	やや粗	良好	
46 七	丸 瓦	— —	—	玉縁を有する丸瓦。西面は未調整。凸面はナデ。	淡茶灰色	やや粗 0.1-1mm 大の長石・ 石英を含む	良好	

SD-3

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 法量	口径 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
42 七	土師器 土 釜	23.0 —	口径25.5	マキアゲ成形。口縁部および肩部ヨコナデ。体部内面ナデ。	にぶい褐色	密	良好	人和堂 1/6

SP-13

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量	口徑 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
41 七	須恵器 こね鉢	30.2 —	—	マキアゲ、ミズビキ成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内外面回転ナテ。	灰色～黒灰色	やや粗	堅緻	口縁部外面 敷ね焼痕 取継糸 1/6

SP-15

遺物番号 図版番号	器 種	(cm) 口径 法量	口徑 器高	形態・調整等の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考 遺 存 状 況
30 六	土師器 小 重	8.6 1.5	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内外面ナテ。	にぶい褐色	密	良好	1/4
31	土師器 小 重	8.0 13.5	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内外面ナテ。	にぶい褐色	密	良好	1/4
33 六	土師器 中 重	13.0 2.2	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内面ナテ。底部外面弱いナテ。	にぶい褐色	密	良好	1/4
35 六	瓦器 小皿	9.6 1.8	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内面ナテ。底部外面弱いナテ。内面褐色状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	1/2
36 六	瓦器 小皿	8.9 2.1	—	手づくね成形。口縁部内外面ヨコナテ。底部内外面ナテ。内面平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	完形
38	瓦器 椀	— — 高台径5.0 高台高0.2	—	底部内外面ナテ。底部内面ナテ。高台部ナテ。高台は低く断面三角形を呈する。見込み平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	高台部 1/2
39	瓦器 椀	— — 高台径5.0 高台高0.3	—	底部内外面ナテ。底部内面ナテ。高台部ナテ。高台は低く断面「U」字状を呈する。見込み平行線状ヘラミガキ。	淡灰色	密	良好	内面に泥化 物付着 高台部 1/2
44 七	土師器 上 皿	30.3 — 口径37.0	—	マキアゲ成形。口縁部および器部ヨコナテ。底部内面ナテ。	褐色	やや粗 0.5～1mm 大の長石・ 石英を散見 する	良好	鈎裏面に煤 付着 1/6

IV まとめ

今回の調査では小面積にもかかわらず、14世紀末から15世紀初頭に比定される遺構・遺物を検出した。遺構の配置関係からSD-1・SD-2は堀の機能を果たしたものと考えられ、堀で囲繞された屋敷地(館)であった可能性が高い。八尾市域では福万寺遺跡で堀(溝)で区画された集落が検出されており、この時期このような集落形態が一般的であったものと推定される。

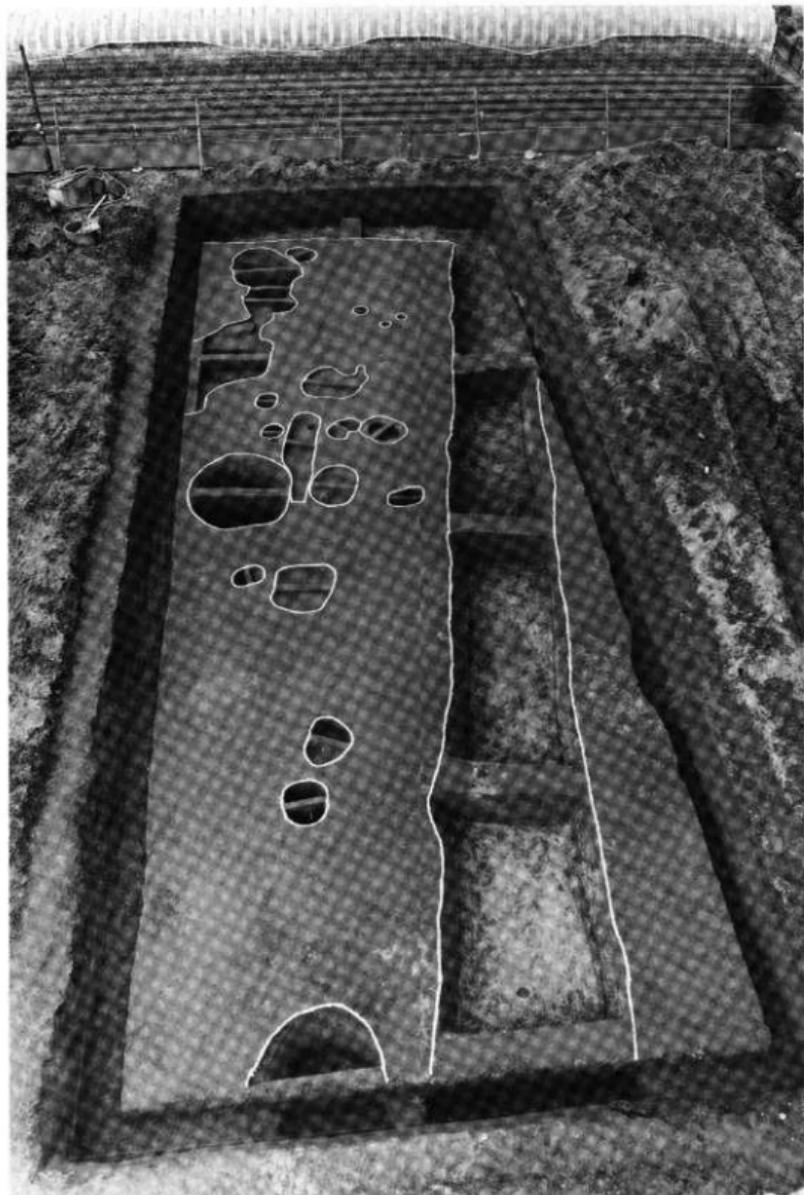
なお、調査地点は服部昌之氏^{註2}が指摘されているように長瀬川から分かれて北流した旧流路の自然堤防にあたり、現在、南北方向に弓状を描いて走っている道路が旧流路と合致するものと推定されている。調査においてもこれらを裏付けるように、遺構検出面より下部は深部に至るまで粗砂の堆積が顕著であった。また、これらの土層からは弥生時代後期に比定される土器片が少量出土しており、旧流路の存続時期を示唆する貴重な資料と言えよう。

註記

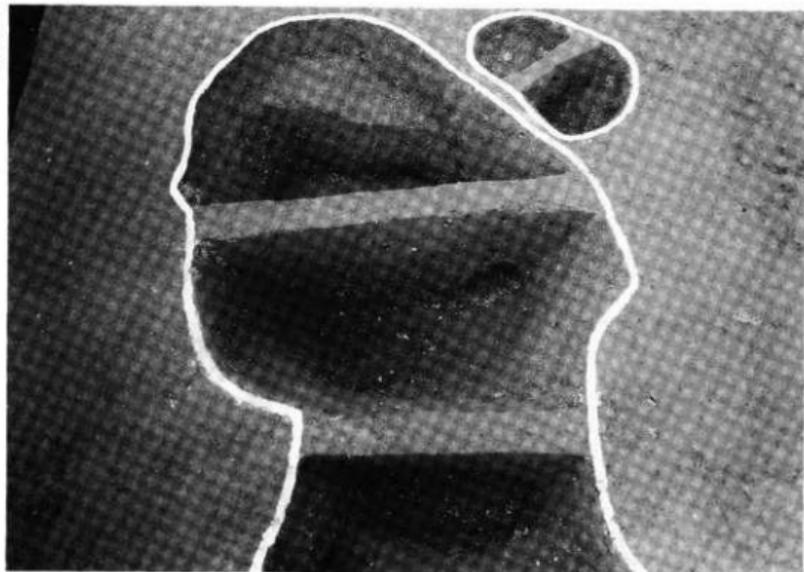
註1 (財)八尾市文化財調査研究会 「福万寺遺構一上之島町北3丁目22-1の調査」(財)八尾市文化財調査研究会報告24 1990

註2 服部昌之 「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地域研究と都市研究』大明堂1978

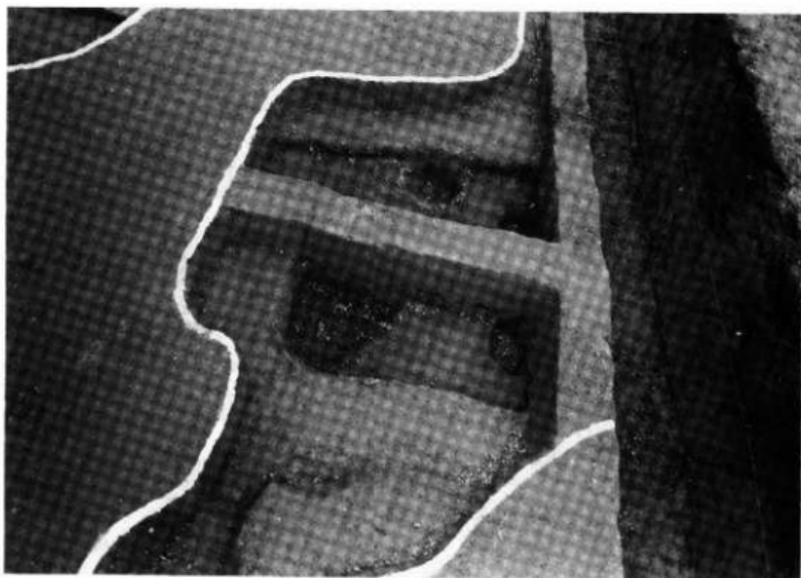
图 版



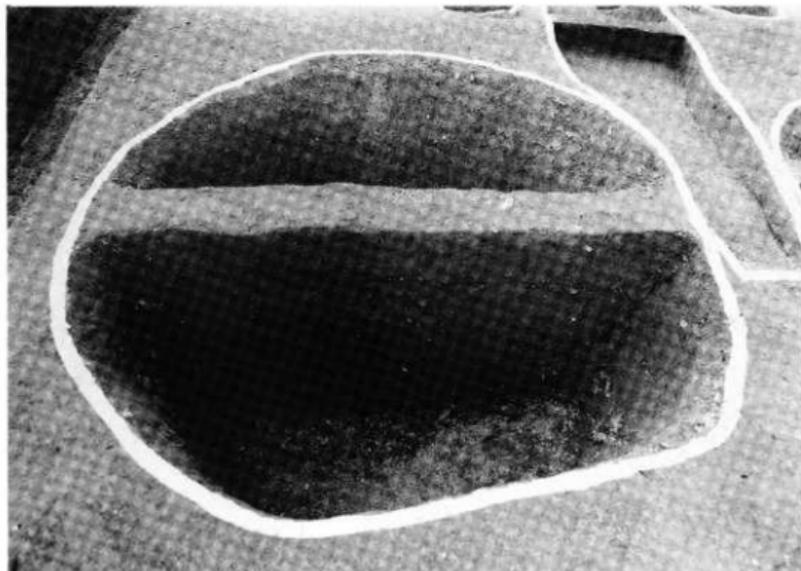
調査区全景(南から)



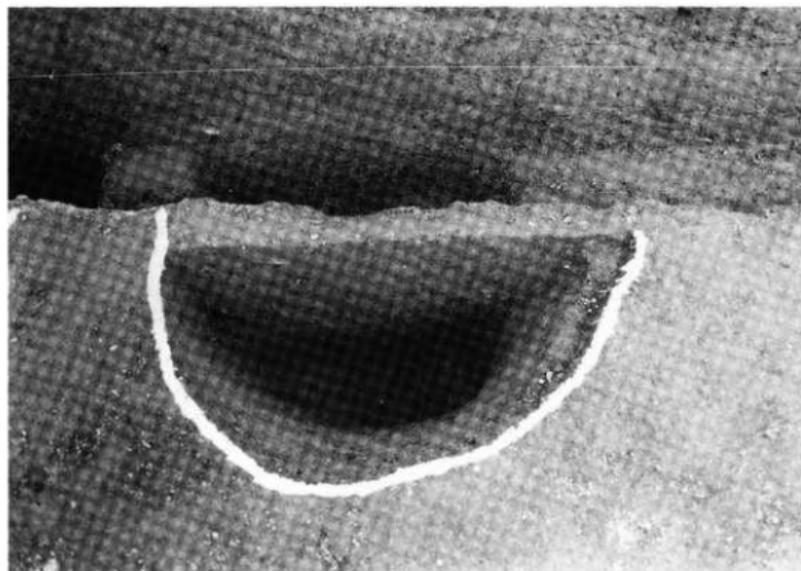
SK-1 北部(南から)



SK-1 南部(北から)



SK-2 (南から)



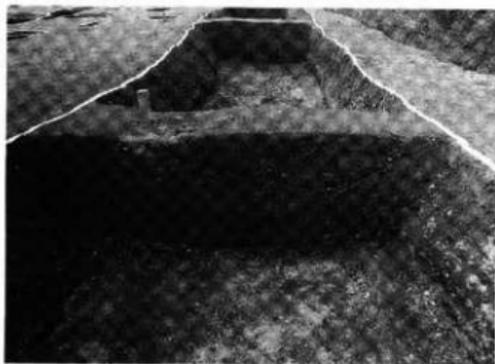
SK-3 (北から)



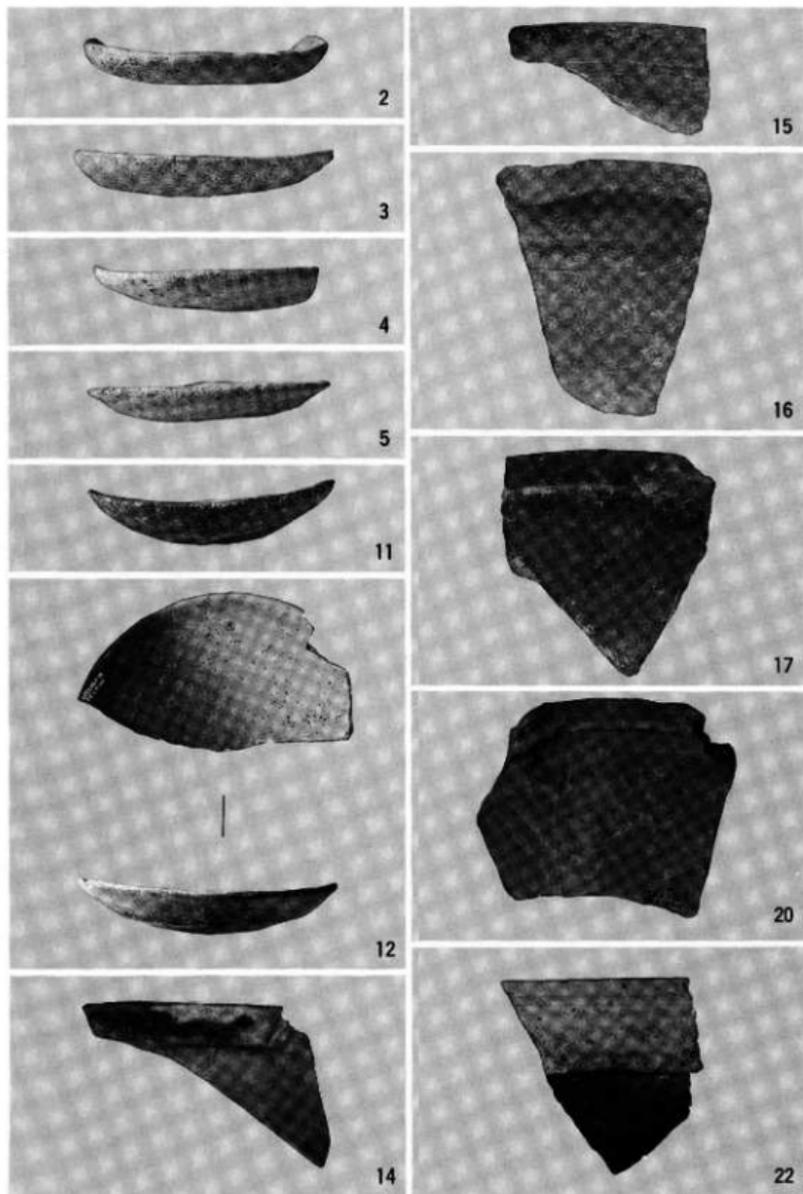
SD-2 B-B'断面(南から)



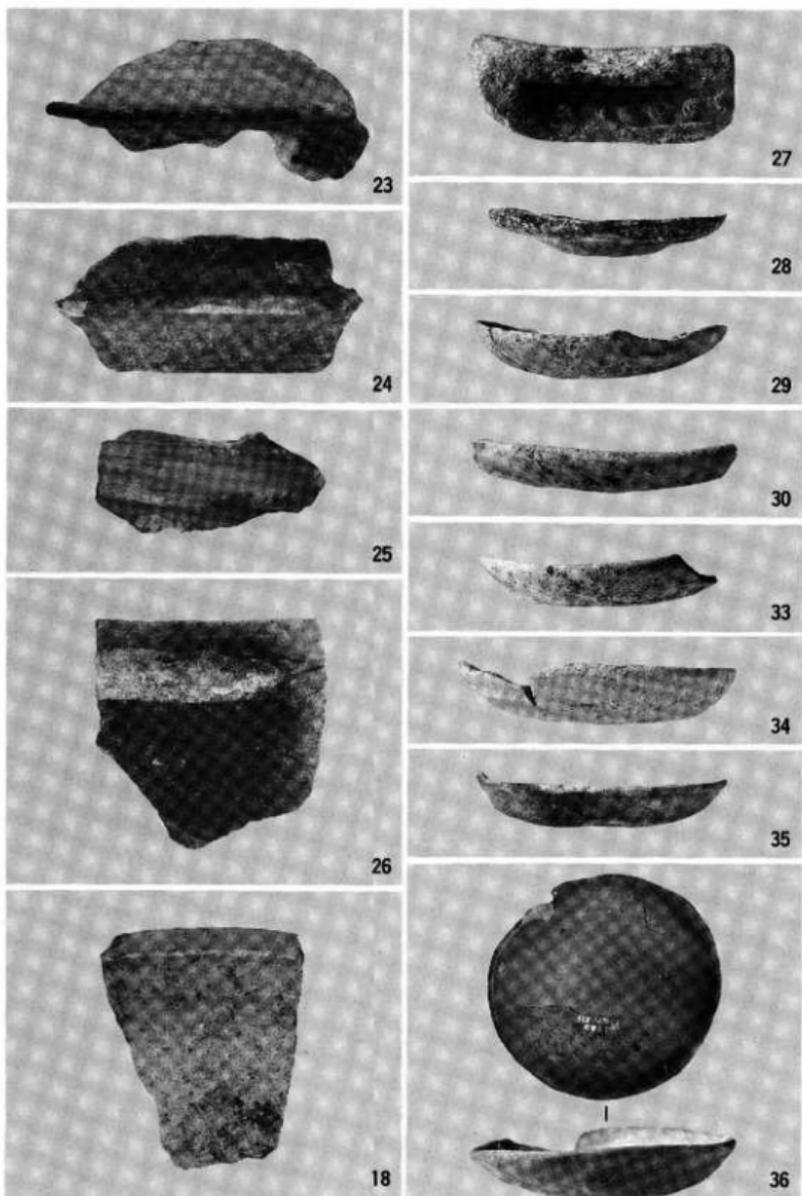
SD-2 C-C'断面(南から)



SD-2 D-D'断面(南から)

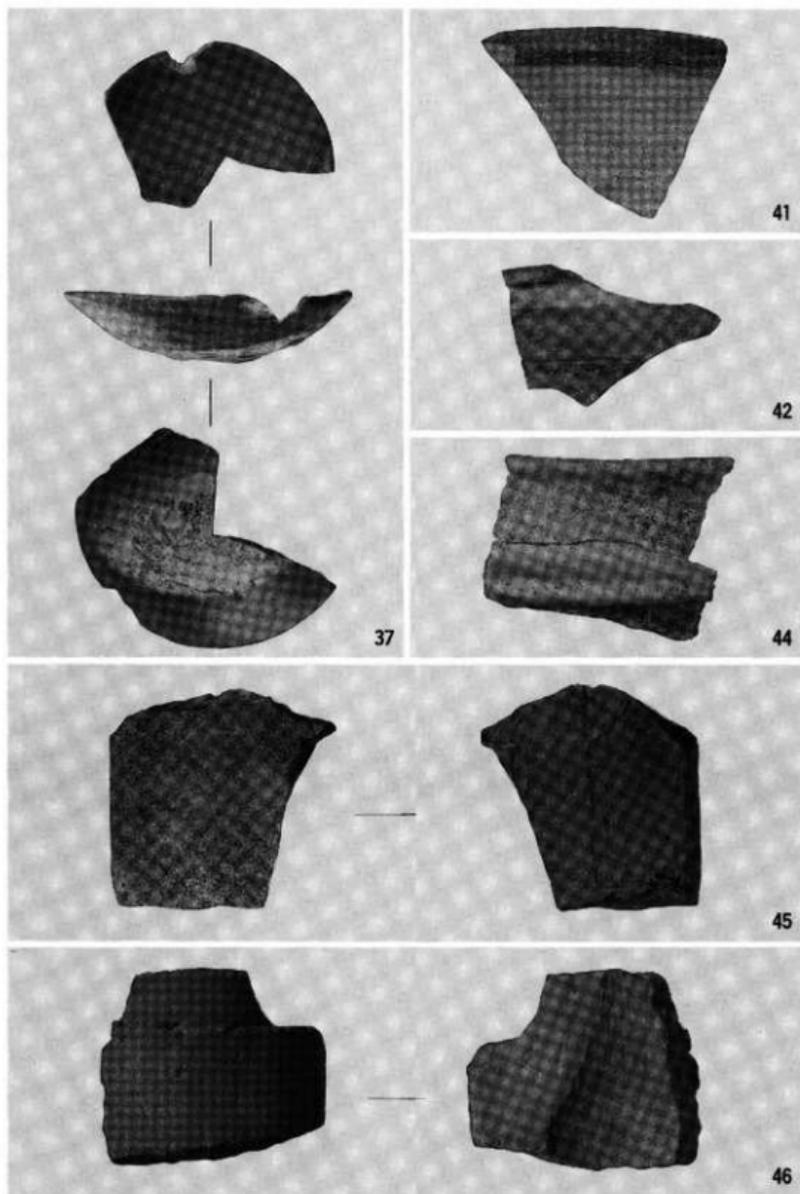


SK-1 (2~5・11・12・14~16) SK-2 (17・20・22) 出土遺物



S K-2 (23 · 25 · 26 · 27) S K-3 (18 · 24) S D-2 (28 · 29 · 34)

S P-15 (30 · 33 · 35 · 36) 出土遺物



SD-2 (37・45・46) SD-3 (42) SP-13(41) SP-15(44) 出土遺物

(財)八尾市文化財調査研究会報告 33

成法寺遺跡

<第1次調査～第4次調査・第6次調査>

発行 平成3年9月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号
TEL (0729)94-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582 大阪府柏原市本郷5丁目6番25号
TEL (0729)72-5918

表紙	レザック66	②260 kg)
本文	書籍用紙	< 70 kg)
図版	マットアート	<135 kg)

